

音階は宮、商、角、徵、羽、變徵、變宮の七つで、各階の有する階段は隋の樂律である

十二律に一致してゐる。のみならず、それらは印度、ペルシヤ、ヨーロッパのものとも一致し、音樂が世界共通の祖型から發達したものであることを示してゐる。今、それらを比較して見ると、上掲の表の如く大同小異である。^(三九) 七聲十二律については田邊尙雄氏の精察な研究がある。^(三九)

左部の唐樂には振舞、皇帝破陣樂、團亂旋、春鶯囀^(四〇) (壹越調)、賀王恩、打毬樂、大食調、青海波、盤涉調などの諸曲がある。大食調は大食^(四一) 人の曲で、アラビヤ系統のものであり、盤涉調は印度のバンジャブに關係があらうといはれる。^(四〇)

林邑樂は菩薩舞(沙陀調)、拔頭舞(大食調)、迦樓頻舞(壹越調)、倍臚破陣樂(平調)、按摩、壹越調などで、拔頭舞

	音階名	印度略符	歐洲略符	波斯音階	漢名	西域名
1	Sadja	Sa	C	Da	宮	婆陀力
2	Rsabha	Ri	D	Re	商	雞識
3	Gāndhāra	Ga	E	Mi	角	沙識
4	Madhyama	Ma	F	Fa	變徵	沙侯加濫
5	Pañcama	Pa	G	Sa	徵	沙臘
6	Dhaivata	Pha	A	La	羽	般贍
7	Nisada	Ni	B	Be	變宮	候利寔

は吠陀時代のペツ(Petu)の神話に基づいたもの、迦樓頻舞は郭公を意味する迦陵頻伽(Kalavinka)から、按摩は女を意味するアマ(Anna)から來たもの、倍臚破陣樂は迦毘羅城を陥れた毗盧擇迦(Vindhaka)の人名から出た名稱である。

高麗樂の中には百濟、新羅、渤海の三樂も含まれ、新鳥蘇、古鳥蘇、進走禿、退走禿を四大曲といふ。

以上の諸要素を吸収して、寧樂時代の音樂は複雑なものとなつたが、まだそれらを打して一丸とするには至らなかつた。

かうした複雑な要素を有つた飛鳥寧樂藝術を一つで代表せしめることの出來るのは文様である。飛鳥時代の代表は藝術史家に『飛鳥文様』と呼ばれる文様である。飛鳥文様は忍冬、即ちハニサックル(Honeysuckle)を意匠したギリシヤの文様が世界に擴がつたもので、多少づゝ異つてはゐるが、大體に於いて一致してゐる。我邦の玉蟲厨子の忍冬文様は、朝鮮新羅の巴瓦、支那雲岡の佛像、支那トルキスタンの陶器、西北印度のユーフザイの卒塔婆、印度アラバットの阿育王石柱頭部、ペルシヤのケルマンシャー王宮の門などに現はれてゐるもの

と同巧異曲であるが、玉蟲厨子の文様は中アジャのものよりギリシヤのそれに最も多く酷似してゐるのを見る^(四一)。次に寧樂時代の代表は、いはゆる『寶相華文様』で、これは西域諸國に發達した理想花が唐代に支那に於いて一層理想化せられ、それが我邦に入つたもので、犍駄羅、安息、印度、西域諸國に其姉妹を見出すことが出来るのである^(四二)。第九圖版。

上述の如く、世界的な外來藝術が本來藝術の上に加はつて、飛鳥時代の藝術は技巧進み、表現進み、天平時代に至つて其全盛を見出したので、美術史家は往々にして天平期をギリシヤのペリクレス時代に比較する^(四三)。いはゞ日本藝術は飛鳥寧樂時代に於いて最高調に達し、爾後幾たびも改造が加へられたけれども、其大に於いて飛鳥寧樂時代に若くものはないとも見られる。

第四節 自主技術の發生

次に展開した平安時代の文化相は、寧樂時代の繼承に過ぎないけれども、技術史の上から観ると、此時代は外來技術を同化して我物となし、模倣の域を

超えて自主、獨創の境に入つた重要な時代である。普通美術史家は此時代を三つに分ける。弘仁時代、藤原時代早期、藤原時代晚期がそれである^(四四)。

(一) 弘仁時代

弘仁時代は平安奠都から寛平年代まで約一世紀の間で、唐との交通が依然として續いた爲め、その模倣も行はれたが、佛教は新たに天台、真言の二宗が輸入せられ、また天平時代以來醸成されつゝあつた神佛融合が實現された爲め、前代に見られなかつた現象が發生した。たとへば建築に於いては延曆寺、金剛峯寺が建てられたが、遺構がないから詳細なことはわからぬとして、殘存してゐる室生寺の金堂と塔婆とを觀ると、規模が狭小で、木割が細く、柱には尙ほエンタシスの名殘があるといふだけで、組物や屋根の葺き方や相輪や佛壇やに特異點が見出されいはゆる真言宗佛殿の型式を示してゐる。神社建築では八幡造りと日吉造りとが出現し、固有の神明造りに流れ造りや佛寺様式を加味して、神佛混淆の思想を表現した。また彫刻に於いては木彫が盛んになり、佛像以外に神像が主題とされるに至つた。宮殿建築は首都の移動と共に

に頻りに行はれたが、どんな遺構も今日まで残つてゐない。しかし東西一五〇四丈、南北一七五三丈の長方形の平安京の中央を縦に貫く朱雀大路あり、其北端に東西八町、南北一〇町、四方に十二門を有つた宮城の一郭があり、そこに朝堂院、豊樂院、内裏があり、前者には十一間四面、單層、四注の大極殿が高い石壇の上に立ち、後者には九間四面、單層、入母屋造りの紫宸殿、仁壽殿、清涼殿、後涼殿などが建てられてあつた外常寧殿、眞觀殿、弘徽殿、登花殿などの後宮もあつたから、壯大無比の景觀を呈したに相違ない。そして宮城の前には貴族及び庶民の住宅があつたから、建築の技術は前代に比して餘程進んだと思はれるが、それを證示すべき材料がない。

彫刻に於いては神護寺の藥師像と虚空藏像、東寺の不動明王像、唐招提寺の大日如來像、觀心寺の如意輪觀音像、廣隆寺の地藏像、室生寺の金堂本尊釋迦其他の佛像、金剛峰寺の金堂本尊其他の諸佛像、興福寺の十二神將像を初め、神像としては藥師寺の應仁天皇像、仲津姬像、神功皇后像などがある。中でも神護寺や東寺の虚空藏像は手法が異つて居り、面相と衣裝とに角立つたところが

ある。唐招提寺の大日如來は端嚴を以て、觀心寺の如意輪觀音は柔婉を以て、時代の代表作と見られてゐる。前述の三神像は小座像で、全體の鈞合よく、木彫の上に彩色も残つてゐて、弘仁時代の様式と手法とを偲ぶとが出来る。

繪畫は僧侶に空海、最澄、義眞、圓珍ら、多數の名人があり、俗人には百濟河成、巨勢金岡の二人があり、いづれも其靈妙の筆を以て畫壇に貢獻した。遺品は必ずしも多くないが、神護寺の兩界曼荼羅は空海の作といはれ、後世曼荼羅の粉本となつた傑作である。金剛峰寺明王院の赤不動像は圓珍の作といはれ、六尺に三尺の大幅で、全體に赤色を多く用ひた點に於いて、面相が凄壯を極めた點に於いて著名である。これらの佛畫は皆密教的で、前代の顯教的なそれと異つてゐる爲め、時代の信仰の反映として弘仁時代を代表するのである。河成は山水畫をよくしたが、其遺品は残つてゐない。金岡の作といはれるものには法隆寺の多聞天像、蓮華屏風等がある。彼れが清涼殿の障子に描いた馬が夜抜け出していつたといふ話でも、時代の名手であつたことは知られる。建築工事につれて、金工、木工、漆工、其他實用藝術の進歩するのはいふまでも

ないことであるが、弘仁時代に於いて特に進歩を見たのは漆工で、平塵、末金鏤、平蒔繪などの技巧が應用せられた。^(四) 仁和寺の蒔繪法文冊子宮は、全體が黒漆で塗られ、それに金銀の蒔繪を施したもので、寶相華の間に迦陵頻伽が配してある。同寺の寶珠宮は平塵に蒔繪で、延曆寺の經函は全體に寶相華文様が蒔いてある。金工は多く失はれたが、興福寺南圓堂の銅燈籠は弘仁七年の作で、時代の金屬細工の技術を代表するものといはれてゐる。

(二) 藤原時代早期

工藝史上の藤原時代は遣唐使廢止せられて、盲目的な支那模倣が止むと同時に、民族的自覺が呼び醒まされてから、政治上の權力が貴族から武家の手に移るまでの間、彼是三百年間を指していふので、民族的自覺に伴うて現はれた技術の同化現象を以て、時代工藝の特徴とする。此時代は學者によつて早期と晩期とに分たれる。

「早期に於いては前代の繼承に過ぎない觀があつたが、前代から既に多少芽生へつゝあつた同化的現象が段々顯著になつて、弘仁時代に見られない徵象

を有つに至つた。」これには色々原因があるが、第一には唐との交通が絶えたと爲め、文化が外部の刺戟を失つて固定し始めたこと、第二には藤原氏一門を中心とする宮廷官僚が美的生活を送つて、享樂の爲めに諸々の施設をしたこと、第三には淨土教が起つて佛教の民衆化が行はれたこと、第四には宮廷婦人の地位が高まつて女性的趣味が普及したことなどが著しいもので、これらの諸動因が相集つて藤原時代の同化工藝を勃興せしめたことに疑ひの餘地はない。先づ第一動因の爲めに文化の固定したことが、自家の發明工夫を要求して、清新な新手法を出現せしめた。第二動因の爲めに、建築土木工事が起され、調度品が造られた結果、一面裝飾藝術の進歩を促し、他面、音樂其他の純正藝術を高潮せしめた。第三動因からは新しい佛教美術が出現し、第四動因からは優美、華麗を理想とする表現が出現した。

建築について見ると藤原道長の建てた法成寺と白河天皇の建てられた法勝寺とは、時代の佛寺の代表であつたと思はれるが、兩寺とも焼けて遺構を止めない。法成寺は實に立派なもので、其金堂の内部には紫檀などの名木を用

ひ、蒔繪、螺鈿を施し、寶玉を鏤め、壁畫を描き、定朝の作つた三丈二尺の大日如來像が安置されてあつた。^(四九)堂の前には加茂川の水を引いて池を造つた。かうした風に、それらの日には自然の光景と建築とを調和せしめることが行はれた。其好適例は平等院である。平等院は初め、源融の別業であつたが、道長から頼通の手に移り、永承七年に寺とせられたもので、鳳凰堂、經堂、金堂、三重塔などがあつたが、今日残つてゐるのは鳳凰堂のみである。これは阿彌陀堂で、淨土教の盛行を象徴するものである。堂は宇治川を隔て、朝日山に對し、風光の明媚な點に於いても無比であるが、堂の建築に於いては一層珍らしく、方三間の本殿の左右に翼廊が造られ、後には尾廊が造られて、鳳凰が翼を張つた姿を象つてあり、豎面また頗る變化に富んでゐるが、しかも其變化を對稱によつて統一してゐる。屋根の如きは入母屋造り、切妻造り、寶形造りを混用し、柱も圓と角とを、組物も三手先と一手先と三斗とを混用して變化を求めると、技巧の限りが盡してある。^(五〇)

此外、醍醐寺の五重塔、大原極樂院、法隆寺大講堂、淨瑠璃寺の本堂などは、當代

の建築で現存してゐるものである。

神社建築は前代と大差なく、流れ造り、八幡造り、日吉造りが次第に完成しただけで、新様式は生れなかつたが、鳥居を樓門に改め、瑞籬を廻廊に改めることが流行したのは、佛寺築建の神道化と見ることが出来る。宇治上神社は天喜年代の建築で、流れ造りの社殿三棟を連結した點に於いて、鳳凰堂と同巧異曲である。

内裏建築から分岐したものに寢殿造りがある。純日本式建築で、寢殿が中央にあり、其後と左右とに對の屋があり、それらは渡廊でつなぎ合はされ、寢殿の前には池を造り、池には廊を延長して泉殿と釣殿とを作つた。木割は繊弱で、彩色は用ひず、輕快と瀟洒とを其本色とした。寢殿造りは、時代の進歩した建築技術の粹を集めた獨創的なもので、こゝに純粹な日本趣味の現はれがあるといつても差支へない。^(五一)

彫刻は淨土教の興隆に伴ひ、阿彌陀像が盛んに彫まれたが、神像も可也澤山作られ、裝飾用の彫刻は前代よりも盛んになつた。材料は金屬よりも木材が

觀心寺
聖觀音像
淨瑠璃寺
吉祥天像

主とせられた。僧侶の中からは惠心僧都の如き名人が出たが、其作は不明である。名工定朝は法成寺の金堂本尊其他を彫刻したのみならず、子弟を養成して多数の名工を輩出せしめた。鳳凰堂の本尊は定朝の作といはれるものの中たしかな一つで、面相は圓滿優美を極め、衣文は流暢で、手法が如何にも穩やかである。觀心寺の聖觀音像と藥師寺の十一面觀音像とは、延喜年間の作で、時代の標準となるものである。淨瑠璃寺の吉祥天像は、顔を白く塗り、衣文を彩色して、婉麗と優美とを兼ねてゐる。

繪畫もまた彫刻と同じ過程を進んだ。即ち淨土教の隆盛と共に彌陀像を描くことが流行し、また佛寺には壁畫が描かれ、寢殿造りでは山水、人物などを障子に描くことが行はれ、其結果、佛畫の外に風俗畫、歴史畫などが出現した。高野山の彌陀二十五菩薩來迎圖は惠心僧都の作といはれる。巨勢派の名人には金岡の子の相見、公忠、孫の公茂、公茂の玄孫弘高が著名である。弘高はちやうど道長時代の人で、幾多の傑作を出したが、それと肩を比べたものに詫摩爲成があり、後の春日派、土佐派などは此人から系統を引いてゐる。鳳凰堂の

扉繪は此人の作である。

此時代に急劇な發達を遂げたのは工藝美術で、金工、漆工、木工、象嵌、螺鈿、織工に於いて特に進歩を見た。金工では平等院の鐘が形の美しくしさと、天人、獅子、唐草などの文様の見事さに於いて著名である。鳳凰堂の屋上の銅鳳も一遺品である。漆工及び螺鈿では金剛峯寺の經唐櫃と鳳凰堂の佛壇とが屈指のもので、前者は菖蒲の花の咲いた澤に小鳥の飛んでゐるところを現はし、蔘繪の間に螺鈿が交へてあり、後者も黒漆を塗つた間へ螺鈿が施してある。木工では鳳凰堂の天蓋が注目すべきもので、軒は透彫で唐草文様を表はし、内部を折上組入天井としてある。織工では性信法親王の横被が仁和寺に残つて居る、寶珠文及び七寶文の倭錦で、色彩の豊富と按配の巧妙とが異色である。(五二)

概していへば藤原時代早期の藝術は、貴族的、耽美的、享樂的であり、従つて天平時代に於けるが如く、豪華、壯麗、遒勁の味に缺けてゐるけれど、優美、華麗、綺巧の味を名残りなく出して、如何にも風光明媚な島國日本のものらしい、やはらかない氣分が現はれてゐる。

(三) 藤原時代晩期

文化は横に方處的周圍を有つと同時に縦に、時間的區劃を有つ。一區劃内の文化は即ちいはゆる時代文化である。時代文化の開展は大方波狀をなして進み、初めに低く、中ほど高く、終りには段々低くなつてゆく。即ち創始から興隆を経て頽唐に赴く。平安時代もまたさうで、弘仁時代は其初めであり、藤原時代早期は其全盛期であり、晩期は其頽唐期である。

藤原時代晩期の建築は、中尊寺と嚴島神社とに代表せられる。中尊寺は藤原清衡が創建したもので、金堂、三重塔、經藏、鐘樓、金色堂など、寺塔四十餘宇、禪坊三百餘宇あつたことが『東鑑』の（五三）記事で知られる。金色堂は方三間單層寶形造りで、建物の外部はすべて漆を塗り、其上に金箔を置いた。内部は床板を黒漆で塗り、内陣長押、貫、組物などはすべて平塵の上に螺鈿で寶相華を表はし、所々に打たれた金銅の金具の中心には七寶或は珠玉が嵌入してある。經藏も方三間單層寶形造りであるが、彩色が剝落して今は見る影もない。嚴島神社は仁安二年に清盛が再建したものであるが、其後火災に罹り、屢々

改造されたけれど、元の位置と設計とは保存せられたらしい。山を後に、海を前に、建物が全く自然の懷の中に抱かれるやうにした技巧は、時代の好尚とはいへ、決して凡手ではない。

春日若宮の神樂殿は治承年間の建立であるが、檜皮葺の屋根は勾配がゆるく、垂木は疎垂木で、木割も一般に細く、輕快と瀟洒との趣に富んでゐる。

彫刻界は定朝の系統を引いた職業的名家が輩出し、従つて僧侶が餘技として造佛に従事することはなくなつた。當代の五大家といはれるのは頼助、康助、圓勢、長圓、長俊で、順々に興福寺の佛體、白河の塔の釋迦像、法勝寺の觀音像、金剛院の佛像、圓勝寺の佛像を刻んだ。（五四）それらの日には淨土思想が一般に普及し、従つて彌陀像の製作が盛んであつたが、たゞ舊形式を追つただけで、技巧は綺麗に流れ、優麗といはうよりは繊美な表現を有つに至つた。

繪畫は佛畫の外に、風俗畫、歴史畫、物語畫が勃興して、いはゆる繪卷物に於いて時代を特質づけた。畫家は多くの流派に分れて、巨勢派の外に、詫摩派、春日派、土佐派が現はれた。巨勢派は弘高以後注目すべき名人が出なかつたが、詫

摩派では爲遠が佛畫で有名である。春日派は春日神社の繪所預であつた藤原隆親から起り、土佐派は藤原基光から起つてゐる。天台座主であつた僧覺猷は輕妙な筆で瓢逸な畫を描いたが、しかも必ずしも現實を離れたものでなく、鳥羽に住んだ爲めに鳥羽僧正の名によつて一般に知られた。高山寺の鳥獸戲畫と信貴山縁起とは彼れの作であるといはれる。

繪卷物として著名な遺品は、前記の鳥獸戲畫、志貴山縁起の外に源氏物語畫卷、餓鬼草子、地獄草子、伴大納言畫卷、善哉童子繪卷がある。源氏物語繪卷は隆能の筆といはれるが明らかでない。伴大納言繪卷は伴善男が應天門を焼いて其罪を源信に負はさうとした陰謀が露顯して流されたとを題材としたもので、普通には光長の作といはれる。前者はよく時代の風俗を寫して艶麗、優美裝飾的であるに反し、後者は寫實的に人物を描き出して紙面に活躍せしめ、放膽な彩色によつて表現を自由に(五五)してゐる。

工藝美術の側では、金工、漆工、木工、共に爛熟の域に達した。中尊寺の金色堂は、いはゞ藤原時代晩期の工藝美術陳列所のやうなもので、四個の佛壇は矩形、方形、八角形の三様あり、孔雀、寶相華、伽陵頻迦を打出した金銅の羽目を入れたり、透彫の金具をつけたり、黒漆の上に螺鈿の文様を現はしたりしてある。嚴島神社の經卷の軸は水晶製であるが、其兩端は圓形、方形、寶珠形、五輪塔形など、三十餘卷一々異つた意匠になつてゐる。

ひつくるめて藤原時代晩期の技術を見ると、純日本式特色を濃厚に發揮し、獨創的な諸要素さへ有たれて來たけれど、表現が優麗を通り越して纖細綺靡に陥り、力を失つた傾きのあるのは事實である。男性的な道勁、森嚴の表現は全く消え失せて、女性的な柔婉、纖美の趣味が著しく目立つて來た。けれども繪卷物のやうな特殊型の藝術が勃興して、本來靜的、瞬間的である繪畫を動的、永續的にしようとした意圖は面白い。グラフィカルな、フィルム的なところが繪卷物をして世界美術史上に位置を占めしめるのである。また社會史的に考察すると、當代の藝術的作品が京都附近のみならず、遠い地方、たとへば平泉や嚴島などに分布してゐる點が注意を引く、何故なればさうした分布は、地方にいくつかの文化中心が出來て、經濟的にも、技術的にも、相當な力を貯へて

ゐたと見られるからである。此事は政治上で中央集権の制度が崩壊し、貴族の手から武士へ統制の権力が移らうとするこの豫兆でもあつた。

第五節 支那技術の影響

源頼朝が幕府を鎌倉に開いてから、政治上の實権が武家の手に移り、一切の文化が武家を中心とするに至つた結果、これまで、社會を支配してゐた貴族的好尚、宮廷的趣味は、一方に於いて前代の殘存として京都を中心とする西部地方に尙ほ見られたけれど、他方に於いては新時代の象徴として鎌倉を中心とする東國地方に、武士的好尚、男性的趣味が生活様式の上に現はれて來た。鎌倉時代の美術、工藝、一切の技術はかうした背景を負うて生れたが故に、一面に於いては前代の繼續に過ぎない舊様式を保存し、他面に於いては新時代の理想を具現した新様式を捕捉した。

鎌倉武士の生活理想は、虚名を棄て、實力を握り、歡樂の代りに忍苦を求め、克己の裡に充實の満足を得ようとすることであつた。彼等の生活理想は

いはゞ『武士道』を體現することであつた。新渡戸稻造博士は武士道の内包を考察して、それが正義 (Justice)、勇氣 (Courage)、慈悲 (Benevolence)、禮儀 (Politeness)、信實 (Veracity)、名譽 (Honor)、忠誠 (Loyalty)、自制 (Self-control) 等より成ることを注意せられ、大森金五郎教授は武士道をストア主義に比較して、克己、嚴肅を生活の價値中心とした點は兩者相似てゐるが、ストア主義が知に傾いたに反し、武士道は情をも重んじ、前者が個人中心であつたに反し、後者は團體中心であつたことを指摘してゐられる。^(五七)

かうした社會生活が技術に反映するとすれば、それには平安時代と異つたところの特性が現はれねばならぬ。平安時代の好尚は人ならば女、植物ならば花にたとへらるべきものであり、鎌倉時代のそれは男、實にたとへらるべきものであつた。それ故に、前代の繼承たる京都中心の舊技術よりも、鎌倉中心の新技术に於いて、私達は此時代の眞の姿を見出すことが出来るのである。

(一) 建築の五様式

先づ建築について観ると、前代の繼承と見るべきは謂ふところの『和様』であ

り、新時代の表現と見るべきは即ちいはゆる『唐様』である。和様は説明するまでもなく藤原時代の技術的系統であり、唐様は禪宗と共に我國に入つたところの支那的系統であるが、これら以外に別に大佛殿再建の爲めに輸入せられた『天竺様』が存在し、天竺様は和様と合體して『新和様』を作り、新和様はまた唐様と合體して『觀心寺様』を作つた。^(五八)

和様建築は宮殿、神社のそれに見られ、藤原時代の色彩が濃厚に現はれてゐる。此様式の遺構には嚴島神社の客神社、春日神社の本殿、宇治上神社の拜殿などがあつたが、中でも春日神社の本殿は、入母屋の前面に向拜がつき、組物は出組で、裏股はすばらしい出来榮えである。宇治上神社の拜殿は、五間三面の單層、入母屋造りで、角柱、舟肘木、檜皮葺などは皆寢殿造りの形式を備へてゐる。これらは和様である。次ぎに佛寺建築について觀ると、遺構には興福寺の三重塔、蓮華王院の本堂などがある。前者は床を張り、廻縁を廻らし、石壇の上に立つてゐない點で、日本化した塔の代表といはれる。内部の柱、貫、天井は寶相華を極彩色で現はし、藤原時代の餘風を存してゐるが、それよりも一層纖巧に

流れてゐる。後者は名高い三十三間堂で、桁行三十三間、梁間五間の細長な形式を有つて居り、全く日本的意匠である。

唐様建築は禪宗と共に我邦に輸入された新建築様式である。鎌倉時代初期に榮西禪師が宋から歸つて臨濟派を傳へ、其門人道元禪師が曹洞派を傳へたのが禪宗の初まりで、其主觀的な文章言語に拘はることなしに、徑ちに根本精神を把握しようとする禪那 (Dhyana) の教義は、理性生活を慾求するものが多くの武士階級の嗜好に投じ、精神修養の一方便としてこれに歸依するものが多く、忽ちに弘布して教勢が興隆し、京都及び鎌倉の附近に禪宗伽藍が造營されることになつた。五山十刹は即ちそれらの日の建立であつた。しかし、それらは多く失はれた。鎌倉の圓覺寺舍利殿のみが遺つてゐるが、此遺構すら大正の大震災に大損害を被つた。圓覺寺は弘安五年(一二八二年)の創立で、總門の次ぎに三門があり、それを入ると、佛殿、法堂が一直線に立てられて、左右對稱的の配置を有つてゐた。^(五九)舍利殿はそれらより後の建立で、重層、入母屋造り、石壇上に立ち、内部は瓦敷き、柱は圓く、脚に木製礎盤があり、上部にチマキと臺輪

とがある。中央に須彌壇を安置し、其後の柱から前の柱へ大虹梁が渡され、裳層の柱には蝦虹梁が渡されてゐる。屋根は茅葺で、垂木は扇垂木である。組物は唐様で、肘木の端が一樣の弧線から成り、尾垂木の端も曲り、小天井や支輪がない。内外とも白木で、殆ど無装飾である。外觀は藤原時代とまるで異り、屋根の急勾配と不釣合とが安定を缺いてゐるけれど、内部の手法が自由で、流暢な弧線と軽快な表現とが簡素な鎌倉の武士的好尚を漂はしてゐる。

「天竺様建築は重源上人が宋の鑄工陳和卿を招聘して大佛を鑄造し、大工、石工をして大佛殿と南大門とを建てしめた時に採用された一様式である。大佛殿は焼けたが、南大門は残つてゐる。それは五間三層の樓門で、下層は腰屋根、上層は入母屋造りで、組物は上下とも七手先で、挿肘木を用ひてゐる。それがいはゆる『天竺様』の特徴である。鐘樓の建築も同年代で、頭貫、虹梁の貫などには天竺様の線形がある。

新和様建築の代表は伊豫の太山寺本堂で、大體は和様でありながら、細部に天竺様の加味された折衷式建築で、嘉元三年(一三〇五年)以前の築造に係る。

これは單層、入母屋造り、正面七間、側面九間の建物で、其前部四間を外陣、後部二間を後陣、中部三間を内陣とし、木割が雄大で、釣合はよく取れてゐる。細部は天竺様の線形を用ひて、主たる和様と調和せしめ、組物間の墓股には草花の寫生的な透彫がある。

観心寺様の代表は観心寺で、それは楠正成が建武元年(一三三四年)に建立したものである。鎌倉時代の晩期を特質づける建物で、單層、入母屋造り、七間四面で、前に向拜がつき、周圍に廻縁が廻らされ、内外陣の間を格子戸で割つて、佛壇を内陣の奥に設け、其前に厨子を置き、又其前に護摩壇が設けてある。壇の左右の柱に張られた板壁には金剛界、胎藏界の曼荼羅が描かれてゐる。組物は柱の上は和様の三斗で、其間に唐様の双斗が用ひられ、また繪形、線形が施されてゐる。此様式は新和様に更に唐様が加はつたもので、あらゆる佛寺建築様式の總和と見るとが出来る。此様式は観心寺に代表されるが故に、伊東忠太博士はそれに『観心寺様』の名を與へたのであるが、同寺の外、瀧山寺本堂、萬壽寺、愛染堂、長保寺本堂などがある。

如上の建築上の變化は、全く南宋の影響を受けた結果で、繪畫上の變化と其趣きを一にしてゐるやうに思はれる。

尙ほ一言述べなければならぬのは、此時代に邸宅建築の様式が創められたことである。それは貴族中心の平安時代に起つた寢殿造りに對立する『武家造り』で、武士中心の鎌倉時代を特質づけるものである。武家の邸宅は外部を鰯板はいたで圍み、門——それには揚士門と櫓門との二色ある——を入ると、右に遠侍あり、前面の車寄から縁に由つて室に達する。屋根は板葺きで、瓦は一切用ひられなかつた。^(六)此建築様式は、諸侯が多數の武士を養ひ得ると同時に、守備を全くし得べき城郭としての性質を具ふる必要から發生したもので、様式からいへば和様が主で、鎌倉時代の社會相を如實に説示する技術的表現であつた。

(二) 彫刻

鎌倉時代の初めに宋から陳和卿、陳曼壽の來たとは、色々の點で技術界を刺戟したに相違ないが、それよりも直接に大きな衝動を與へたのは東大寺、興福

寺の再興に當つて、寧樂の舊都に遺つてゐた天平時代の諸傑作を面り見たとて、技術家、殊に彫工はそれに刺戟せられて新機運を開拓するに至つた。藤原時代の彫刻に光りあらしめた定朝から五代目に康慶といふ逸才があつて、自由な技巧を以て雄健な作品を多く出したが、中でも建久年間に作つた東大寺の四天王像は、鎌倉風の基を開いた傑作であつた。彼れの子に運慶と定覺とがあつた。運慶は單に同時代のみならず、彫刻史上の大家で、東大寺南大門の二王、及び興福寺の世親、無着像は寫生を重んじた、力に充ちた力作である。定覺の作品は遺つてゐない。康慶の弟子に快慶があつて、運慶と名を等しうししたが、運慶が天部に長じたのに反し、快慶は菩薩に長じて居り、相並んで硬軟映發する大作を遺した。運慶の子六人の中では、湛慶が最も著名である。

以上の外、興福寺の龍燈鬼、蓮華王院の二十八部像、鎌倉大佛等は、同時代の逸作として知られてゐる。鎌倉大佛は銅像としては東大寺のそれに亞ぐ大作で、高さ四丈八尺ある。神像としては吉野水分神社の玉依姫命像が名高く、藥師寺の天津皇子像、鎌倉明月院の上杉重房像は、東大寺の重源上人像と共に、い

づれも寫實的で、室町時代以降の肖像を支配した指導的のものである。

鎌倉時代の彫刻は、鎌倉大佛を除くの外、材料が殆ど木に限られてゐたが、藤原時代のやうに金箔を置いたり、彩色を施したりしないで、生地を其儘に表はすのを常としてゐた。眼に玉眼を入れることは運慶から始まつたと俗間では傳へる。康慶、運慶、快慶らの大才が出て、天平時代を凌がうとする傑作を出したことは當代の誇りであるが、中でも、運慶らが寫生を重んじて力のある天部の傑作を遺したことは特筆せられねばならぬ。かうした遒勁、剛強の表現に富んだものゝ出たこと、木材を生地のまゝに現はしたもののゝ多いことなどは、たしかに武強質實の鎌倉時代精神の反映と見るべきであらう。

(三) 繪畫

鎌倉時代に於ける神社、佛閣は、廣大なる領地を有して其經濟を支持した爲めに、春日神社、其他の大きな社寺では、繪所を置いて、繪佛師に佛像佛畫を作らしめたから、それらは生活上の安定を得て技術に精進することが出来た。^(六三) 宮廷の繪所もまた同じ關係にあつたと見なければならぬ。

それらの日に於ける流派の消長を窺ふと、巨勢派は殆ど全く振はず、多少詫摩派の技巧を取り入れて時代の嗜好に迎合しようとしたといはれる。此派の畫家では惟久が著名である、元亨年間の人で、後三年軍記繪卷は其作だといひ傳へる。^(六三) 詫摩派は前代から佛畫に宋元の風格を尙へて、新味を出すことに努めてゐたが、榮賀に至つて李龍眠、元の顔輝の筆意を汲んで、支那風の表現をなすことに成功した。澄賀、勝賀、良賀は、順々に建仁、元久、嘉祿年間の人である。^(六四)

士佐派は前代の末に光長が出て名を揚げ、巨勢派や春日派を壓倒した。名人には信實、慶忍、光吉、光秀などがある。信實は寫生に長じ、特に光長の風格を慕うて肖像畫を作つた。四條天皇は寫生畫を悦ばれて、彼れに北面、下藤、隨身などの肖像を描かしめられたといふから、それらの日に古拙な踏襲的畫風が歓迎せられず、新奇な現實的技巧の愛重せられてゐたことが知られる。信實が餘業を以て光長に比較せられたのは、其畫風が時代の人心に投じてゐたからであらう。^(六五) 子の爲繼以下、相繼いで父祖の業を傳へた。慶忍は住吉神社に仕へてゐたので住吉派といはれるが、所傳に従へば『平治物語繪卷』は彼れの作で

あるといふ。光吉は『法然上人繪傳』を、圓伊は『一遍上人繪傳』を描いたといひ傳へる。此外春日派から出て土佐派を學んだ長隆は『任吉物語繪卷』と『蒙古襲來繪詞』との筆者であるといはれ、鎌倉時代の繪卷物中傑出したといふ定評のある『春日權現靈驗記』は、晩期に出た高階隆兼が描いたものだといはれる。其豊麗な色彩精緻な手法は、當代の第一人者であると美術史家はいふ。

此時代の晩期に可翁が元に留學して、十年に亘つて畫を牧溪から學んで歸朝し、北宗畫の一派を立てたことは忘れてはならない。建築に『唐様』が起つたが如く、繪畫にもやはりそれは現はれねばならぬ運命であつた。

(四) 工藝品

美術品は必ずしも全社會の好尚を代表するものでないが、實用上の工藝品は多く時代相を反映する。平安時代晩期から甲冑製作の大家たる明珍家が現れ、子孫相繼いで其業が榮えたのは、全く時代の要求に因るものであつた。

明珍家の始祖紀宗介は出雲の人で、京都に出て名を揚げ、後鎌倉に移つた。宗介から宗安まで十代の間の作を、世間では『十代の作』と稱して尊重する。^(五六)源平

抗爭時代に吾邦の甲冑は特に進化し、世界に類のない伸縮自在の鎧の袖が發明せられた。^(五七)此事は兵器發達史上の珍である。

刀劍は軍國的機運の動いた平安時代晩期から名工が出た。京都三條の宗近を初め、備前の友成正恒は著名である。後鳥羽天皇は宮中に十二人の番鍛冶を召して刀劍を鍛冶せしめられたが、其中から一文字則宗、大文字助宗の如き良工が出た。其後、備前には光忠、長光父子、京都には藤四郎吉光、來國行などが現はれたが、吉光の製作は特に優良で、いづれも天下の寶刀と目せられた。

熱田神宮の蛛切、大友氏の骨塚などは皆な彼れの作であつた。時代の晩期に鎌倉から岡崎正宗が出で、其門に郷義弘、志津兼氏、備前兼光らの十哲が出た。

日本刀の切味は眞に世界にユニックなもので、名工は皆な其鍛冶に工夫を凝らして、ちやうど宗教上の儀式の如くに全精神を刀劍に打ち込んで、無念無想の形で鎚を取つた。日本刀の鍛冶術は複雑を極めたもので、これまた世界に類が乏しいと、俄國一博士はいつてゐる。^(六八)これまた軍國的機運の醸成した一文化現象であつた。

木工としては『鎌倉彫』の創められたこと、漆工としては『時代蒔繪』の現はれたこと、石工としては東大寺南大門前の獅子や三月堂前の石燈籠の如き傑作が遺されたこと、陶工としては尾張の加藤四郎左衛門景正が、貞應二年(一二二三年)に元に渡つて、五年間の修業を積んで歸つた後、瀬戸村に窯を開いて支那の土で製作し、いはゆる『藤四郎焼』の名を残したことなどが特記すべき事項であつた。

これを要するに、鎌倉時代の技術は一方、前代から遺されたものを整理し、改善し、完美して、『和様』の特質を發揮すると同時に、他方、宋元の新様式、新方法を取り入れて、舊來になかつた『唐様』の新技术を造つたのが技巧上の顯著な事實である。また其製作理想上から見ると、貴族的、奢侈的、織美的好尚が次第に失はれて、武士的、質實的、剛健的趣味を帯ぶるやうになつた。此點に於いて技術は、たしかに、時代思想を代表するところの象徴と見る事が出来る。

第六節 同化技術の爛熟 頽唐

北條氏が滅んで、足利氏が興り、政府が鎌倉から京都に移つたので、それ以後を室町時代と呼ぶが、此時代には戦亂が打續いて、殆ど全く平和が見られなかつた爲め、技術の上では前二代に比較されるやうな大規模の遺構、遺品を見る事が出来ない。

いはゞ室町時代は一方に於いて、前代に起つた新様式を繼承して、それを一層民族生活に適應せしめて、所謂『同化技術』を爛熟せしめると同時に、他方に於いては宋、元、及び明の外來技術を摸倣して、舊套的な繼承技術に轉回の機運を與へようとしたけれど、實力が不足した爲めに萎縮し、却つて頽唐、懷廢、絶望に陥つた嫌ひがある。しかしながら、技術の世界は時代思想の刺戟を受けて、焦燥煩悶の裡に沈着安住を覓め、舊套の間に新味を尋ねた結果、墨繪の勃興、茶人趣味の發生、庭園技術の展開を促して、時代藝術に特徴あらしめたことは記憶せられなければならぬ。

(一) 墨繪の勃興

室町時代は、概して云へば、繪畫の時代ともいふべき時代である。巨勢派、詫

摩派、春日派は既に勢力を失つて、ひとり土佐派が倭繪を代表したが、それすらも新たに勃興した北宋派の爲めに一蹴せられた。北宋畫は前代晩期に歸化した元僧寧一山によつて傳へられたが、可翁も時を同じうして現はれ、枯淡の内包と適勁の外延とを以て、時代の禪宗的、武士的好尚に投じた。應永年間に如拙が出て以來相尋いで大家が輩出したが、中でも周文、秀文は著名である。周文の弟子には眞能と小栗宗丹とがあり、秀文の子には曾我蛇足があり、いづれも一家をなしてゐた。如拙、周文の畫風を學び、鎌倉で禪學を研めた小田等楊(即ち雪舟は、寛正六年に明に渡つて其山水を寫生して技術を練り、歸朝後山口に卜居して専ら畫筆に親んだ。傑作の遺つてゐるものも少くない。雪村は雪舟に影響せられ、別に一家を成した天才である。僧祥啓もまた著名である。時代の晩期に現はれた狩野元信は土佐光信の娘を娶つて繪所預となり、倭畫と漢畫とを調和して狩野派の基を開いた。東福寺の殿司であつた兆殿司は、やはり北宋畫と倭繪との中間を行つて、多數の傑作を遺した。

かうした水墨畫の流行は、時代思想が優麗な倭繪を嫌らぬとしたところか

ら起つたもので、鎌倉時代以來浸潤した禪宗の精神と武士道の好尚とが、宋元以來我邦に流入しつゝ、あつた北宋式畫風を歓迎し、それを以て在來の様式に換らしめることを要求し、遂に日本繪畫史上に『墨繪』時代を出現せしめるに至つたのである。^(六九)此時代好尚は、やはり建築や彫刻や他の工藝美術品にも現はれないではゐなかつた。

(二) 建築庭園術の展開

○室町時代の佛教建築は、前代から遺された和様、新和様、觀心寺様を繼承したに過ぎないが、宮殿建築に於いては、前代に起つた武家造りを平安時代の寢殿造りに加味し、それに庭園を尙へて一種の新様式を造就した。これは幕府が鎌倉から京都に移つて武人たる足利氏が公卿生活に感化せられた爲めに起つた現象で、義滿の金閣、義政の銀閣の如きは其代表である。金閣は鹿苑寺中の一棟で、庭園の池に臨んで建てられた。三層樓で、初中層は同一の大きさで檜皮葺、上層は小さくて寶形造りとなり、露盤の上に銅鳳が置いてある。上層は唐様で、禪宗風を帯び、初中層は和様で寢殿造りを基としたものである。上

層の内外に金箔を置いたのは、金色堂を摸したものだらうといはれる。銀閣は義政が文明年間に建てたもので、重層である點が金閣と違ふだけで、大體は金閣の摸倣であるが、下層は寢殿造りの様態を失ひ、室町時代の一特徴たる『書院造り』の形式を具へてゐる。

書院造りは寢殿造りと其構造を異にし、いくつもの家を連絡して一つの纏まつた建物とするもので、上段の間、書院床、床間、棚袋戸などを設け、明障子、襖障子、遣戸を用ひ、後には玄關を生じた。しかし此様式の大成されたのは次ぎの時代で、後に茶室様式を加へて現代の住宅様式に進化した。

庭園は支那の影響を受けて、寧樂時代に既に其萌芽を見、平安時代の寢殿造りにはそれが一つの構成要素となつてゐたが、室町時代に至つて長足の進歩をした。足利義滿の室町の邸宅は、花木が多く栽ゑられた爲めに『百花御所』と呼ばれたほどであつた。金閣の庭園は規模雄大で、衣笠山を庭園中に取り入れ、鏡湖と稱する池を穿つて多くの中島を設け、九山八海の名石を立て、背後の山に銀河泉、龍門瀑を設けて、山水の按排によつて其風光に變化あらしめた。

關白經嗣の記に『此年月、玉鏡と磨かれたる上に、尙ほつくり整へられたれば、月も輝くばかりなり。もとの木立、山のため、ずまひもおのれと所を得たるに、花の木どもをも栽ゑ添へられて、總門のうち一町あまりの馬場には、西東わけてひまなく、ひしと栽ゑ並べたる櫻、八重一重こきませて、今を盛りと此行幸を待ちかけたるも心有りがほなり』とあるので、それらの日の規模が知られるのみならず、今日も尙ほそれが殘存してゐるから、仔細に觀察すれば當時の造庭術を知ることが出来る。

銀閣の庭園は相阿彌の作で、閣の前に迎仙橋、臥雲橋などの橋があり、洗月泉と稱する飛泉があり、落照岡には躑躅を栽ゑて夕陽を止め、向月臺には白砂を舗いて落月を惜む心をあらはし、園中に多數の石を配置して景觀に變化あらしめた。東方の山は月待山といつて、月の出るのを待つ心持を示したもので、耽美的な義政の嗜好に適したと見えて、彼れはこゝに入り浸つて風流三昧に耽つた。

(三) 茶人趣味の發生

時代技術は爛熟の峠に達すると、やがて頽廢の阪を下り始める。頽廢の第一歩は翫賞癖 (Dilettantism) から踏み出される。かうした好尚に時代人を導いたものは、主として茶道と聞香であつた。喫茶は吉野時代からぼつ／＼と行はれたが、室町時代に至つて次第に民衆化し、京都の町では一服一錢に鬻ぐものすらあつた。^(七三) 慣習はすべて固定する傾きがあるものであるが、茶の立て方、飲み方も次第に固定して、遂に後世のうるさい式法を生むに至つた。茶道の式法は義政時代から起つたもので、彼れは東山に東求堂を建て、僧珠光とそこに入り浸つて、明け暮れ茶の湯に耽溺してゐた。珠光の弟子に志野道甘があり、それらから宗陳と宗悟とに傳はり、更に紹鷗、利休に傳はり、利休に至つて茶の湯の式法が完成せられた。そしてそこには面倒な形式が出来、自由は全く奪はれてしまつたが、馴雅な、古典的な、當世離れした一種の『澁味』を生じた。此澁味は禪宗的、茶道的、俳諧的の三要素を含んだものである。^(七四)

茶道の發達は茶室建築と茶器とに發生、進歩を與へた。茶室の矯矢は義政が銀閣の傍に建てた同二齋といふ書院であるといはれる。かうして數寄屋

造りといふ一種の澁味のある建築様式が發生すると同時に、他方に於いては、茶釜、茶碗等、茶器の發達を促した。茶釜は筑前の蘆屋が有名で、義政は土佐光信に下繪を描かせて蘆屋に鑄造せしめた。古蘆屋といふのは永正以前ののものである。陶工の進歩は義政時代からで、伊勢松坂の人五郎太夫祥瑞は明に渡つて青花白地の磁器製作法を學び、歸朝して今里に窯を開いた。^(七五) 志野窯、信樂窯、備前窯などは時代の窯の代表的なもので、明からの輸入品も愛用せられてゐた。

以上述べた如く、室町時代は早期と晩期とでは藝術の好尚、手法が異つて居り、前者は義滿の人格の、後者は義政のそのの反映と見ることが出来る。義政と彼れを中心とした大名との間に醸成された藝術的趨勢を美術史家は呼んで『東山時代』といふ。それはやがて時代藝術の頽唐を豫兆する先驅の喇叭の如きものであつた。

第七節 英雄的藝術の昂揚

東山時代の藝術が豫兆した如く、室町時代晩期には足利氏が統治の實力を失つて、諸國に群雄割據し、いはゆる『戰國時代』を形成したが、織田信長がそれを收拾し、續いて豊臣秀吉がそれを統一して、民衆を戰亂の陰から平和の陽に曳き出した。政治史上ではそれを安土桃山時代といふ。

安土時代は極めて短く、桃山時代もまたさほど長くはなく、従つてそれらを代表するやうな遺構、遺品は多數に残つてゐる譯ではないが、僅々數十年間に藝術上の躍進を見たのは事實で、藝術史家は往々それをフランスのアムピール式 (Empire) 藝術に比較する。^(七六) 秀吉の一生は、考へ方によつてはナポレオンのそれに似て居り、俗に『太く、短く』といふ英雄主義であるが、ナポレオンを周匝した藝術家によつて、アムピール時代藝術が作り出された如く、秀吉を圍繞した技術者によつて、桃山時代の英雄的藝術が造り上げられた。

安土桃山時代の藝術が雄渾豪放であることは、たしかに政治史上の局面展開、思想史上の英雄的嗜好の影響であるが、今一つ見逃すことの出来ぬ大きな動因があつた。それは前代晩期以來ぼつ／＼と出現しつゝあつた歐洲人が、

新奇なヨーロッパの織物、繪畫、音樂、歌謠、器具等を齎らして、異つた手法と表現とを我邦に輸入し、天下統一の光輝ある新時代に陶醉してゐた技術家を刺戟したことであつた。

安土桃山時代藝術を特質づけるやうな事實は、建築に於いて城郭建築が發達し、それに伴つて書院造りの規模が雄大となつたこと、彫刻に於いて建築裝飾の進歩したこと、繪畫に於いて狩野派の三大家を輩出したことを擧げることが出来る。

(一) 城郭建築の發達

鐵砲の渡來が舊來の戰術を變化せしめた結果、防禦の方法もまた自ら改善せられねばならなくなり、從來の土壘を石垣に改め、視野を大きくして展望を自由ならしめる爲めに天守閣を築く必要を生じた。これらの二つはたしかに城郭建築の發達を促した動因であるが、今一つ英雄が自己の力を表現しよう爲めに、規模の雄大と裝飾の完美とを企圖したことが、重大な動因であると思はれる。かうして眞先に現はれたのは天正四年の安土城で、次ぎには同十

一年に大阪城、文祿三年に伏見桃山城、慶長六年に熊本城、同十一年に江戸城が築造された。安土城は琵琶湖に臨んだ丘陵上に建てられ、本丸、二の丸、天守閣を中心として附近に大名の邸宅が造られ、どの建物もすべて『石倉』の基礎を有つてゐた。天守閣は七層で、座敷の中は黒漆を塗つたり、金箔を置いたり、繪を描いたり、彫刻を取りつけたりして、豪華絢爛の限りを盡くした。屋根瓦にまで金箔を置いたのは、日光に映じてさらさらと光らせる爲めであつた。天守閣の起原について大類伸博士は獨立發生説を唱へてゐるが、たとへ佛寺の塔婆武家の井樓高樓と關係があるにしても、根本動因を歐洲城郭の高層建築に求めることは不合理でないと思はれる。

大阪城は周圍三里八町あり、建物は本丸、二の丸、三の丸の三群に分れ、本丸の中央には八層の天守閣があつた。フロイスの報告によると、初め三萬の人工を晝夜の別ちなく使役し、工事が進むにつれて其數を倍加し、三年の日子を費して漸く竣工したとある。大手門を入つたところの石垣は一枚石で、地表上に出てるだけでも高さ十六尺、長さ三十四尺ある。かうした巨石を動かす

のは容易のことでない。此一事を見ても規模の雄大であつたことが知られる。

伏見桃山城は一層豪華壯麗であつたが、今日では壞たれて其原形を見ることが出来ない。けれども其遺構は竹生島の都久夫須間神社拜殿、同寶嚴寺觀音堂、西本願寺及び豊國神社唐門等に見られるので、其規模を想見することは出来る。名古屋城は大名二十人が徳川家康の命令で築いたもので、五重の天守閣は加藤清正の築造である。初重は二十間に十八間の廣さで、四重までは節なしの檜を用ひ、外に長方形の窓を開き、二重以下に三角の矢狹間がつけてある。外部は總て漆喰塗りで、屋根は初重の瓦葺の外は銅瓦を用ひてある。軒の曲線が穩やかで、落着きがあり、釣合もよく取れて格好よく、現存の天守閣中では構造、裝飾共に最も完美したものだといはれる。

(二) 建築的彫刻の進歩

城郭や住宅や神社の建築が盛んに營まれた結果、裝飾としての彫刻が發達し、全く新しい意匠と手法とが現はれた。彫刻の大家には左甚五郎、甲良宗廣

の二人があつたが、其遺品といはれるものはどの程度まで信じてよいか分らぬ。意匠が自由放膽で、手法が雄健奇抜なことは、此時代の彫刻の特徴といへる。採用された題材は動植物が多く、菊、桐、牡丹、蓮、松、葡萄から、鶴、獅子、象、鯉、栗鼠に及んでゐる。大徳寺の唐門は秀吉の聚樂第の遺物であるが、其正面の柱の上に横はつてゐる虹梁は、一面に浪の浮彫があつて、兩端に鯉の尾ばかりを見せ、其身は没して柱を貫き、頭のみが拳鼻の代りになつて外方に突き出してゐる。何といふ自由の表現、奇抜の意匠だ。こゝに桃山時代の藝術の特性があらはれてゐる。

(三) 狩野派の三大畫家

前代の晩期に衰微した土佐派が、勃興しつゝあつた北宋派と合體して、狩野派の起つたことは既に説いたが、其天才元信の孫に永徳があり、永徳の孫に守信があり、狩野派をして時代の畫界に重をなさしめた。永徳は山水、花鳥、人物、行くところとして可ならざるはなかつたが、構圖の雄大と彩色の豊麗と筆力の遒勁とに於いて、時代の英雄主義を具體化したものといへる。彼れは安土

城や聚樂第や桃山城の屏障に描いたが、第一のものは失はれ、第二のものは本願寺の飛雲閣の招賢殿に、第三のものは太鼓間及び浪之間に現存してゐる。永徳の弟子山樂は、嚴正でもあり豪華でもある筆法と彩色とを以て桃山建築に貢獻し、其遺品は本願寺名古屋城に残つてゐる。屏風には殊に傑作が多かつた。

此外、海北友松、雲谷等顔、長谷川等伯、曾我直庵などの名家があつたが、中でも友松は減筆法に苦心して一新機軸を出した。安土時代に於ける狩野派の三

大家といふは、永徳、山樂、友松の三人で、美術史上に重い位地を占めてゐる。

(四) 能樂の盛行と能面

鎌倉時代に發達した田樂、猿樂は、室町時代に入つても尙ほ行はれたが、田樂は次第に衰へて、猿樂の方が獨り榮えた。猿樂の諸座は大社の神事に従事したが、春日の神事に従事した外山結崎、坂戸圓満井の、大和四座が、後の寶生、觀世、金剛、金春に展開した。應永の頃結崎家に現はれた次郎清次は猿樂の天才で、足利義滿から愛せられ、同朋となつて名を觀阿彌と呼んだ、其子の元清もまた

名人で、名を世阿彌と呼んだので、世間ではこれを『觀世』と呼ぶやうになつた。此兩天才は田樂曲舞などを加味して、猿樂の能の舞態を定め、また多數の新曲を作つて謠曲といふ新聲樂を興した。かうして猿樂は本來の滑稽味を失つて、嚴肅重厚人情の機微を穿つた悲劇的性質のものとなり、其然らざるものが分岐して狂言となつた。義滿は猿樂を武家の式樂と定めた爲め、能太夫らは其生活を保障せられて、技術が大に進み、安土桃山時代に入つては、信長も秀吉もこれを好んだ爲めに一層發達した。

能面も従つて多數に製作せられ、少なからぬ名人を輩出した。能面發達史は前期と後期とに分たれ、觀阿彌、世阿彌時代を前期の終りとして、次第に能面を猿樂に専用した時代に入る。文明の頃に三光坊といふ名人あり、越前の平泉寺から比叡山に移つて多數の弟子を導き、其門から近江井關、越前出目、大野出目の三家が分れた。桃山時代に活躍した是閑は大野出目派で、女面に長じた源助は越前出目派である。應永に於ける觀世の猿樂革命以來、刀法、容貌形式について研究し來つた面打家の努力は、是閑吉滿に及んで結晶し、遂に秀吉

から『天下』の名譽號を得るに至つた。

第八節 島國的技術の醞釀

徳川家康が政府を江戸に置いてから、政治史上では江戸時代が展開するのであるが、藝術史上は全く安土桃山時代の繼承で、前代の英雄的藝術が日光建策によつて終焉を告げ、それ以後は次第に固定、沈滯萎靡して、遂に島國的技術を醸成したが、其代り在來に見られなかつた江戸趣味を發揮し、演劇の成長、浮世繪の發達、根付彫刻の出現等々、時代を特質づける徵證を少からず残した。江戸趣味は武家の間から起つたものでなく、武家に抑壓せられて才を伸ぶるに由のなかつた庶民の間に、自然に醸成、醞釀せられた好尚であり、江戸時代中、晚期二百年を通じて、それが技術を支配したのであつた。

(一) 日光廟の建築

日光の東照宮は、元和二年十月に藤堂高虎らが奉行となつて、本社、本地堂、廻廊、御供所、厩を同三年三月までに完成し、尋いで寛永元年一月に、松平正綱らが

奉行となり、全國の名匠を集めて工事に着手し同十三年四月まで、十三箇年の歲月と巨額の工費とを費して爾餘の諸祠殿を竣工したものである。

神社建築は桃山時代に権現造りを大成したが、江戸時代に入つてそれに佛寺風を加へ、更に墳墓の意義をも持つたところの廟建築にまで發達した。日光や芝の靈廟は即ち其代表的のものである。

俗に『日光見ずに結構言ふな』といふ通り、日光廟の建築は規模が雄大であるにも拘はらず、裝飾が綺靡纖巧で、いはゞ桃山時代の英雄的藝術の糟粕を舐めてゐるやうな傾きがある。藝術史家が桃山時代をアムピール時代藝術に比し、日光廟建築をロココ式藝術にたとへるのは無理ならぬことである。^(八三)ロココ式 (Rococo Style) の建築の特徴は、大體の鈞合を等閑視して、幻怪、無意味の裝飾を過多に取りつけ、繁褥、纖細、美を通り越してうるさく感ぜられることである。此弊害が日光廟には多分に現はれてゐる爲めに、觀照上、眞實と自然との印象を受けることが出来ないのは遺憾である。

(二) 演劇の成長

前代の終りに三味線樂が琉球から渡來して、我邦の歌曲に一大革命を齎らし、重苦しい、古典的な在來の小謠を次第に輕快な、近代的な、聞けば血肉に觸れるやうな旋律と節奏とに變へていつたことは疑ひの餘地がない。^(八四)

慶長八年四月の頃、出雲から上洛した巫女のお國が『やゝ子踊』を始めた。初めは神樂踊りや念佛踊りを搦き交ぜたやうなものであつたが、髪を男の折鬢に結び、男装して刀をさし、腰に瓢箪や、燧袋をぶら下げて踊り始めてからは一層市民の注意を牽いた。そしてそれが爲めに、いつしか名稱も『歌舞伎踊り』と變り、四條河原や北野の社の東手に舞臺を設けて興行した。踊りは曲線美に富んだ、柔い、活潑ではないが、妖艶な振りを有つたものであつたのに、搦て、加へてお國はふくよかな生理的美人で、肌の美しく、頬の豊かさ、及び眼差の魅力によつて見物を牽きつけた。のみならず、歌詞は現代語で早歌を少しもぢつたものであり、謠曲に比ぶれば人間味が遙かに強く、人の心をそゝるエロチシズムに富んでゐたから、武士も僧侶も町人も外國人も皆聞きとれてうつつりした。或武士は墮落して主人に首を討たれ、或商人は其財産を蕩盡した。^(八五)

歌舞伎踊りは必ず猿若の物真似を伴つてゐた。後にはそれが別々に發達して、一は純粹の舞踊となり、他は寫實劇となつたが、餘りに盡惑的で弊害が多かつた爲め、寛永末年に禁止せられ、其代りに若衆歌舞伎が現はれたが、それもまた禁止せられて物真禰狂言が起り、淨瑠璃操芝居と並行しつゝ、發達して、遂には兩者が融和して日本獨得の歌舞伎劇を構成した。

これらの興行は初めは野天であつたが、後に小屋掛となり次第に固定して、遂に劇場の發生を見るに至つた。猿若勘三郎が官許を得て、中橋で猿若狂言盡の芝居を興行したのは寛永元年であつたが、同九年に禰宜町へ移り、慶安四年にまた堺町へ移つた。村山又三郎は寛永十一年に堺町で常芝居を興行したといふから、其頃から追々劇場化を始め、寛文年中に玉川主膳と市村竹之丞とが相座元で續き狂言を工夫し、引幕、道具立を作り出し、世間から『大芝居』と呼ばれたとあるから、もはや相當な劇場が構築されてゐたと思はれる。^(八六)

かうして完成された日本演劇は、眞に世界無比の歴史と實質とを有つたものになつた。坪内雄藏博士はいふ、『我國の演劇傳統は、丁度我國體の如く、天下

無類だといつてよい。といふのは、我演劇史は、其實三百年ではなく、能狂言の歴史を合算すると——合算するのが當然であるが——少くとも五百年以上に遡ることになるからである。藤原氏の末鎌倉時代のはじめ、今様や宴曲や申樂をさへも系圖中に加へて觀察することになると、其材料の豊富で、其閱歷の複雑で、其變化や様式の奇異であることは眞に駭くべきである^(八七)。博士は更に日本演劇を検討して、其根柢は樂劇であるが、それが二分して一は大小鼓式の樂劇、他は三味線式の樂劇となつた。しかし或部分はモラル・プレーの如き小喜劇であり、他の部分はロマンチズム全盛時代の紙上劇を凌ぐやうな大自由劇であり、更に他の部分は近代の社會劇に比して遜色のないほど寫實的自然的であるが、本來が娛樂機關として發達したが故に、近世へ降るほど活動寫眞的になつてゐるといはれた^(八八)。かうした發達を遂げて、歌舞伎劇は次ぎの明治時代に流れ入つたのである。

(三) 浮世繪の發達

江戸時代の繪畫史に波瀾を捲き起して、沈靜の空氣を破つたのは、浮世繪の

發生、展開であるが、それについて述べる前に、ざつと時代の繪畫界を瞥見しよう。

狩野派は守信(探幽)が漢畫を基礎とし、倭繪を採り入れ、新機軸を出して、一代の畫宗と謳はれて以來、一門が繁榮して、中橋鍛冶橋、木挽町、駿河臺、濱町の五家に分れ、各々江戸幕府に仕へて繪事を掌つたが、山樂の跡を嗣いだ山雪の一門は節を守つて京都に留り、世間から『京狩野』と呼ばれた。^(八九)守信の子の探信、探雪は名人でなかつたが、甥の常信は技倆があり、其門人に久隅守景、桃田柳榮、神尾常庵、尾形幽元らを出した。これらの四人は俗に『四天王』といはれる。

土佐派は前代の晩期に狩野派と合流したやうに見えたが、光起に至つて繪所預となり、再び土佐家を興隆した。光起は、藤原時代晩期の光長、室町時代の光信と共に『土佐の三筆』といはれ、本來は古土佐を根柢としたが、稍々北宋の畫風を採り入れて時代の好尚に稱はうとした。土佐派は朝廷に屬して其繪事を掌り、ちやうど狩野派が幕府に屬するのと同じ状態にあつた。

住吉派は一時全く姿を没したが、土佐光則の弟廣通が後西院天皇の勅旨に

よつて住吉如慶と名乗り、緻密な畫を描いて相當に認められた。最初は京都にゐたが、後には江戸に下つて幕府に仕へた。

以上、官僚畫家が舊い手法を踏襲して自家の風格を破壊しないことに努め、世代毎に段々と生氣を失つて行きつゝ、あつた間に、いはゆる『町繪師』の中から名家が輩出して新畫風を開いた。浮世畫は其一つである。浮世繪は岩佐又兵衛から初まるといはれるが、嚴密な意味では、菱川師宣を其開祖と目すべきであらう。師宣は安房保田の人で、家は紺屋兼縫箔業であつたが、上繪から繪^(九〇)が好きになつて又兵衛の筆意を學び、遂に浮世繪の一派を開くに至つた。

師宣より少し後れて、英一蝶がまた一派を開いた。彼れは大阪の生れで、十五歳の時江戸に下つて狩野安信の門に入つたが、俳諧や書道にも堪能で、其畫にはどことなく放漫、超逸の趣きがあつた。^(九一)鳥居清信が出て劇場の看板繪を描き、鳥居派の一派を開いたこと、京都に西川祐信が出て浮世繪の一派を開き、江戸のそれに對抗したこともまた注目されねばならない。

享保以後は浮世繪が全盛の時代で、宮川長春は狩野派から出て一派を開き、

其流れを汲んだものに勝川春章、勝川春朗(葛飾北齋)らが現はれた。鳥居派からは奥村政信、羽川珍重、西村重長が出で、重長の門からは石川豊信、鈴木春信が出た。此外、北尾重政、喜多川歌麿、歌川豊春らの大家が續出し、豊春が歌川派を開いて、其門から豊廣、豊國の二名家が出た。かの題材を自然に選り、紺青の傳彩を以て著名な廣重は豊廣の門から出たのであつた。豊國の弟子には國貞、國芳があり、國芳の弟子には芳年が出て、明治時代までも浮世繪は引續き榮えた。

浮世繪ではないが、江戸時代中期に光琳派を開いた尾形光琳の名を逸してはならない。彼れの畫統を知らうと思はゞ本阿彌光悦まで溯らなければならぬ。光悦は狩野永徳の門に入つたが、其特技は蒔繪であつて、豪放、奇拔、華麗の中に典雅な趣きを含んで、『光悦蒔繪』の名を得たほどである。また山樂の門に畫を學んだ松花堂昭乗は、光悦と共に京都の二大家と目せられてゐる。同時代の人に俵屋宗達があり、絢爛な裝飾畫を描いて一世を風靡した。其風格を慕つて構圖と傳彩とに苦心し、奔放、自由、豪華、絢爛の趣を發揮したのが光

琳である。光琳の系統を引いて酒井抱一が出た。

次に享保年中に來朝した清人伊孚九、沈南蘋の二人によつて、我邦に南畫と寫生畫との端緒が開かれた。伊孚九に刺戟せられて、柳里恭、大雅、蕪村の徒は南畫を唱へ、沈南蘋の門に入つて、熊斐は寫生畫を唱へた。沈南蘋の寫生法を應用して、圓山應舉は圓山派を開き、岸駒は岸派を開いたが、圓山派からは四條派が派出して、京都の畫界は三分せられた。寛政年代に名を揚げた谷文晁は、全く獨立して其技を練つたもので、幕府の繪師となつたけれども、流派の外に立つた爲めに用ひられなかつた。^(九二)

江戸時代晩期に司馬江漢が現はれて、西洋畫の手法を用ひた。江漢以前にも山田右衛門作といふのがあつて、放火及び處刑の有様を洋畫に描いたといふが、一代ぎりで絶えてしまつた。平賀源内も洋畫を試みたといはれるが、江漢ほど眞劍ではなかつた。江漢は初め鈴木春信に學んで、名を春重といつたが、後に師名を襲いで二代春信といつた。長崎でオランダ人から洋畫を學んでから江漢の名に改めたのである。彼れの繪畫論は、虚偽の形式を打破して、

眞實の様態を描寫するが繪畫の眞諦である。唐畫の山水の如きは、實在の景色でなく、筆に任せて面白さうに描いたもので、夢を描いたのも同然であるといつて、一代の巨匠探幽の富士を痛罵し、應舉の寫生畫を冷笑した。^(九三)學問の根柢が深かつたから、江漢は人物がしつかりして居り、従つて其繪も普通の繪師の作と異り、單純なものを描いてもどこかにデッブスがあつた。

(四) 根付の流行

江戸時代に武士は皆な印籠を腰に佩んだから、緒の端に根付を用ひる風習が行はれ、従つて根付彫刻が著しく進歩した。京都の雛屋立圃、和泉屋友忠、大坂の吉村周山、和歌山の小笠原一齋、津の珉江らは有名であつた。其材料は木、象牙、金屬などで、題材は人物動植物等が多く、中には著名の畫家に下繪を描かしためたものもあつた。外國の美術家の間には、根付は存外好評を博し、曾て我邦に來てゐたイタリヤの畫工キヨソネ (Chissone) の蒐集品中にもそれがあつた。其博物館では可也に重要な位地を占めてゐる。^(九四)

(五) 江戸趣味の成立

各時代の技術はそれ々々の特徴を有つ。特徴は外延と内包との二つから成り立つが、外延は内包の表現に過ぎないものであるから、兩者は所詮一つのものゝ表裏の關係にあつて、本來不可分離のものでなくてはならない。さうした特徴を時代技術に與ふるものは、謂ふところの『時代精神』(Zeitgeist) である。時代精神は多角的に働いて、民衆生活を知的、情的、意的に制約する。時代精神の情的傾向が趣味、或は好尚 (Neigung) を規定して、それを民衆に共有せしめる。

江戸時代は三百年間に亘る長い時代であるから、こまかに觀察すればそれをいくつもの時期に分けることが出來、従つて好尚もまたそれ々々の時期に應じて異なる筈である。一例すれば或風俗史家は、それを(1)寛永及び寛文、(2)元祿前後、(3)寶曆乃至明和、安永、(4)文化、文政乃至天保の四時期に分け、第一期を武弁殺伐の第二期を雄健豪華の第三期を安逸遊惰の第四期を織巧精緻の世であるといつてゐる。^(九五)しかし、第一期の如きは先行した安土桃山時代を繼承して、新時代を形成しようとする『創始期』に過ぎぬものであり、第二期に至つて初

めて時代的特性が高調に達して、いはゆる『興隆期』を出現し、第三期にはそれが漸く沈滞して『爛熟期』を出現し、第四期には既に萎靡して『頽唐期』を形成したのであつて、勿論各期の好尚趣味には、それ々々の特徴があらうけれども、また全體に通じて存在する共通的、普遍的のナイゲングもあるべき筈である。普通に『江戸趣味』といはれるものは、時に於いては江戸時代三百年間、處に於いては全日本を代表するところの江戸民衆の好尚の意味に外ならない。さうした意味に於ける江戸趣味は、時代好尚が爛熟を経て頽唐の域に達した化政期のそれに代表せしめるのが一番適當であると私には思はれる。大まかに云へば、江戸趣味を構成してゐる心理的要素は、

- 1 『いさ』を尙んだこと、
- 2 テムポの速いのを望んだこと、
- 3 力の充實を重んじたこと、
- 4 精緻を誇つたこと、
- 5 瀟洒を好んだこと、

6 地味を喜んだこと、
の如きものであつたらう。今これらについてざつと説明する。

(1) 『いさ』は上方の『すゐ』に對する江戸の方言であるが、其内包は多分に異つてゐる。辭書を見れば、『いさ』の第一義は氣象であり、第二義は瀟洒である。^{九六}しかし『いさ』はそんな抽象的なものでなくて、『いなせ』或は『いさみ』といはれる肌合ひを伴ひ、『さやん』といはれる氣立てを伴つてゐる。人ときほつて後に退かない抗氣、即ち『いさぢ』は『いさ』の所産であつた。化政時代に流行した潮來節に『顔にや迷はぬ姿にや惚れぬ只つた一つの心意氣』或は『野暮なお方の情あるよりも意氣で邪見がわしや可愛』^{九七}といふのがある通り、『いさ』と意氣地とは抱合して一つとなり、所謂『江戸氣質』の根本動力をなしてゐたことが知られる。意氣は素より民衆的なもので、其素因は武士的氣風の感化であるとも見られるが、關東人には初手から上方人の有たぬ『いさみ』の氣風があつたところへ、漁師や魚市場の人々や、腐り易い魚貝を處理するものが機智と敏捷とを尙んだ結果、生じたところの習慣即第二の天性である『いなせ』がこれに加はつて、『いさ』を醸成す

る酵母となつたのである。^(九八)かうして『いき』が趣味を規定して、江戸趣味といふ特性を帯びしめた。

(2)『やほひ』といひ『さみ』といふものは、すべて今の言でいへば、テムポ (Tempo) の速いことを要求した。愚圖々々したのろい、意地汚いことが忌まれて、きばきと、さつさと、速く、氣持よく片つけてしまふことが喜ばれた。輕快、敏捷といふやうな Beschaffenheit は、つまり一局一處に拘泥して、移ることを知らない頑冥な保守主義を排して、より善きところを求めて、どし／＼と進んでゆく進取主義を採らしめる。斬新、奇抜を好む風は、此心理的要求から生じたもので、いはゆる『走り』や『初物』を味ふことを誇りとし、『江戸に生れ男に生れ初鯉』といふ氣概を生じた。『すゐ』というては浮氣らしいが、さうではなくて勢ひは、ア、つがもない一字千金松の魚江戸といふわいな^(九九)といふ小唄は此氣持をよく現はしてゐる。

(3)江戸趣味は内容の充實を要求した。狂歌に『江戸ッ子は五月の鯉の吹き流し口先ばかり腸はなし』とあるのは、寧ろアヤロニイであつて、眞正の江戸氣

(25) ABC はカイロのイブン・ツルン禮拜堂の文様で、アラビヤ趣味が濃厚である。

DEF は(26)とよく似てゐる。

(26) は多明石船の文様。

(27) メソポタミヤの牙彫。

(28) ABC はイスパニヤのサラセン文様で、西アジャ起原のもの。

(29) A乃至H は印度のサラセン文様で、飛鳥趣味が出てゐる。

(30) と(31) とはギリシヤ土器の文様で、玉蟲厨子のそれと似てゐる。

(32) トルコの舊址で發見されたもの。

(33) と(34) とは小アジャのエフェソスの舊址發見。

(35) と(36) とは、他のギリシヤ土器文様。

(37) アッシリヤの文様。

はゆる『走り』や『初物』を味ふことを誇りとし、『江戸に生れ男に生れ初鯉』といふ氣概を生じた。『すゑ』というては浮氣らしいが、さうではなくて勢ひは、ア、つがもない一字千金松の魚江戸といふわいな(九)といふ小唄は此氣持をよく現はしてゐる。

(3) 江戸趣味は内容の充實を要求した。狂歌に『江戸ッ子は五月の鯉の吹き流し口先ばかり腸はなし』とあるのは、寧ろアヤロニイであつて、真正の江戸氣

第八圖版 飛鳥文様系列圖

飛鳥時代の世界的藝術を代表すべきシムボルとして、私は同時代の文様に多い忍冬文様(Honey-suckle)を選び、それを『飛鳥文様』と命名した。飛鳥文様の淵源は極めて遠いが、今、日本から溯源して見ると、朝鮮、支那、中アジア、韃馭羅、ベルシャ薩珊朝、東羅馬、アラビヤ、ギリシヤ、アッシリヤ、エジプトなどに其祖先と姉妹とを見出すことが出来る。(三二八頁参照)

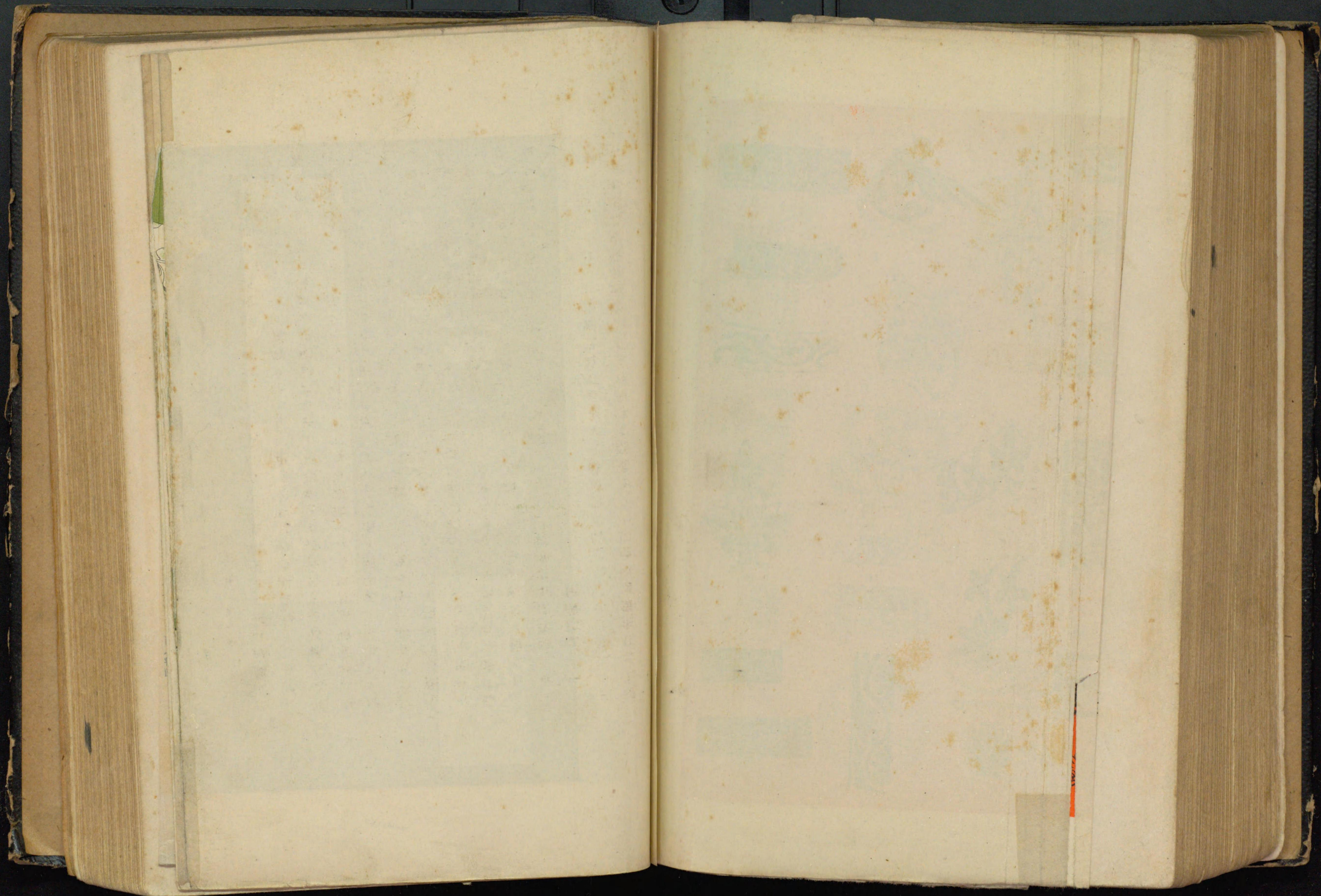
- (1)と(2)とは法隆寺玉蟲厨子の彩畫。
- (3)は法隆寺の天蓋の彩畫。
- (4)は法隆寺金堂の四天王の寶冠や服飾に現はれてゐるもの。
- (5)は法隆寺や同時代の他の寺院の佛像の背光。
- (6)は四天王紋旗の獅子狩文様に現はれたもの。
- (7)ABC共に支那山西省大同府雲岡の石窟寺の佛像に現はれた北朝のもの。
- (8)と(9)とは洛陽の龍門に見られる北朝のもの。
- (10)は支那南朝の梁書寺中神廟の彫刻。
- (11)は隋代の儀同三司龍山公墓誌。
- (12)は支那トルキスタン發見の陶器。
- (13)は西北印度のユースフザイ卒塔婆。
- (14)はアラハバッドの阿輸迦王の石柱頭部で、飛鳥文様の變形である。
- (15)ラクナウ博物館の石彫。
- (16)カンデー建築の一部。
- (17)ベルシャのケルマンシャール附近の王宮の門の彫刻。
- (18)ABCは印度カルカッタ博物館所藏の織物、叙利亞ラベートアモン宮殿の内壁裝飾。
- (19)コンスタンチノブルのフェチエジャーミ裝飾文様、(10)と一致してゐる。
- (20)ABは東羅馬の文様。
- (21)は支那石窟寺の文様で、前掲(20)及び(22)と似てゐる。
- (22)は東羅馬の文様。
- (23)はエルサレムのアクサ禮拜堂の壁文様。
- (24)AB共にエジプトの古製。
- (25)ABCはカイロのイブン・ツルン禮拜堂の文様で、アラビヤ趣味が濃厚である。DEFは(26)とよく似てゐる。
- (26)は支那石窟寺の文様。
- (27)メソポタミアの牙彫。
- (28)ABCはイスパニヤのサラセン文様で、西アジア起原のもの。
- (29)A乃至Hは印度のサラセン文様で、飛鳥趣味が出てゐる。
- (30)と(31)とはギリシヤ土器の文様で、玉蟲厨子のそれと似てゐる。
- (32)トルコの舊址で發見されたもの。
- (33)と(34)とは小アジアのエフェッスの舊址發見。
- (35)と(36)とは、他のギリシヤ土器文様。
- (37)アッシリヤの文様。



第八圖 鎌倉文對系図

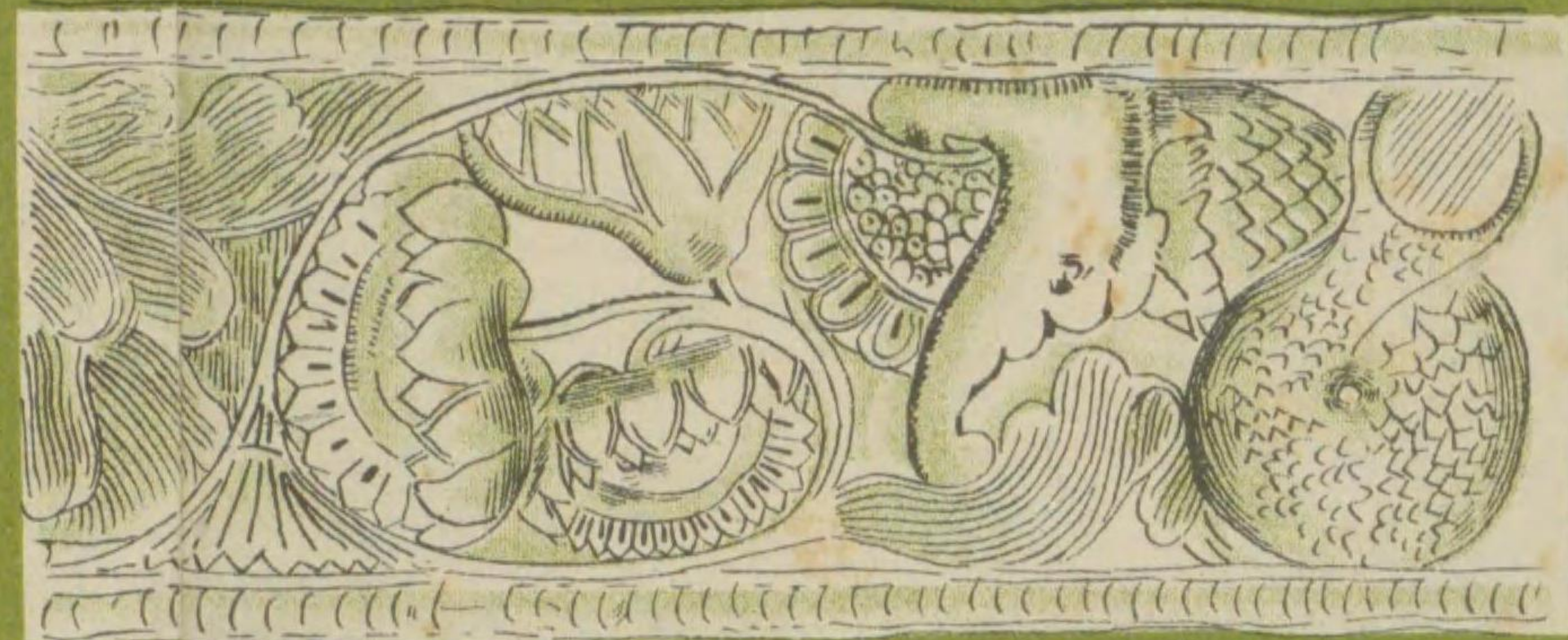
(一) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (二) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (三) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (四) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (五) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (六) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (七) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (八) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (九) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。
 (十) 鎌倉文對系図の源流は、平安朝の末葉に於ける北條の系である。

日本文化史概論
 九八
 る酵母となつたのである。かうして『いき』が趣味を規定して、江戸趣味といふ
 三八二





12



C



H



20



19



21



22



9



11



10



A

14



16



13



15



A 17



B



18



B



A 28

質をいつたものではない。表面はどう見えようと名はどうあらうと、裏面には力が充足してゐて、實のあることが江戸趣味の根本義であつた。一見すれば同じ値打としか受取れぬが、よく見れば全く異つた値打を有つてゐるといふ風に、物の質を選ぶことに努めたのは、江戸趣味の一つの現はれであつた。酒に飲みあいた一兩人の半可通が、八百善へ行つて茶漬飯を出せといつたら、半日も待たせて置いて、漸くのことに香の物と煎茶の土瓶とを持つて出た。香の物は春の頃から珍しい瓜茄子の粕漬を切交ぜにしたものであつた。食べ終つて値段をきくと、金一兩二分だと答へる。餘りに高直でないかといふと、亭主が『いくら極上の茶でも一土瓶へ半斤は入らないが、茶に合はせた水は玉川まで人を走らせて汲み取つたものだから、其運賃が莫大です』と辨解したといふ。本當の江戸ッ子、本當の通人ならば、此茶を飲めば水の出所も分つた筈である。かやうに江戸趣味は實質を重んじたのであつた。

(4)従つて江戸趣味は精緻を好んだ。外形はともかく内容を充實しようとするところから、いはゆる『凝つたもの』を作らうとした。凝つたものとは、畢竟

精緻なものゝいひに外ならなかつた。根付や印籠や刀の鍔や家具の調度品に手の籠んだものが用ひられたのは、全く此趣味から來てゐる。

(5) 瀟洒を好む心的傾向は、精緻を尙ぶそれと反向してゐるやうであるが、精緻なものを裏面、内面に藏して、外に見せびらかさうとしなかつたのは、さつぱりした、あくどくない、小綺麗なものにしたといふ欲望からであつた。けばけばしい絢爛、目眩しい華麗は、寛永乃至元祿の好尙であつて、化政時代には『さつぱり』と『あつさり』とが要求せられた。たとへば會津漆器に現はれた會津消が賞美されたのもそれが爲めであつた。身じまひの理想として、男性の頭髮に關して『油をあまり附くべからず、光るはやぼらしく』といひ、女性のそれに關して『鬢挿しを長くして後を引詰め、鬚は上の方へあげて水髪にふつくりと少し出し、鬢の一をぐつとあげて中のひくき大島田前髪をすつかりと揃へて切て簪で押へた姿』といつたのは、やはり同じ瀟洒への憧憬であつた。裾廻し裏に表と同色同文のものを用ひた江戸棲の流行も、さつぱりしたものを渴仰したから起つた現象であつた。

(6) からした色々の動因から、江戸趣味は結局『地味』——といはうよりは、濫味を最高の理想とする情的なインククレーションとして存在した。化粧にしたところで、上方のやうにごたくたと厚化粧をせず、『臙脂白粉も深くはせず、ちよつと化粧で、櫛笄前ざし一本、後へは銀の細うちばかりさして、いきな作りのいやしみなし』といふのが喜ばれた。服装にしても、表は地味なもの、濫い唐棧物などを選び、裏はすべつこい紅絹などを配合するといふ風に、萬づけばくしからぬを理想としたやうであつた。

以上、六つの特性は相交聯して不可分離なものであるが、いづれも武家好みといはうよりは、下町式の、庶民の嗜好が經緯をなしたものであつて、町人の擡頭した江戸時代相從つて江戸時代技術を表現する徴證として役立つのである。しかし、大まかにいへば、江戸趣味は逃避的、消極的、自暴的であつて、よい部分もあるにはあるが、大國民的襟度を有たぬものである。アムピール時代藝術に比べられる安土桃山時代の技術は勿論、その殘骸であるところの寛永時代の技術に比べてさへ、どこことなくせつこましく、隠居じみた、生あきらめ

過ぎる今日主義的陰影が濃厚にさしてゐる。それは、しかしながら、一つには武家階級に壓迫せられて、其重石の下にうめきつゝあつた町人階級の間に發生し、成長した好尚であるが故に、また一つには外國と交渉を絶つて、只だ一つ長崎の窓から世界の動きを見つゝあつた鎖國時代の産物であるが故に、内向的、消極的、島國的となつたのは當然過ぎる當然であつた。萬里の波濤を蹴つて國境の外に富を求めた海外雄飛時代の技術と、板子一枚下は地獄と唄つて、脆弱な和船で近海を航行するとをさへ恐れた鎖國時代の技術との間には、自ら徑庭が生ぜずには居らなかつた。安土桃山時代のアムビール式、外向的、世界的と、江戸時代のロココ式、内向的、島國的と、二つが相反的對照をなしてゐるのは面白い現象である。

第九節 世界的技術の渾成

明治維新後、外國との交通が復活した爲めに、歐米各國から様々の影響を受けたが、中でも最も大きな影響を受けたのは技術であつた。繪畫彫刻建築音

樂演劇、其他あらゆる實用藝術に於いて、材料の點から、手法の點から、目覺ましい改善が企てられ、全く新味を出すことが出来た。明治大正の日本技術史は、遠くは飛鳥寧樂時代、近くは安土桃山時代に似て居り、流注するところの百川を吸うて洶湧する大海の如き觀を呈した。しかしながら、さうした受容力は一朝一夕で出来たものでなく、飛鳥寧樂時代以來の民族的經驗の上に堆積してゐたものである。それ故に、明治以後の駸々たる藝術的躍進は、古代以來の民族的好尚の總計であるといつてもよい。

たゞ在來の日本藝術は、全然所動的、受納的であつて、世界藝術の粹を群島に集めようとしたに過ぎなかつたが——明治に於いてさへさうした傾向があり勝ちであつたが、明治時代を経て大正時代に至るまでに、日清、日露世界の三大戦争を経験し、それ以後我日本民族は民族的自覺を喚起された結果、藝術界には能動的、支拂的運動も起り、單に外來藝術の感化を受くるのみならず、進んで歐米藝術に日本の藝術的特徴を影響せしめようとするものも現はれ、若干さうした事實が見られるやうな機運を迎へるに至つたことは事實である。

昭和以後の日本藝術史は、如上の自覺に導かれた民族的努力によつて、舊來と其位地を轉倒するやうなことがあるかも知れない。否、必らずさうした日が来るであらう。文學に於いて、繪畫に於いて、音樂に於いて、演劇に於いて、世界藝術の日本化運動は、微力とはいへ、既に其緒に就いてゐることを私達は異常な敏感さを以て感ぜずには居られないのである。

第十節 摘要

以上のやうな元氣のよい豫想を以て、以上述べ來つた我國の技術史を回顧すると、次ぎの如き數項が結論されて來る。

- (1) 日本技術はシベリヤ式技術を其固有要素とする。
- (2) 飛鳥寧樂時代の外來藝術は、それらの日の世界的粹であつたから、それらに影響せられた日本藝術もまた世界主義(Internationalism)であつた。
- (3) 平安時代は前代を繼承して、外來技術を同化した時代である。
- (4) 鎌倉時代は宋元の技術を受容し、室町時代は明の技術を輸入し、漸次それ

らを同化して安土桃山時代に入つた。

(5) 安土桃山時代は第二の飛鳥寧樂時代ともいふべく、新奇に富んだヨーロッパの技術から影響せられて、豪華豊麗な世界的、英雄的技術の起つた時代である。

(6) 江戸時代の前半は前代の繼續に過ぎなかつたが、寛永鎖國以後あらゆる技術は刺戟を失つて固定し、沈滞し、萎靡し、遂に消極的、内向的、島國的技術を馴致した。

(7) 明治大正時代は第三の飛鳥寧樂時代ともいふべく、世界の藝術を一所に纏めて其粹を渾成しようとする努力に満ちた藝術家の出現を見た。大正時代は第二の平安時代ともいふべく、自主的、同化的技術の發生を促した時代である。

(8) 現代日本の藝術的位置は、在來の所動的なそれから擺脫して、漸次、能動的なそれに移るべき一大變轉の機運に際會してゐる。其成功は一に民族的自覺に俟たなければならぬ。

引用參考書

- (一) N. J. АОРЯНИН. *Tozoi*.
- (二) 高橋健自、日本原始繪畫、九五頁以下。
- (三) 濱田耕作、肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴、一二頁以下。
- (四) 梅原末治、銅鐸の研究、四八—五二頁。
- (五) 鳥居龍藏、有史以前の日本、一一五頁以下。
- (六) Shinji Nishimura. *Ancient Rafts of Japan*, p. 115 ff.
- (七) 高橋健自、前掲書、六八頁以下。
- (八) 梅原末治、前掲書、喜田貞吉序文參照。
- (九) 鳥居龍藏、前掲書、一一七—一二〇頁。
- (一〇) 大野雲外、土中の日本、一四四頁以下。
- (一一) 同人、古代日本遺物遺跡の研究、三七、一九—二一四頁以下。
- (一二) 西村眞次、大和時代、一二八、一八七頁。
- (一三) 同人、日本古代社會、二二八頁以下。

- (二四) 近重眞澄、東洋古銅器の化學的研究。
- (二五) 甲賀宜政、古錢分析表、考古學雜誌、九卷、四一—五頁。
- (二六) 俄國、直刀の化學的分析、人類學會講演。
- (二七) 西村眞次、古代吉備に於ける古墳の一型式と其殘存、人類學雜誌、五〇〇號。
- (二八) Cf. W. J. Perry. *The Megalithic Culture of Indonesia*.
- (二九) 西村眞次、文化移動論、一四四頁以下。
- (三〇) 中山平次郎、魏志倭人傳の生口、考雜、一八卷、九號。
- (三一) 日本書紀、卷二一。
- (三二) cf. Barnett. *Antiquities of India*, p. 252 ff.
- (三三) 伊東忠太、法隆寺建築論、參照。
- (三四) 關野貞、飛鳥及奈良朝時代の美術、參照。
- (三五) M. Aurel Stein. *Ancient Khotan*, vol. ii, plate lix.
- (三六) B. Laufer. *Sino-Iranica*, pp. 58, 59.
- (三七) Leigh Ashton. *An Introduction to the Study of Chinese Sculpture*, p. 65 and plate xxviii.
- (三八) *Ibid.* plate x.

- (二九) 伊東忠太稿本日本帝國美術略史(建築の部参照)。
- (三〇) 天沼俊一、飛鳥奈良時代の佛寺建築。
- (三一) 關野貞、前掲書(奈良時代史論)。
- (三二) 廣岡城泉、當麻曼荼羅は繪? 刺繡? 織帳? (東洋美術、三號、四七頁以下)。
- (三三) E. H. Minns, *Scythians and Greeks*, p. 204 ff. and fig. 100—103.
- (三四) *Papyrus of Ani*.
- (三五) 西村眞次、飛鳥寧樂時代、五九九頁以下。
- (三六) 扶桑略記(拔萃、孝謙天皇紀)。
- (三七) 續日本紀、卷一一。
- (三八) cf. E. Clements, *Introduction to the Study of Indian Music*, p. 55.
- (三九) 田邊尙雄、音程の對數値及び其樂律上の應用。
- (四〇) 高楠順次郎、奈良朝の音樂殊に臨邑八樂に就いて。
- (四一) 伊東忠太、飛鳥文様の起原に就て(考雜、一卷、四、五、六號)。
- (四二) 同人、奈良文様の起原に就て(考雜、三卷、三、四、五號)。
- (四三) 高山林次郎、日本美術史未定稿(楞牛全集一卷、一一〇頁)。

(四四) 黒田鵬心、日本美術史講話、上卷。此書は簡潔に日本美術の發達の歴史を記述してゐるので、大體の知識を得るには極めて便利な參考書である。稿本日本帝國美術略史は日本美術史に光明を投射した第一の著述で、是非とも座右に置いて參考とすべき良書である。工藝美術に關しては、黒川眞頼、工藝志料及び横井時冬、日本工業史の二書が役立つ。

- (四五) 關根正直、増補宮殿調度圖解、一一一八頁。
- (四六) 古筆了仲、扶桑畫人傳、卷一。
- (四七) 橘成季、古今著聞集、卷一一。
- (四八) 黒川眞頼、工藝志料、一八三頁。
- (四九) 法成寺金堂供養記、參照。
- (五〇) 伊藤清造、日本之古建築、八頁以下參照。
- (五一) 澤田名垂、家屋雜考。
- (五二) 黒田鵬心、前掲書、參照。
- (五三) 東鑑、卷九(文治五年九月)。
- (五四) 横井時冬、工藝鏡、卷一(佛像彫刻工)。

五五) 日本繪巻物集成、一、五卷。

(五六) Inazo Nitobe. *Bushido*, pp. 20, 25, 33, 45, 56, 65, 74, 93.

(五七) 大森金五郎、日本中世史論考、六二、六三頁。

(五八) 黒田鵬心、前掲書、二九四、二九五頁。

(五九) 圓覺寺境内繪圖。

(六〇) 伊東忠太、前掲書、四六五頁。

(六一) 蒙古襲來繪詞、參照。

(六二) 横井時冬、日本繪畫史、二二、二二頁。

(六三) 古筆了仲、前掲書、卷二(七二、惟久)。

(六四) 同人、前掲書、八三、八四、八五。

(六五) 橘成季、前掲書、卷一〇。

(六六) 横井時冬、日本工業史、五六頁參照。

(六七) 有阪銘藏、兵器沿革圖說、四二、四三頁參照。

(六八) 俄國、日本刀の研究、日本刀のチケイに就て、日本刀の金筋刀ガラミ及白ジミに就きて、日本刀の沸及匂に關する資料、日本刀のスペクトル分析に就て、日本刀の製

作々業法に關する資料に就て、參照。

(六九) cf. Ernst Grosse. *Die Ostasiatische Tuschnalerei*, 1922.

(七〇) 澤田名垂、前掲書(書院造り)。

(七一) 成恩寺經嗣、北山殿行幸記。

(七二) 横井時冬、園藝考、七七、七八頁。

(七三) 七十一番歌合(二十四番)。

(七四) 西村眞次、安土桃山時代、四三六、四三七頁。

(七五) 田内啓、陶器考、下卷、二三丁。

(七六) 原勝郎、帝政時代と桃山時代。

(七七) 小瀬甫庵、信長記、卷九。

(七八) 大類伸、城郭の研究、一一六、一一七、一二三、一二四頁。

(七九) James Murdoch. *A History of Japan*, vol. ii, p. 208, 209.

(八〇) 西村眞次、前掲書、四四三、四四四頁。

(八一) 小中村清短、歌舞音樂略史、下卷、九、一〇頁。歌謡、舞踊、音樂の歴史をざつと知らうとするには、此書は極めて重寶な參考書である。

- (八二) 横井春野、能面史談、一六、一七、六一、六二頁參照。
- (八三) 伊東忠太、稿本日本帝國美術略史、建築の部四八〇頁。尙ほ日光廟については、塚本靖、大澤三之助、日光廟建築論、東大紀要、工科第一冊、第二號を參照せられたい。
- (八四) 當代記、卷三。
- (八五) 中村一氏記。
- (八六) 小中村清短、前掲書、三一、三二、三五丁。
- (八七) 伊原敏郎、近世日本演劇史、坪内雄藏、序文二、三頁。
- (八八) 前同書、三、四頁。
- (八九) 横井時冬、日本繪畫史、六二、六三頁。
- (九〇) 山東京傳、浮世繪類考。
- (九一) 山東京山、一蝶流謫考。
- (九二) 横井時冬、前掲書、六四頁以下。
- (九三) 司馬江漢、春波樓筆記。
- (九四) Orlando Grosso. Storia dell' Arte Giapponese. p. 97 #
- (九五) 齋藤隆三、近世世相史、二、三頁。

- (九六) 大槻文彦、言海、五一頁。
- (九七) 潮來風。
- (九八) 西村眞次、深川情調の研究、深川區史、下卷五四頁。
- (九九) 浮れ草、卷二(江戸子)。
- (一〇〇) 寛天見聞記。
- (一〇一) 六角紫水、漆工史、一六二頁。
- (一〇二) 婦美車紫鹿子。
- (一〇三) 船頭深話。
- (一〇四) 爲永春水、小三金五郎娘節用。

第九章 經濟論

第一節 經濟史的段階

一般の日本歴史を讀んでみて、一番物足りなく思ふことは、どれにもこれにも殆ど除外例なしに經濟的現象の取扱はれてゐるのが少いことである。政權の爭奪や戰爭の勝敗については、可也に數多くのページが費されてゐるにも拘はらず、政權や武力の源泉であつた財力のことについては一言もいはれてゐないやうな例を少からず見出す。私達は或一派の學徒の考へるやうに經濟即生活即歴史とは信じない。人類の生活を唯物的に觀ることに少くとも異議があるけれど、生活の物質的方面を精神的方面と同格に考察してゆくことは是非とも必要である。

經濟史的段階——換言すれば經濟發達の順序は、學者によつて様々の時代

別けがせられてゐる。或者は物々交換時代(Period of Barter)から貨幣經濟時代(Period of Money)を経て、信用經濟時代(Period of Credit)に入つたといふが、此時代區劃は因果關係を明らかにしてゐないといふ理由で、今日では最早用ひられてゐない。或者は奴隸段階(Stage of Slavery)から農奴段階(Stage of Serfdom)を経て自由勞働段階(Stage of Free Labour)に進んだといふが、それも局部的には眞理であるけれど、全幅的には缺陷があるといふ理由で、これまた一般には承認されてゐない。ヘアライ博士の如きは長い人類の經濟的進化過程を達觀して、それを食物採集時代(Food-gathering Age)と食物製産時代(Food-producing Age)とに分けてゐるが、これは人類學的には好都合な分類であるけれども、民族史などの場合にはあまり概括的に過ぎる嫌ひがあつて實際には適しない。セリグマン教授の如きは根本的經濟事實である生産と消費との見地から經濟狀態を觀察して、世界史を次ぎの如き三大時代に分けた。

一、自足經濟(Self-sufficing Economy)

二、商業經濟(Commercial Economy)

三、工業經濟(Industrial Economy)

彼れはこれらを更に他の方面から見て、順々に孤立經濟、村落經濟、國民經濟の三段階とした。今日世界の民衆には、尙ほ孤立經濟の時代を彷徨してゐるものもあるけれど、あらゆる文明民衆は皆これらの三段階を經過してゐるといつてゐる。日本民衆もやはり、此三段階を經過して今日を迎へ、現に國民經濟生活を營爲しつゝあるのである。

第二節 自足經濟時代

自足經濟、一に孤立經濟といふは、經濟單位が家族にあるもので、家族が自ら一切の必要品を生産し、而してそれを消費する經濟的様態である。しかし、家族よりも大きな團體即ち氏族を經濟單位とすることがあつても、生産と消費とが家族の自給自足を主眼としてゐるが故に、それを孤立經濟と見做して差支ない。

(一) 經濟生活の三大特徴

我邦の經濟史もまた自給自足を以て始まつた。日本民衆が少くとも六種族以上から構成されてゐることは既に述べた通りであるが、其中堅をなしてゐる主要素はツングース系の原日本人であつた。原日本人と殆ど同一の勢力を有したのは舊アイヌ族で、後者の遺跡は日本の各地、主として東部地方に、前者の遺跡は西部、中部地方に見出される。これら諸種族の先史時代から古代に亘る經濟生活を窺つて見よう。

(a) 食料——先史時代の遺跡を訪ねて見ると、大方水畔に限られてゐる。それは人類の生活中最も顯著な物質的特徴は食住衣の三つであるが、其中一番重要なものは食料と飲料とで、それらを獲得するには水畔を必要としたからである。東京附近でいへば、井頭池は最大の湧泉であり、三寶寺池、善福寺池、妙正寺池、洗足池、御手洗池など、五つの池の傍からは土器、石器が多く發見せられるので、それらが先史民衆に取つて絶好の住所であつたことが知られる。貝塚は多く古代の海岸に發見せられる。今日では遠く海を離れ、山林の間に挾まれてゐるが、それは土地の堆積、隆起の爲め海水から遠ざかつたので、今

から三四千年以前にはそこは波濤に洗はれてゐた場所である。貝塚の成因については色々の説があるけれども、最も受納され易いのは、それが先史民衆の塵捨場であるといふ説である。先史民衆が貝を食つて其殻を捨てたものが、長い間積り積つて小丘をなしたのである。それ故に、そこからは土器や角器や骨器の破片が、動物の骨や角と一所に発見せられる。これらの遺物を克明に調査すると、其道具は主として石を材料として造られてゐるが故に、それを人類學者は石器時代(Stone Age)と云つてゐる。

石器時代はまだ農業を知らぬ時代で、其民衆は狩獵及び漁撈によつて其食料を獲得した。主食物は獸鳥、魚、貝で、副食物として若干の植物性物質が用ひられた。舊アイヌの遺した貝塚から出土した貝類を調査した丘博士は、其種類が六十餘種に上つてゐることを報告してゐる。^(三)最も普通なのはカキ、イタボガキ、エゾガキ、ヒトスヂマイマイ、ヤマダニシ、アハビ、ツメタガヒ、キサゴ、スガヒ、アカニシ、イシダタミ、サザエ、コロモガヒ、バイ、ニナ、イタヤガヒ、ヒアフギ、サルボウ、アカガヒ、トリガヒ、アサリ、シホフキ、ワスレガヒ、サクラガヒ、バカガヒ、ハマグ

リ、イガヒ、タヒラギなどである。これらが日常の食料に供せられ、食つては捨て、食つては捨てた殻が、高さ數間、廣さ十數間、長さ數十間に亘るほどもあるのである。それを見ても貝塚附近に住居してゐた民衆の人口が、可也に多數であつたことを想像することが出来る。

岸上博士の研究に依ると、舊アイヌ遺跡から発見せられた漁撈の獲物は、棘皮動物にはウニがあり、節足動物にはコエビがあり、軟體動物にはイカを始めニシ類三十一種、カキを始め薄腮種三十五種あり、魚類では板腮類三種、硬骨類三十四種あり、其中にはダボギス、ニシン、セグロ、マス、コヒ、ウグヒ、ウナギ、ボラ、タヒ、ススキなどがある。又他に爬蟲類、哺乳類も少々発見せられ、哺乳類にはアザラシ、クヂラ、イルカなどがあつたといはれる。^(四)下總余山貝塚からは、銛が鯛の頭骨につきささつたものが発見されたので、可也に遠い海上に出て漁撈に従事したことが知れ、従つて相當の容積と張力とを有つた船舶の用ひられてゐたことも推想されて來る。

植物性物質は腐朽し易い故に、多くは発見されてゐないけれども、余山貝塚、

や陸中榊形園から米粒が発見されたことがあり、私自身は山形縣西村山郡醍醐の堅穴から胡桃を、東根の住居址と思はれる場所から栗の實を発見したことがある。これらは皆食料に供せられたものと思はれる。

以上は主として舊アイヌの遺跡について述べたが、原日本人の遺跡である伊勢桑名の貝塚などでは、カキ、ハマグリ等の貝殻が多く発見せられ、三河の保美貝塚からは獸類としては猪の牙や鹿の角が見出されてゐる。舊アイヌ式貝塚から出たものには、クマ、キツネ、サル、イヌ、タヌキ、ウサギ、オホカミ、カモシカ、ウマ、ムササビなどがあつたといふから、原日本人もそれらの中の若干を食べ、てゐたことは明らかである。原日本人が日本群島に移住した頃はまだ石器時代で、金属が発見せられてゐなかつたから、彼等は石鏃、石槍などで山野に狩獵を試み、骨髄、角鈎などで河海に漁撈を試みて、それらの獲得を以て其生命を支持してゐたが、副食物としてマコモの實を食用したらしいことが言語學上から證明せられる。^(六)

紀元前三〇〇年を下らぬ時代に、南方から印度支那族が、米を携へて移住し

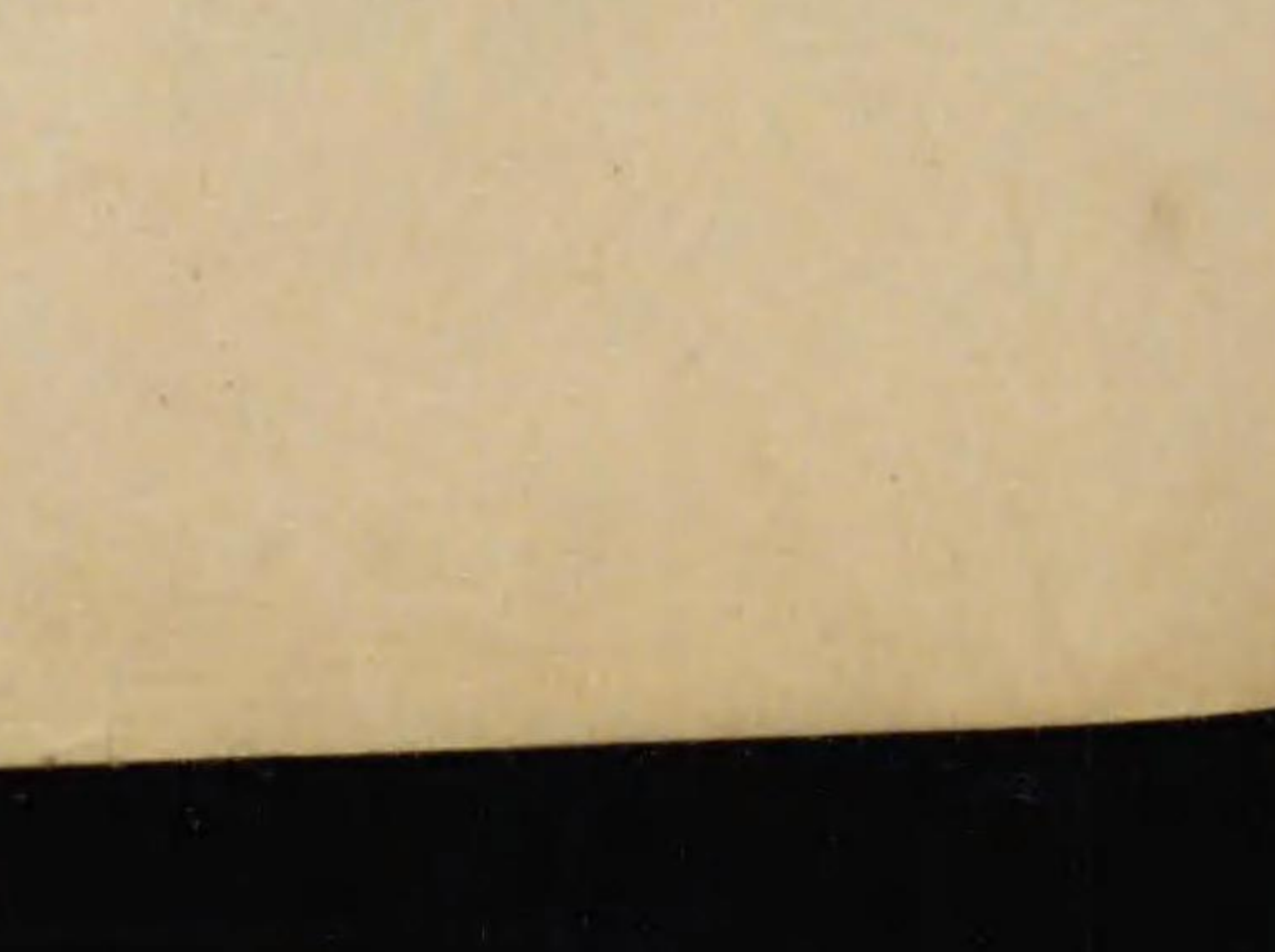
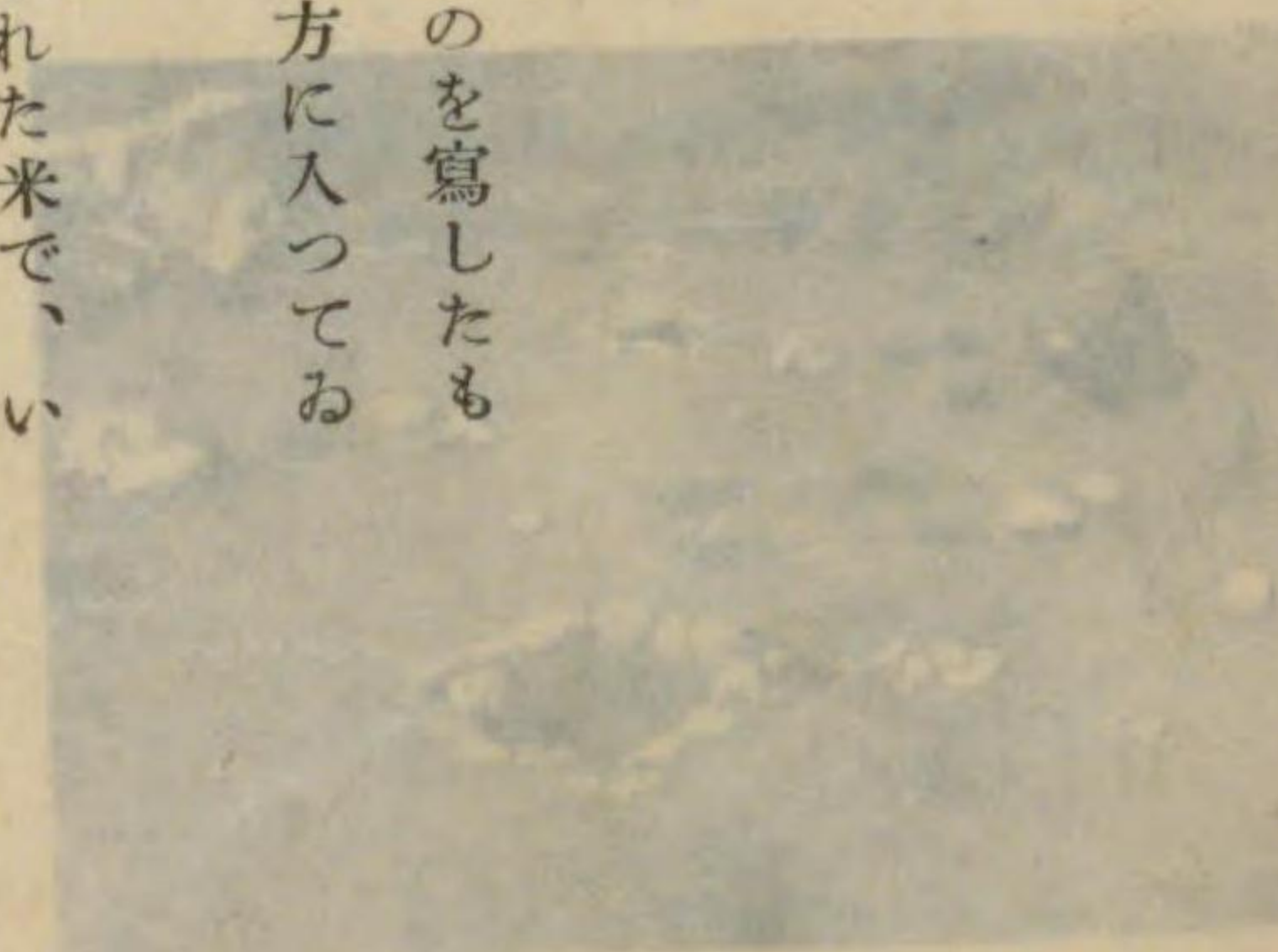
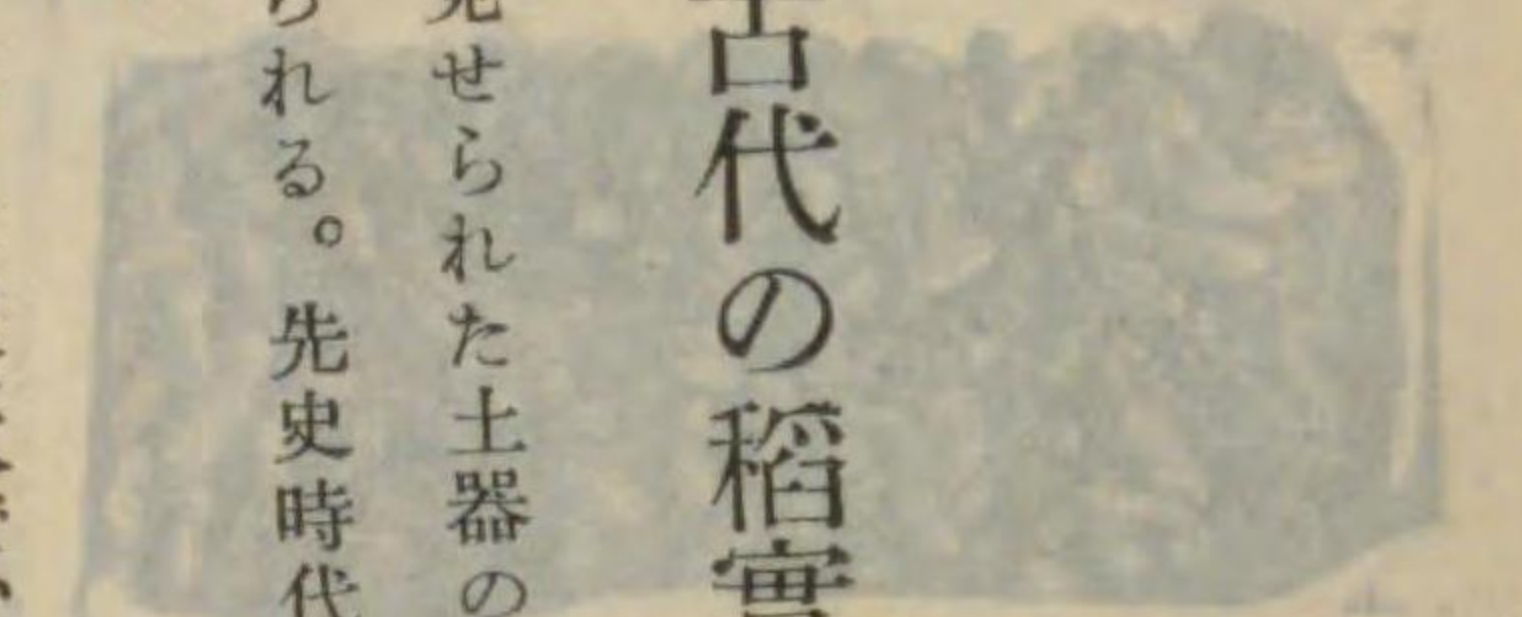
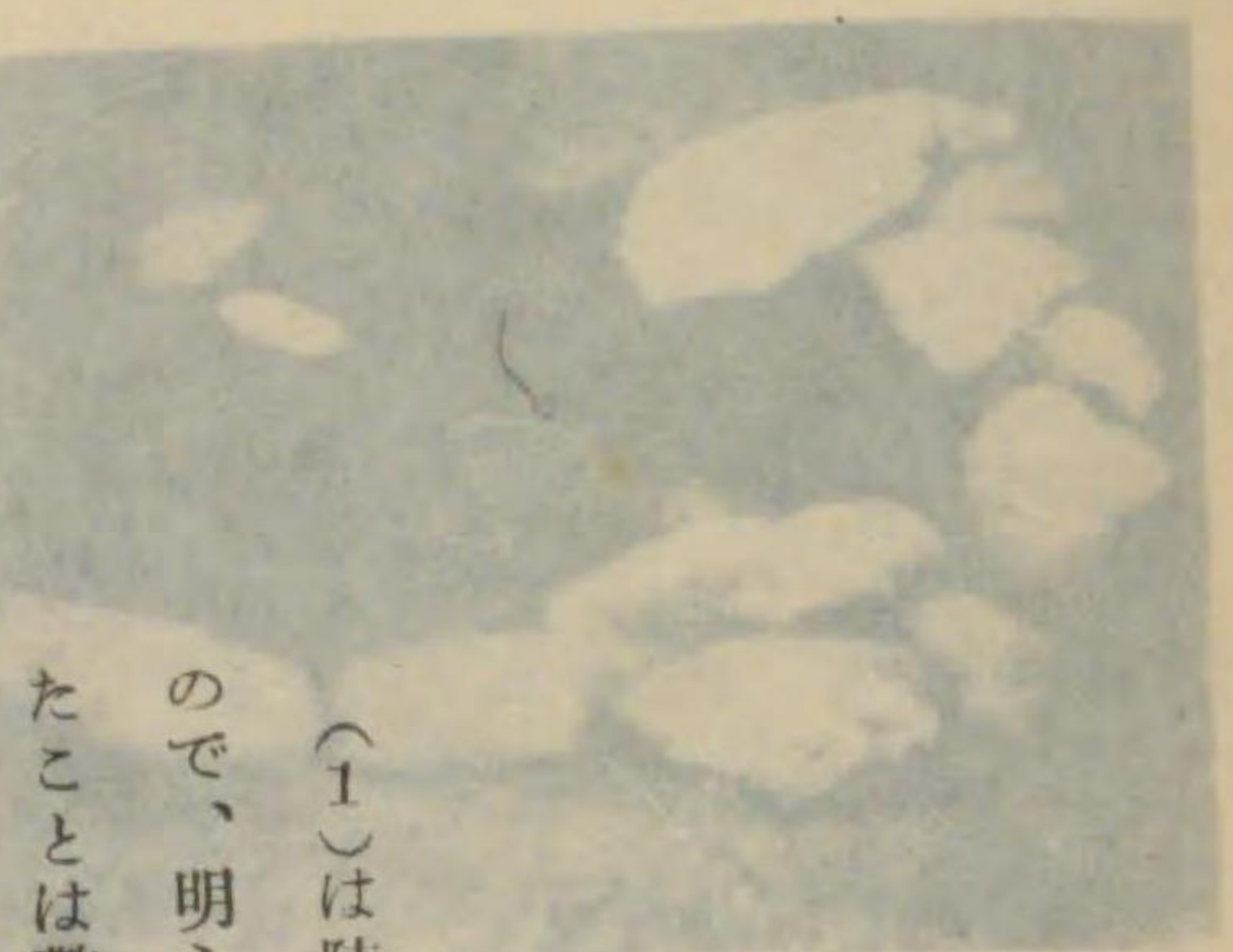
たので、原日本人もいつしかそれを栽培、食用することになり、遂には全く農業民衆にまで進化したのであるが、其事は米を意味する日本語ウルチが古代印度聖語ウリヒ(Urhi)から來たものであることによつて證明せられる。ウルチが食用せられるに及んで、原日本人は從來食用したところのコモに接頭語マをつけてマコモと稱し、新來の稻には舊來のコモといふ名稱を命じたが、コモは『美實』を意味する複合語で、其中のモは *mo-ho-mo-mi* と變り、今日では一般にミが用ひられてゐるが、過去に一たびメに變つて、其儘今日まで用ひられてゐるものにはマメ、ナツメ、コメなどがあり、本來の儘にモと呼ばれてゐるものにはイモ、モモ、スモモ、マコモなどがある。コメはコモのモがメと變り、ミとは變らずして今日に傳へられてゐるものである。^(七) 米の食用は日本人の經濟生活改善、向上せしめるに與かつて力があつた。米を食用するに至つて、原日本人は所謂『狩獵時代』から『農業時代』に入つたのである(第十圖版123)。

日本についての最古の記述である陳壽の『三國志』中の倭傳を見ると、九州にゐた倭人が禾稻紵麻を種え、蠶桑を緝績したことが知られる。禾稻がイネ

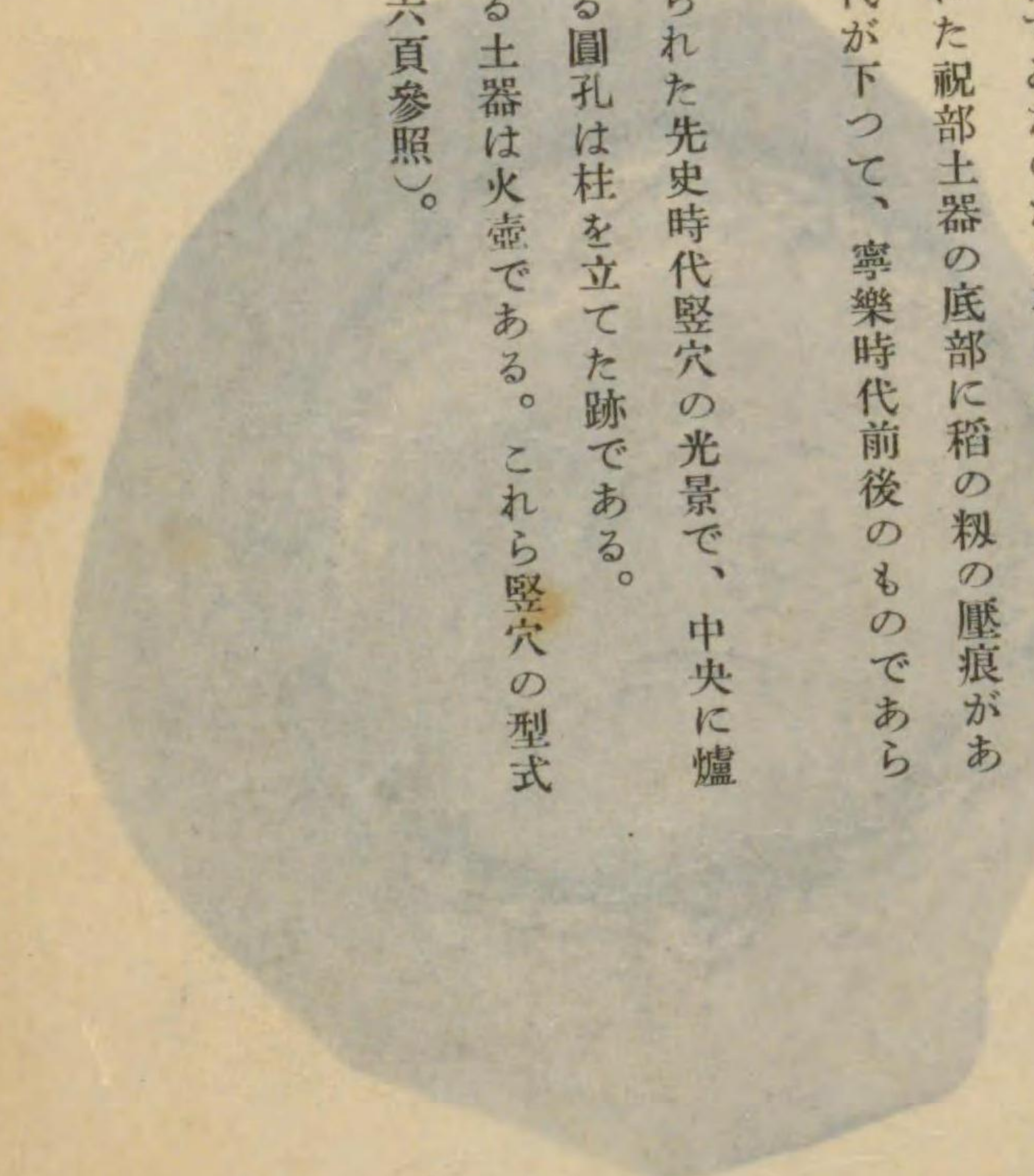
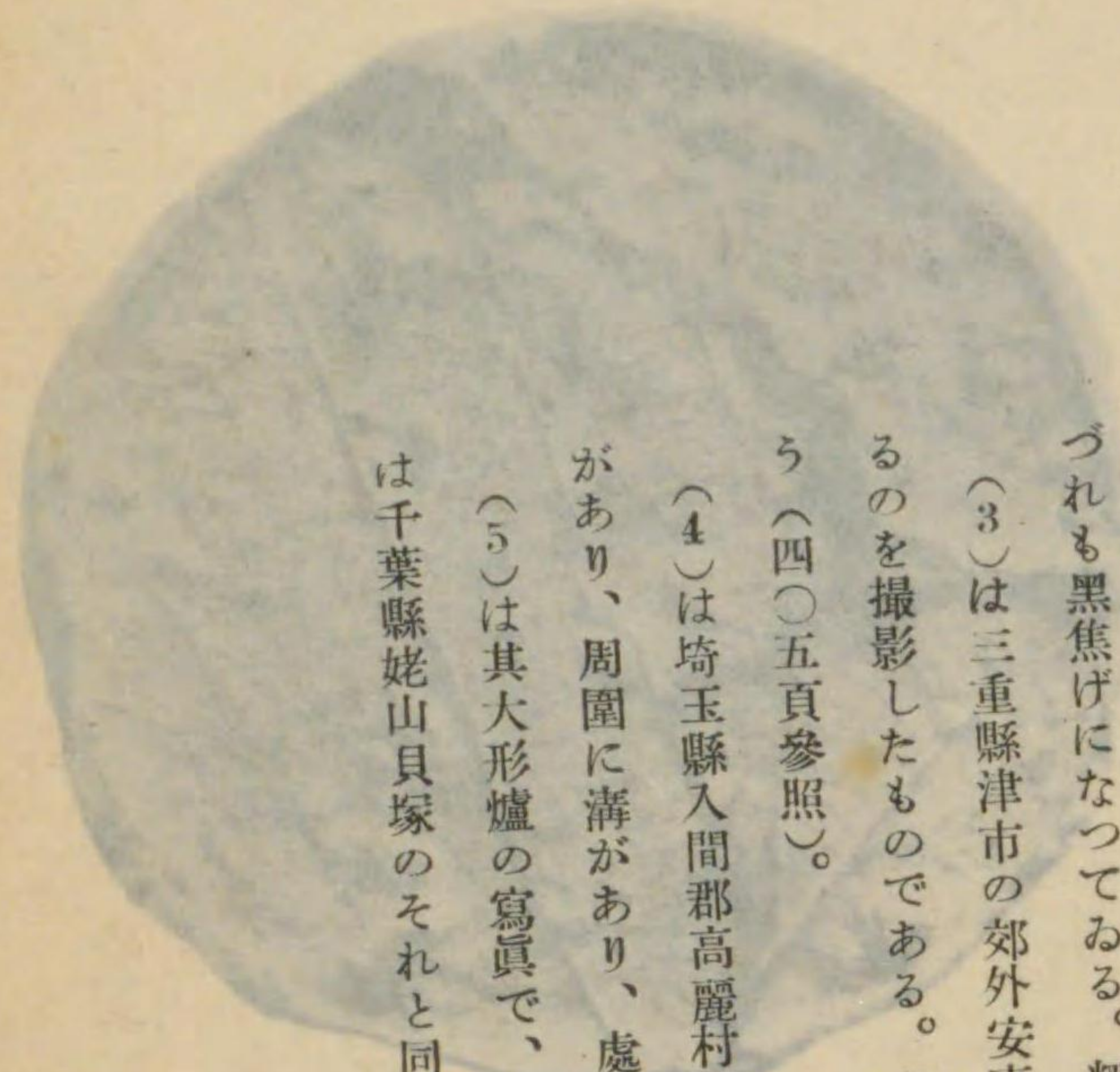
であることはいふまでもなく、紵麻がアサであることも問題でない。また蠶桑緝績とあるからには、クハを作り、蠶を飼つてゐたことも明らかである。しかし所謂『倭人』は問題で、或學者はそれを日本人と解し、他はそれをインドネジャ人と見、又他の學者はそれを印度支那族と見てゐる。私は其第三説に賛成で、倭人を印度支那系の苗族と共同祖先を有つたものであると見てゐる。果して然りとすれば、我邦に於ける農業時代の幕は印度支那人によつて開かれたと見て差支へない。

(b) 住居——次ぎには住居について窺つて見たい。先史時代に於ける家は、舊アイヌ式要素と原日本式要素と二色あるが、舊アイヌは堅穴に住んでゐたらしい。千葉縣柏井貝塚で最近に發見せられた住居址は、先づ圓形に孔を掘り、其周圍に小孔を穿つてあるから、これらの小孔に柱を立て、それに梁を渡して、其上に樹枝、或は草葉を葺き、更に其上に土を盛つて冢形にしたものであつたことが知られる。埼玉縣高麗村臺の堅穴址もこれと同一型式である(第十圖版45)。私は曾て樺太榮濱の堅穴址を調査したとがあるが、それら

第十圖版 古代の稻實と堅穴



- (1)は陸中の榊形園から發見せられた土器の底に、稻實の壓痕のあるのを寫したもので、明らかに三個の靱が見られる。先史時代に於いて稻が既に北東地方に入つてゐたことは驚くべき事實である。
- (2)は福岡縣八女郡長峰村の彌生式堅穴で、中山平次郎博士の發掘された米で、いづれも黒焦げになつてゐる。靱のまゝ保存されてゐたのが火事に逢つたものらしい。
- (3)は三重縣津市の郊外安東村で發見せられた祝部土器の底部に稻の靱の壓痕があるのを撮影したものである。これはずつと時代が下つて、寧樂時代前後のものであらう(四〇五頁参照)。
- (4)は埼玉縣入間郡高麗村大字臺で發見せられた先史時代堅穴の光景で、中央に爐があり、周圍に溝があり、處々に穿たれてゐる圓孔は柱を立てた跡である。
- (5)は其大形爐の寫眞で、中央に見えてゐる土器は火壺である。これら堅穴の型式は千葉縣姥山貝塚のそれと同一である(四〇六頁参照)。



の竪穴は一個としてはさほど大きなものでなく、大抵直徑二間ぐらゐの圓形のもの、楕圓形のもの、長方形と思はれるものなどであり、最も大きなものでも徑三四間に過ぎなかつた。しかし、さうした孔が何百何十となく打續いて穿たれてゐるところから推すと、榮濱は可也に廣大な聚落であつたと見なければならぬ。一體農業以前、即ち狩獵漁撈時代に於いては、人口の密集は獲物を減少せしめる虞れがあるので、自ら散開状態を呈するのが普通であるのに、こゝではかうした密集状態を呈してゐるのはどういふ理由か。恐らく或期間に漁撈に従事する爲めに、多數の力を集めなければならぬ事情があつて、諸方の聚落から一時そこに集つて來たものではなかつたらうか。

原日本人の住居については明確な證據が少いが、大和地方、日向地方、吉備地方などのやうに、多數の古墳が群をなしてゐる場所に於いては、其附近に大きな聚落が存在してゐたと見なければ説明がつかない。古墳築造の時代には既に農業も經營せられて居り、従つて人口が集中せられ、家屋が密集して建てられてあつたらうと思はれる。然るにそれらの場所から礎石の發見せられ

ないのを見ると、當時の建築が所謂『掘立小屋』式のもので、柱を直ちに地に掘り立て、それに葛の類で梁や楹を結びつけたものであることが想像せられる。『祝詞』の一つに、『掘堅多留柱、桁梁、戸牖乃錯、動鳴事無久、引結弊留葛、目能緩比、取葺計魯草乃噪岐無久御床都比能佐夜伎、夜女乃伊須々伎、伊豆都志、伎事無久』とあるので、大體家屋の構造が知られて来る。これから推すと、(1)柱を地に掘り立て、(2)桁梁を葛目で固く引き結び、(3)屋根には萱を葺き並べ、(4)床を張り、(5)窓を開き、(6)戸を立てることが、古代日本建築の六つの條件であつたらしく、關東に多く見られるノゲヤは此形式の残存で、中には直立した柱なく、合掌狀に柱を斜角度に立て、軒で結んだ屋根だけのものがある。これを建築史家は天地根元造りと呼んでゐる。天地根元造りが、直立した柱を有ち、妻入りの形式を取つたものを出雲大社造り、それが平入りの形式に進んだものを伊勢太廟作りと呼んでゐる。壁は大方木を横に累ねたもので、今日シベリヤに残存してゐるユルタといふ家屋形式と其構造を一つにしてゐたと思はれる。ユルタは大方校倉式(第一圖版12)で、此式は朝鮮でも先史時代に用ひられてゐた。

かうした建築には自ら生命があり、二十年も経てば腐朽して危険なので、直ちに建て直しをしなければならなかつた。伊勢太廟が式年御遷宮といつて、二十一年目に遷宮のあるのは、さうした古代建築の生命を示すものである。紀元三世紀の我邦の聚落と其建築との有様は、隴ろげながらも支那書の記述によつて、それと知られる。『魏志』の倭人傳によると、對馬には千餘戸あり、一支(壹岐)には三千餘戸、末盧(松浦)には四千餘戸、伊都(怡土)には千餘戸、奴(甕)には一萬餘戸、不彌(宇美)には千餘戸、投馬(妻)には五萬餘戸、邪馬臺(山門)には七萬餘戸あつたとある。これらの諸地方は、いづれも『國』と呼ばれてゐるが、當時の國は今の郡に相當するものであるから、以上の戸數を有つた大聚落があつたわけではなく、方々に散在してゐたことには疑ひがないが、國の中央には可也大きな民家群があつたと観なければならぬ。またこれらの一戸は、どれほどの大きさを有ち、幾人を收容することが出来たかは不明であるが、それらの日には比較的大家族を有つてゐたから、少くとも一戸平均五十人以上はあつたと思はれる、相當の大建築であつたと思はれる。邪馬臺の女王國のことを記

した條には、『宮室樓觀。城柵嚴設。常有入。持兵守衛。』とあるから、女王の宮殿は重層造りで、周圍に垣柵が設けられ、兵士がそれを守衛してゐたことが知られる。庶民の家は小さかつたらうが、國王とか貴族とかの建築には、可也進歩した大規模のものがあつたに相違ない。それらの規模を窺ふには、昔ながらの形式を殘存してゐる伊勢太廟、出雲大社などの建築配置を見るがよい。

(c)衣服——第三に衣服を調べて見ると、舊アイヌ式、原日本人式、印度支那式、漢人式の四通りを擧げることが出来る。ネグリトイやインドネジャ族は殆ど裸體であつたから、我國の服制には何らの影響を與へてゐない。たゞ男子の犢鼻褌ふんどしと女子の腰捲とは、インドネジャ族のカイン、ジャワット及びサロンの殘存であると、私達には思はれる。

舊アイヌの衣服は處々で發掘せられる土偶によつて、其大體の裁ち方を知ることが出来る。母性を表現してゐる母神像は上衣と下衣とに分れ、上衣は前方が中央で縦に切れてゐる。其袖は狭くて筒袖である。下衣はズボン式で、足には皮靴を穿つてゐたらしい。父神像、或は隨伴者と見える男性像は、上

衣が中央で縦にきれてゐず、今日のかぶりシャツ衣のやうな工合につてゐる。男女の差は一に此縦斷線の有無によつて決することが出来る。舊アイヌを南方系と觀る學者も可也に多いやうであるが、其服裝から見ると、どうも北方系らしく、大體に於いてツングース族、或はエスキモー族の服裝に似てゐる。

原日本人の服裝は、古墳から出土する埴輪土偶によつて還元することが出来る。其衣服は男女を通じて筒袖であるが、男子の方は裾が股の半ばで終り、女子の方は男子と同様のものもあり、またそれよりも長いものがある。短い着物の場合には男女とも帶をしめてゐるが、女子の裾長の着物には帶がない。多分通常の服に帶を締め、其上へ更に長い着物をかさねて着たのであらう。襟は不明なものが多いが、現はれたものからいふと左衽であるから、一般に左衽の風習であつたことは争はれない。（五）シベリヤに住んでゐる韃靼の服やロシア人のルバィシユカが左衽であるのは、原日本人の服裝の系統を私達に暗示する。男子の袴は極めて寛濶で、それを膝の下で紐で括り、それに鈴などをぶら下げて、歩くとちりん／＼鳴るやうにしてあつた。下野足利發見の土偶

に鈴の附着してゐるのがあるが、それは『足結』といはれたもので、『古事記』には『宮人の足結ひの小鈴落ちにきと宮人とよむ里人もゆめ』といふ歌が載つてゐて、足結に鈴をつけたことは確實である。^(一六)

私達の考へでは、原日本人は新羅人と同じくツングース族に屬し、其文化は最初に共通であつて、後に支那文化が移植されてからも殆ど同時にそれを採用した爲め、後々日鮮兩國が政治的に分離してしまふまで、長く同一文化圏内の生活を營爲してゐた。従つて服裝の如きも或時代までは兩民衆とも殆ど同様であつた。新羅の舊都慶州附近の古墳から出土した埴の腹に刻まれてゐる人衣を着た鳥の彫刻^(一七)と、河内高井田の横穴古墳の壁畫に現はれてゐる人物の服裝^(一八)とが全然一致してゐるところから觀ると、私の如上の叙述が眞實であることが直ぐに知られる(第一圖版345)。

原日本人は玉を佩用することが好きであつた。それ故にさうした時代を故坪井博士は佩玉時代と名づけた。埴輪土偶の殆どすべては頸に玉をぶら下げてゐる、其玉は大體丸玉であるが、他の形をした玉は造るのに容易でない

から、土師がざつと圓い形に造つたのであつて、實際には曲玉、管玉、切子玉、棗玉、白玉など、色々の形をしたものが用ひられてゐた。中でも曲玉は尊重されてゐた。玉を作る原石は色々であるが、最も多く見られるのは出雲石、赤瑪瑙、水晶などであつた。^(一九)古墳から多く玉類が出土し、三種の神器の一つに八尺瓊曲玉が加へられてゐることから推しても、原日本人に玉類が如何に愛用されてゐたか、わかる。

印度支那族の服裝は、『魏志』の倭傳に、男子は皆露紵で、木屨で頭を捲き、其衣は横幅を結束するだけで、縫ひはしない。婦人の衣は單被の如く、中央に孔を穿ち、それに首を衝込んで着るとある。最後のものは所謂『貫頭衣』で、今日も尙ほロロ族の間では用ひられてゐる。^(二〇)漢族の服裝は、『萬葉』時代に、カラコロ^(二一)モ(韓衣)といはれ、裾が捌けて前の合はぬものであつたらしく思はれる。^(二二)推古朝に隋との交通があり、左衽の風が追々と改められて、支那風の服裝を採用するに至つて、我邦の服制は殆ど全く一變してしまつたらしい。

(二) 生産過程及び消費過程

以上あまりに詳しく物質生活の三大特徴を述べた爲めに、生産及び消費の過程について述べる機会を有たなかつたが、孤立經濟時代に於けるそれは、大體に於いて狩獵時代、半獵半農時代、農業時代の三つに分けて考察する必要がある。前者は即ち先史時代に當り、中者は略々原史時代に、後者は歴史時代早期に當る。

(a) 狩獵時代——狩獵時代に於いては、生活に要した如上の必要品は、男性が河海山野に於いて之を獲得し、それを家に持ち歸ると、婦人が調理、加工して實際の生活に費消せしめた。而してそれらの經濟行爲は皆家族を標的とするものであつたから、家族の必要以外には發展しなかつた。従つて家族が經濟單位となり、經濟的には一家族と他家族との間に何らの關係をも有たなかつた。當時の家族は主として血縁による個人の集合で、其聯盟は極めて鞏固であつたから、禍福に對して共同の責任を負ひ、生死の前に運命を共にした。狩獵時代に於いては豊かな狩の獲物があれば、家族は其前に集つて腹を満たすことが出來たけれども、不獵續きの場合には空腹を抱へて飢渴を忍ばねば

ならなかつた。あらゆる財産は家族の共有で、特に或成員が所有するといふやうなもの稀であつた。たゞ家族團が狩獵及び漁撈に従事するものと、技術及び育児に従事するものとに分れ、前者には主として男性が當り、後者には、宗として女性が當つた爲め、自ら労働が分配せられて、兩性の技術はそれぞれ次第に精妙となつていつた。

家族中の或成員が製作の技術に練磨する結果、それは時間を短縮し、従つて製品の餘剰を來し、家族の必要以外のものを他の家族の餘剰品と交換するところが漸次行はれるやうになつた。それが即ち物々交換の初めで、孤立した自然經濟を次第に孤立しない商業經濟に接近せしめる動因を作つた。

(b) 半獵半農時代——先史時代晚期に印度支那族から稻作を教へられた結果、原日本人は狩獵生活を次第に農業生活に乗り換へるに至つた。いはゆる『原史時代』——古墳時代は即ち半獵半農時代で、家族的生産及び消費の過程が其範圍を擴大して、漸く氏族的性質を帯び、遂に氏族を經濟單位とするに至つたやうに思はれる。

狩獵時代に於いては食物の獲得は不定的であり、且つそれは非貯藏的性質に富んでゐるから、到底多數の人員を養ふことが出来ない。換言すれば一族の食料を供給するのが關の山であらねばならない。のみならず狩獵時代には各家族は散開して住まなければ、狩獵及び漁撈の獲物が直ちに失はれる虞れがあつたから、密集生活を營爲することが出来ず、従つて村落は散開的でありいはゆる『散村』の形態を帯んでゐた。^(三三) 此事が狩獵時代の經濟を孤立的ならしめた第一の素因であつたのである。

然るに農業の開始と同時に、散村は次第に『集村』へ轉換した。それは主として農業が多數の力を協同することによつて行はれねばならぬ性質を有つてゐたからである。播種、灌漑、除草、收穫、それらは皆一定の時季、一定の期間になされなければならぬから、一家族の手ではそれを完全に行ふことが出来ない。従つて他家族と協力して、共同的にそれらを營爲した。のみならず農作物は狩獵品と異つて腐敗の恐れがなく、従つてそれを貯藏して常食とすることが出来るので、饑饉と宴會との交替であつた状態を脱して、各家族は均等に

食物を攝取する事が出来た。かうして榮養が良くなつた結果、人口が繁殖し

^(三四)

て大家族を現出し、遂に同一血屬から成る氏族社會を形成するに至つた。農業と殆ど同時に金屬が輸入せられ、原日本人のそれに對する知識が進んだので、工藝技術は俄かに躍進し、従つて家族内の婦人の片手間仕事として不適當になり、そこに専門的に製作に従事する人々が現はれるに至つた。『日本書紀』に現はれて居る神話の中には、我邦古代の職業分化を痕づける資料が少くない。たとへばイシゴリトメの命から鏡作部が出で、アマノアカルダマの命から玉造部が出で、アマノヒワシの命からアハの國の忌部が出で、アマノコヤネの命から中臣連が出たといふ風に、世襲的職業團體が古くから存在してゐたことが神話に反映せられてゐる。^(三五)

職業の分化は技巧を練磨し、技巧の練磨は製品の産額を増し、生産の増加は需供の過不足を來して、原始交換が次第に其範圍を擴め、家族間から氏族間へ、氏族間から種族間へと段々に進んでいつた。静岡縣の濱名湖に面した或舊アイヌの遺跡からは原日本人式曲玉が発見せられ、原日本人の住居址からは

舊アイヌ式石器が発見されたりするが、それは彼等の間に先史時代に既に物交換の行はれてゐた證據である。物々交換は必ずしも友好關係を有つた種族或は家族間に行はれるものと限つたわけではなく、敵對關係にある種族或は家族の間にも行はれたと見ることの出来る證據がある。けれども物々交換が家族間、種族間の連鎖となり、相互の理解と親密とを促進したことは疑ひの餘地がない。

かうして農業及び工業が発達し、社會組織に一大進歩を齎らしめたにも拘はず、物品の大部分は家族或は氏族によつて生産、消費せられたが故に、經濟生活の形態は毫も變更した譯ではなかつた。故に自足經濟時代には、先史時代から原史時代を通して、歴史時代早期までも含まれると見て差支へない。

(c) 農業時代——前述の如く原史時代から歴史時代早期にかけて氏族が発達したが、各氏族は次第に聯盟して大氏族團を作り、其社會組織は漸次血縁制から地縁制に移りつゝあつたが、飛鳥寧樂時代に入つてそれらの地域團體は綜合的大聯盟を作つて、各地方に多數の小國家が分立し、氏族長中の優秀者

がそれを統轄することになつた。各氏族には氏族長があり、氏族に屬する各家族には家族長があり、多數の家族を基調とするところの氏族を一單位とする農業經營が行はれた。

それらの日の農業は、陸田耕作と水田耕作との二色あつたが、陸田よりは水田が主であつたらしい。即ち耕作物は稻を主とし、粟、稗、麥、大豆、小豆などを従としたらしい。神話の私達に語るところでは、水田には安田、平田、邑併田などの良田と、楸田、川依田、口銳田などの悪田と二色あり、畔を造り、溝を穿ち、池を造つて、貯水、灌漑、排水を行つた。^(三五)山腹の傾斜面に籬段を造つて、高さより卑きに従つて灌漑するところのいはゆる『籬段耕作』(Terraced cultivation)が一般に行はれた耕作法であるらしい。かうした土木工事は恐らく地域を同じくする一溪谷内に占據する氏族の手によつて行はれたであらう。従つて播種、除草、收穫等も氏族共同の經營であつたと思はれる。

それらの日の氏族は既に血屬團體としての原始形態を失ひ、血屬以外に血縁を有たない奴婢、家人、部曲を包容するところの地域團體となつてゐた。氏

族の統制は同一血屬に屬する氏人中の長老である氏の上が之に任じた。かうして發達した地方氏族の首長らは、後、大和政府が出現するに及んで『公』と呼ばれた。公は本來地方首長であつた。地方首長は新田の開墾を行ひ、植民を行つて、其土地を擴大し、其收益を増加する企業家であり、それに隸屬するところの部曲が主として耕作に當つた。耕作部曲はこれを田部と呼んだ、つまり一種の私有民であつた。性別でいへば、これら私有民中の婦人が最も多く耕作に當り、男性は其補助たるに過ぎなかつた。後世までも下種者がサヲトメと呼ばれたのは、古代農業制の殘存である。犁の出現によつて牛を使用する必要を生じた後、土地の鋤耕は男性の手に委せられた。

農具には木鋤、金鋤、犁、鎌等があつた。鐵材の乏少であつた時代には木鋤を用ひてゐたが、漸次金屬製の鋤を用ひ、大陸から新たに犁が輸入せられるに及んで従來の農耕法が改められ、單に人力のみによらず、家畜、主として牛の勞働力によることになつた。

かうして地方首長は多數の私民と老大な土地とを所有し、それらの生産に

よつて巨大なる富を蓄積した結果、權力を生じ、統制を生じ、遂に到る處に小國家を出現したのであるが、それらの小國家はやがて最も勢力ある小國家に統制せられることになつて、日本國家が出現したのである。日本國家の勢圏は、かかるが故に、初めは極めて小さく、次第に擴大されて、いはゆる『大八洲』全體に及んだのであるから、其統制形式は全然血縁を中心とする地縁的世縁的氏族團體のそれに等しきもので、原始的封建制ともいふべき統治形態であつた。従つて經濟組織もまた同様で、いはゞ綜合氏族的經濟組織と稱呼してもよいものであつた。さうした状態は建國後久しく續いて、大化の改新に至るまでは殆んど目ざましい變化がなかつた。

(三) 社會の組織及び階級

古代の社會組織については、既に隨時隨處に述べて來たが、尙ほ念の爲めに今一度こゝで説明することにする。

古代社會の根柢をなしたものは氏族制度であつて、經濟と密接な關係を有つてゐた。氏族は本來家族の擴大したものであるから、それを構成する成員

は皆な血屬であるべき筈である。古代家族はいふところの『大家族制』(Cross family system)で、單に親子孫といふ直系血屬の集團であるのみならず、伯叔甥姪などの傍系血屬をも收容した。即ち或尊屬親及び其配偶を基點として、その血液を受けたものは皆な同一家族員であつた。然るに工藝上の約束から、さうした多數の家族が同時代に一般に認められてゐた一箇の『戸』に收容せられないので、それを他の戸に收容した場合には、同一血屬から成る二つの家族が形成せられる。二つ以上の家族は即ち氏族である。それ故に氏族は同一血屬群であつた。

氏族は古代日本語でウチ(現代はウヂ)といつた。ウチは『内』を意味する。氏には名があつた。氏族名は地名、職名、物名、業名から起つた。例へば葛城、高市、出雲、胸形の諸氏の如きは地名から出たものであり、久米、玉祖の二氏は神名から、中臣、齋部の二氏は職名から、少子部氏は物名から、鏡作、玉作、服部、書衣縫の諸氏の如きは藝名から出たものである。^(二六)

家族に血屬以外の準家族ヤッコが收容せられた如く、氏族には其後非血屬

者を準氏族員として收容した。それが即ちトモと呼ばれたもので漢字では品部、部曲などの字を充てた。部曲は同一血屬群であることもあつたが、大體に於いてはさうでなく、寧ろ職業團體と見るべきもので、氏に附屬して勞働に従事した。これが爲めに氏族は血屬團體でなくなつたが、血縁がなければ結合力が弱いので、多くの場合には神話によつて共同祖先から出たやうに信ぜしめた。我邦に於いても所謂『混合主義』(Syncretism)は盛んに行はれたらしい。

氏には大小があつた。大小の區別については色々の學説があるが、細井貞雄は本分家の關係である、例せば本家である阿倍氏は大氏であり、分家である阿倍志斐、阿倍間人などは小氏であることで證明せられるといひ、^(二七)本庄榮治郎博士は、齋部氏は昔から齋部の頭梁で、他の氏から分家したものでないのに、天智朝に小氏の表章として、小刀を賜はつてゐるから小氏であつたことは確かである。それ故に大小氏は本分家の關係でなく、格式の高下、族人の多寡による區別であつたらうと説いてゐる。^(二八)

氏には姓が附隨した。姓は古代語でカバネといひ、骨品など、漢譯した。カバネは初め一種の尊號で、地方首長が自ら稱し、或はそれに對して他からつけたところの稱號であつた。たとへば胸形君、宇治土公、媛女君、八十梟帥などいふやうなものである。然るに國家が確立して後は、政府からそれを與へることになつた。たとへば臣、連、造など其適例である。官職名がカバネとなつたものには、縣主、稻置などがある。これらは皆最初、或個人を呼んだものであつたが、後には氏族員全體が稱へることになり、社會的地位を表はす階級性のもつたものになつた。^(三九)

次ぎには社會の階級を窺つて見よう。國家形成以前に於いては、氏族が最大の集團であつて、氏の上の下に氏人と部曲と家の子とが統率せられてゐたが、國家形成後一つの氏であつたところの皇室が全氏族を統轄することになつた爲めに、先づ氏族が統率氏族と被統率氏族との二つに分れ、前者に屬するものはオホ(大)或はミ(御)の敬稱を附して後者と區別することになつた。例へば君に對して大君、臣、連に對して大臣、大連、伴部に對して大伴部、家の子に對し

て御奴と呼んだ。故に『大』或は『御』を伴ふものと伴はぬものとは、公私の區別であるとして差支へない。

統率氏族の首長は即ち天皇で、日本民族の最高階級といふよりは寧ろ超階級であつた。被統率氏族の首長及び首長に統率せられる氏は自由民で、それに隸屬する部曲は半自由民、ヤツコは不自由民であつた。自由民はいはゞ貴族で、半自由民及び不自由民は庶民であつた。氏族の二分と同時に、皇室に屬するカキベはトモベと呼ばれ、ヤツコはミヤツコと呼ばれることになり、遂には貴族の中からさへミヤツコを出すに至つたと思はれる。

部曲は(1)一定の業務を有つたもの、(2)名代、子代に屬するもの、(3)豪族名を帶ぶるもの、(4)異種族の組成したもの、四通りあつた。第一の例には軍事に従ふ久米部、物部の如きがあり、祭祀に従ふ齋部、工作に従ふ弓削部、矢作部、錦部の如きがあり、大方は其職業を世襲した。第二の例には日本武尊の御名代に屬した建部、武烈天皇の御子代に屬した小長谷部の如きがあり、第三の例には蘇我氏に屬する宗我部の如きがあり、第四の例には百濟部、佐伯部、漢部の如きが

あつた。以上の中、第三を除くの外は皆な公的性質を帯んでゐるから、これを公有民と呼び、第三は私有民といつてもよい。共に部民は自己の所有者に對して從屬關係に立ち、其農耕、工作などに從事した。

部曲は皆獨立して戸を構成したが、戸を構成することなしに他戸に從屬したものがヤツコである。ヤツコ即ち奴隸は、初め、孤獨無恃のもの、家族内の收容によつて發生したらしいが、^{後には}被征服者及び犯罪者が其位地を占めた。蝦夷奴の如きは、前者の例である。しかし、ヤツコの發生史は十分明らかでなく、部民とそれとの限界が遠古に於いては不明瞭である。それは階級が餘りに低かつた爲めに、社會の來由を説明するところの神話傳説に反映しなかつたからである。

(四) 土地制度

原史時代以降大化の改新まで、土地制度には多少の變化が起つたらうが、非常に古い時代のことは不明瞭で、只だ血屬團體の共有であつたらうと推測し得る程度にしか知られてゐない。しかし國家が出現し初めてから、土地、殊に

耕地に關する法律的組織が次第に備はつて來て、其所有、用益、計測についての制度が確立するに至つたと見られる。

(a) 土地の所有——これについては、記紀の神話史的表現に反映された資料と、記述された史實とによつて、次ぎの如き種類があつたことが推論せられる。

第一は皇室御料地で、皇室の所有に歸し、直接に皇室が支配したもので、それには勿論それを耕作する農民群田部が、附屬してゐた。これには三種ある。
(イ) 御縣は忘れられた遠古から皇室の所有であつたもので、皇室の私經濟を其收入から支辨してゐたと思はれる。『倭國能六御縣』といはれたものは即ちそれである。(ロ) 屯田は主として開墾によつて皇室が新たに獲られた所有地で、國家成立後舊來の地方首長の所有地の中から獻せしめられたものもあると思はれる。屯田はミタ、ミヤケ、タベの三つから構成する。ミタは『御田』で、皇室が直接に支配せられる耕地の稱である。ミヤケは『御家』で、ミタの生産を格納する倉庫と事務所とから成り立つ。タベは『田部』で、ミタに專屬する耕

作民である。屯田の収入は公經濟に使用せられたらしい。(一)御名代と御子代とは同一性質のもので、前者は天皇、皇后、皇子の御名を後世に傳へよう爲めに、後者は皇子がない場合に、其名の壞滅を虞れて設置された土地で、其収入は皇室の所得となつた。

第二は田莊(チヤウ)で、氏族の所有地である。其起原は色々あらうが、本來は氏族の先占地であり、それに軍功其他で賞賜されたものと、開墾によつて新たに得られたものが加はつた。氏族長は、氏人は勿論部民を使役して田莊を耕作、開拓せしめ、次第に其廣袤を増大した。物部、蘇我の如き大氏族は過大の田莊を占有し、いはゆる土地兼併の風を馴致するに至つた。大化改新の詔書に『自古以降。每天皇時。置標代民。垂名於後。其臣連等。伴造國造。各置已民。恣情驅使。又割國縣山海林野池田。以爲已財。爭戰不已。或者兼并數萬頃田。或者全無容針少地』とあるのは、兼併の弊害を指摘したものである。

第三は社寺領で、神社及び佛寺を土地の所有者とする制度が政府の確立後次第に發達した。神社に屬するものは神戸、神田、神地などの名がある。遠古

に於いては官物と神物との區別がなかつたが、崇神朝以來皇居と神殿とが區別せられ、従つて皇室經濟と神社經濟とが分離し、後者は神戸、神田などによつて維持せられた。佛寺に屬するものは寺田と呼ばれた。鞍作鳥は金剛寺に近江の水田二十町を納れ、聖德太子は斑鳩寺に播磨の水田百町を納れた。

(b) 土地の用益——此過程については明瞭な研究が發表されてゐないが、初めに一種の共同耕作制(Feldgemeinschaft)があり、それが氏族制の發達と共に崩壊して、家族を基調とする世襲的用益權が發生し、段々と土地所有制が成立した。耕地以外の土地が開墾せられると、それが開墾者の私有に歸するといふ慣習即ち開墾私有地(Bifang)を通して、土地集中の現象を生じ、従つて一轉して小作地(Dienstland)をすら晩期には發生せしめたので、大化元年の詔勅には其弊竇を指摘してこれを禁止した。即ち『方今百姓猶乏。而有勢者。分割水陸。以爲私地。賣與百姓。年索其價。從今以後。不得賣地。勿妄作主兼并劣弱』とある。此文で見ると、土地を賣つて毎年其價を支拂はせたやうに見えるけれど、實は貸與して小作料を徵收したものである。かうして大氏族は

廣大なる私有地を占有し、殆ど封建時代の領主であるが如き觀を呈した。一例すれば物部守屋が誅伐せられた時、官沒せられた土地は十八萬六千八百九十代であつたといふ。^(三三) 一事は萬事である。

(c)土地の計測——それらの日に於ける土地計測の單位はシロであつた。シロには『代』或は『頃』の漢字が充てられてゐたが、大體に於いて稻一束(一斗)を得べき地積であつたらうと内田銀藏博士は説いてゐる。^(三六) しかし、十代は七十二歩で、一步は高麗尺で方六尺だつたといふ説もある。^(三七)

第三節 商業經濟時代

商業經濟時代は前代に比して、生産と消費との關係が一層複雑になり、直接に生産から消費に至る過程を取らず其間に交換作用が介在することを以て特徴とする。即ち消費者は悉く生産者でなく、交易の媒介を通じて需要を充たすものが現はれて來た。前代には家族が生産者兼消費者であつたが、此時代には家族の成員は自己の需要する物品のみを生産せずして、他家族の需要

する物品を生産することになつたから、生産者と消費者との二階級に分離し、消費者は自ら生産せずして、他の生産者から物品を仰ぐことになつた。此時代の經濟生活の單位は前代よりも廣大になつたけれども、尙ほ地方的性質を帯んで居り、交易と生産との中心は村落に集中してゐたから、村落經濟と名づけることも出来る。

經濟學者は大抵自足經濟時代を遙か後世まで延長させて考へるやうであるが、私達は飛鳥寧樂時代を限界として、それ以後を商業經濟時代と見做しても差支ないと思ふ。

(一) 班田制時代

大化の改新は經濟的大革命で、在來の氏族制度を根本的に破壊し、全國に散在する一切の私有地を悉く國有とし、人口に應じてそれを國民に頒耕せしめる制度を建てたもので、いはゞ中央集權を原則とする政治的統一であつた。普通に歴史家は此時代を郡縣制時代といふ。此制度は法制的には寧樂時代を通して平安時代末期までも續いてゐるが、實際的には其中期に於いて崩壊

し、貴族によつて統治せられる莊園制時代が來た。

然るに武士階級が勃興して、貴族階級の手から統治の權力を奪取するに及んで、社會組織も經濟様態も著しく變化し、莊園制は漸次知行制に轉換して、純然たる封建時代を現出した。此制度は鎌倉時代から江戸時代末期までも續いたが、時勢の推移と共に文化が進歩した爲め、經濟史的には江戸時代を知行制時代から區別しても差支へない。私は先づ班田制時代から説き起さう。

(a)市の發生——原史時代に於いて既に使役階級と被役階級との二つが現はれ、生産のみに従事する部民が、生産に従事しないで消費をのみ事とする氏の上及び氏人に隷屬してゐたことは前に説いた通りであるが、此消費者の群が即ち後の貴族で、生産者の群が庶民である。貴族の數は歴史時代早期以來著しく増加し、大和政府確立後は更に之に官吏を加へて庶民階級に對立する形勢を生じたので、消費と生産との需給關係が圓滑を缺き、兩者の間にそれを圓滑ならしめる媒介者を必要とした結果、原始商業が漸次發展を見るに至つた。しかしながら、貴族の發達以外に、工業の進歩と其産額の増加ともまた商

業に發生を與へた大きな一動因であることは勿論である。

原始商業の現象は市と行商人とである。忘れられたる遠古から著名な市には、海柘榴市、阿斗桑市、餅香市などがある。常陸の高濱の海邊や、出雲の朝酌瀬戸なども原始的市場として民衆が集つた。神話に現はれてゐる天高市の名稱は、かうした古代市場の反映であると思はれる。初め市場は村落の一地點或は村落と村落との中間にある適當の地に於いて、村民の餘剰品を物々交換すると行はれ、それは宗として祭祀の行はれる日を選んだから、大體神社に近い場所であつたと思はれる。古代語マチ(町、或は市)は祭祀を意味するマツリの訛であるマツイの約まつたもの、即ち *maturi* → *matui* → *mati* であるとするば、イチはイツキの轉訛であるに相違ない。従つてそこには人が多く集り、歌垣なども行はれ、其結果、交換の効果が一層大きくなつたと疑ひはない。寧樂時代には寧樂の都には東西の市があり、市司が任命されたりした。市場には街路樹が栽ゑられ、日光を遮つて休息に便したりした。『萬葉集』に『東の市の栽木のこだるまで逢はず久しき宜べ戀ひにけり』などいふ歌が載つてゐる。

(b) 行商の發生——行商はいはゞ市の移動的なもので、初めには恐らく物物交換を行ひ、後には貨幣によつて賣買するに至つたと思はれる。欽明朝には山背の深草の人秦太津父が伊勢に行商し、歸途に山中で嚙み合つてゐる狼を救つたといふ傳説があり、寧樂時代には大安寺の修多羅分錢三十貫を借りて、越前の都魯鹿津に行つて商賣したといふとが記載されてゐるから、原始商業は既に飛鳥寧樂時代に相當に盛んであつたことが推想せられる。

(c) 貨幣の出現——物々交換に賣買が並行したとすれば、賣買の媒介となるところの通貨が存在しなければならぬ。言語學的討究の結果では、『賣』を意味するウリは、ツングース系の『馴鹿』を意味するウラに起原し、『買』を意味するカヒは南方系の『貝』を意味するカブに起原してゐるから、遠古に於いて一時貝貨が存在してゐたやうに思はれるが、十分にそれを證據立てるほどの材料はまだ見つからない。

『魏志』の韓傳を見ると、紀元三世紀の頃、倭、韓、濊諸國には既に鐵貨が存在してゐたことが知れるが、次いで一時銀錢の用ひられた時代があつたと思はれ

る。其理由は天武朝の勅令に以後は必ず銅錢を用ひ、銀錢を用ひてはならぬとあるからである。^(四二) 持統朝には鑄鐵司があり、文武朝には鑄錢司が置かれたから、文武朝以後、我邦で銅貨の製造せられたことは明らかであるが、それ以前には日本で造られたか、支那から輸入せられたか、不明である。吾邦の各所から五銖錢、貨泉などが發見せられるから、輸入支那貨幣の通用してゐたことは疑問の餘地がない。和銅元年に銀錢並びに銅錢を鑄たが、それが即ち和同開寶である。文には『和同開珎』とあるが、『同』は銅の略であるやうに、『珎』は珍でなくて、寶のハと貝とを略したものであるといふまでもない。後、開基勝寶、太平元寶、神功開寶など、金銀銅貨の鑄造あり、吾邦は年を逐うて實物經濟時代から貨幣經濟時代に移つていつたのである。^(四三) 貨幣を意味する日本語セニは漢語『錢』(現代音 Chien)の日本化(子音語尾にイを加へる)であるから、貨幣の通用が支那經濟文明の影響であることは勿論である。

(d) 口分田——孝徳朝に斷行せられた政治上の改新は、實に社會經濟上の大革命であつた。それを在來史家は『大化改新』といつて、『明治維新』と比較

してゐるが、その内容は、(1)土地を國有とし、私民を解放すること、(2)行政區劃を改め、交通制度を立てること、(3)戸口を調査し、耕地を測量すること、(4)庸調の新制度を建てることの四大綱から成り立つてゐた。

これらの四大綱の中、經濟と最も關係の深いのは全國に亘つて土地の私有を禁じたことである。これは國造、稻置、縣主、村主などの官僚的及び社會的首長並びに臣、連、伴造などの大小氏族の有つてゐた田莊を廢棄し、且つそれに所屬してゐた部曲を解放したもので、國家の眼からは全民衆を平等に見るものである。

此結果出現した新制度が班田、一に口分田といはれる制度で、一切の民衆は戸口に應じて國有の土地を頒給せられ、それを耕作して一定の租稻を上納した。田地の計測は長さ三十步、廣さ十二步(即ち三百六十步)を一段とし、十段を一町とし、段毎に租稻二束二把(一町では二十二束)を納むべき規定であつた。一束は十把から成り、一斗(米五升)に當るが、一段の穫稻は七十二束(七石二斗)であるから、租稻二束二把(二斗二升)を差引くと、六十九束八把(六石九斗八升)の

手取りとなるわけであつた。そして一人當りの口分田頒給高は、男は二段、女は三分の二段で、六年毎に收授を行つた。^(四五)けれども此毎六年の收授は、口分田の過不足に對して行はれ、いはゆる『田地の割替』をしたものでないと本庄博士は斷じた。^(四六)

(e)庸調の徴收——租稻は正税で、それ以外に附加税があつた。田の調は絹、^(四七)絶、布の三種で、每一町に絹は一丈、絶は二丈、布は一疋を課した。一疋は長さ四丈、廣さ二尺半である。また別に戸別の調として一戸に布一丈二尺、其附加税として鹽贄などを課した。外に官馬の貢輸、兵器の貢進などがあつた。庸には仕丁、采女があり、前者は毎五十戸一人を使役し、後者は郡の少領以上から選んで、從丁一人、侍女二人を從へて貢し、前者は五十戸で、後者は百戸で、其費用を支辨せしめた。

これらは大化改新の際の規定であるが、後改定せられて、後世まで永く行はれたのは大寶令の規定であつた。

(f)社會階級——此時代の社會階級は貴族、自由民、不自由民、奴隸の四つであ

つた。不自由民は只だ公權を有たぬ點だけが自由民と異つて居り、こまかくは品部、雜戸の二種に分たれ、主として工業勞働に従事した。奴隸は賤民階級で、官戸、陵戸、家人、公奴婢、新奴婢の五種にわかれ、一般良民との婚姻が禁止せられてあつた。^(四七)官戸は官廳に屬し、陵戸は山陵を守り、家人は世襲的に私人に隸屬した賤民で、物件視されなかつたが故に賣買の目的物とはならなかつた。公奴婢は官有であつて、老人及び癱疾は官戸に編入せられたが、私奴婢は私人の所有で、財物視せられたが故に、賣買の目的となり、それを盗んだものは盜に准じて論ぜられた。奴婢の賣買價格は、天平二十年の例では、奴一人、婢三人が錢二十貫、一人の平均價が五貫であり、天平勝寶二年の例では、奴が稻一、〇〇〇束乃至七〇〇束、婢が八〇〇束乃至六〇〇束であつた。^(四九)

(g) 勞働編制——班田制時代の基本經濟は農業で、前代に比すれば耕作物の種類多くなり、耕作の方法も進んで、水田の外に陸田も耕作せられ、麥や麻やが盛んに栽培せられる一方、養蠶も獎勵せられ、工業の進歩に伴うて農具も大に改善せられた。農業に主として當つたのは自由民で、一人當り男は二段、女

は一段百二十歩の土地の用益を許されたが、平安時代に於ける租税は、一段の獲稻五十束の中で二束二把を上納するのであるから、所得の約二十五分の一に過ぎず、これを後世の六公四民、或は五公五民などに比べると甚だ軽いが、これは土地税(Land tax)であつて、此外に前述の如く、戸別税(House-rate tax)として調を納め、人頭税(Pole tax)として庸を課せられたから、必ずしも軽い負擔ではなかつた。殊に平安時代中期以後に於いては、地方官吏の誅求が甚しく、逃口等の浮浪者を多數發生せしめた。^(五〇)農村の脱走は寧樂時代から行はれたが、それは重に庸役に基づいたものであつた。^(五一)それらの日の家族制は大家族主義で、大寶二年の戸籍の斷片を見ると、或一家の人口は百二十四人で、其受田は十三町六段百二十歩あり、そこでは三十六人の奴婢が使用せられた。^(五二)また他の家族は九十六人あつて、其中良口が三十七人、賤口が五十九人であつた。^(五三)つまり、これら多數の奴婢が自由民の生活を支持してゐたのであつた。次ぎに不自由民は主として工業に従事せしめられた。工業は飛鳥寧樂時代以來長足の進歩をしたが、大方は宮廷、貴族、寺院などに屬して、未だ國民化さ

れるに至らなかつた。宮廷工業は甚だ盛んで、大藏省には漆部司があつて、漆部を督して漆工に従事し、縫部司は縫女部を督して裁縫に従事し、織部司は染戸を督して染織に當り、宮内省には木工寮、鍛冶司、宮陶司があつて、いづれもそれらの製作に拘はりを有つてゐた。採礦、冶金は寧樂時代から盛んになつて、天平年間に大佛を鑄造した時に要した金屬は、熟銅七三九、五六〇斤、鍊銀一〇、四四六兩、白鑠一二、六一八斤、水銀五八、六二〇兩であつたが、金を除く外、それらの全部を國內で供給し得るまでに進歩してゐたのである。これらの工業生産には皆な不自由民が従事した。これらの工藝品の製造能力の平安時代に於ける地方的分布は、『延喜式』の規定を見れば直ぐにわかる。^(五四) また其製産の品種及び數量の大體も同書によつて窺ふことが出来る。^(五五)

最後に奴隸は農業及び工業に使役せられ、また雜役にも驅使せられた。此階級の中で最も多數であつたのは奴婢で、土地の開墾や社寺の建築やは皆な彼等の勞働力に俟つたのであつた。私奴婢の存在は、地方貴族の富榮を齎らして、大化改新の政治理想を根柢から覆すことになつた。それ故に大化改新

乃至寧樂時代を經濟史家は『奴隸經濟時代』と呼んでゐる。^(五六)

(h) 商業現象の展開——市と行商との起原及び貨幣の發生については既に述べたが、こゝに再び寧樂、平安兩時代に於けるそれらの展開について述べることにする。

市は『大寶令』の規定に従へば、市司によつて監督せられ、商品を三等に、各等の價格を三等に分ち、それらをイチノクラ(市の座)に陳列し、マチャ(店家)に於いて賣つた。營業時間は正午乃至日没であつた。平安京に於いても東西の兩市があり、東市は月の十五日以前、西市は十六日以後に開かれた。諸種の規定は大體『令』のそれと同じであつたが、市場の絶對平和を保障する爲めに六衛府の舍人でさへ、帶劍のまゝではそこに入ることが出来ない規定が設けられた。東市には五十一塵、西市には三十三塵あり、それ〴〵特定の商品^(五七)を販賣した。然るに東市のみ榮えて、西市は次第に衰へてゆくの、兩市の間には屢々

争ひが起つた。京の市は源平抗爭時代にはもはや殆ど崩壊してゐた。地方の市で著名なものには、大和に椿、辰飛鳥、あふさがあり、播磨には飾磨、攝

津には、難波、近江には小脇があつた。^(五八)

津屋の發生は平安時代の一特徴で、海舶の輻湊するところに貨物を集め、それを賣つて手数料を取るもので、後世の間屋の祖となつた。京畿地方では河陽、江口、神崎、蟹崎など、西海に通ずる淀川沿ひの河港に津屋があつたらしく、近江の大江は北陸の關門として相當に物資が集散した。博多、武庫、難波の三津は海港として榮えたが、海外貿易の盛んなのは博多であつた。寧樂時代以降海外貿易は可也盛んに行はれ、朝鮮、渤海、唐との間には交通が頻繁に行はれたが、それらはいづれも官營であつて、民間の商業的企業は起らなかつた。平安時代に筑前の清原守武が宋に往來して私に貿易を營み、發覺して佐渡に配流せられたのなどは、全く除外例であつた。^(五九)

時代早期の行商には男性が従事したけれど、それは遠距離の地點に行はれた爲めであつた。近距離の地點に振賣が行はれるやうになつてからは婦人がそれに従事した。平安時代ではそれをヒサギメといつた。^(六〇) 家庭勞作の餘剩を若干の貨幣に換へて、生活を補はうといふのが目的であつたらしい。

(二) 莊園制時代

大化の改新は支那制度の模倣であるにしても、また在來慣習の法律化であつたにしても、とにかく土地、人民の公有を主眼としたものであることは明らかである。然るに一方園地給與の規定があつて、特別の事由がない限り沒收せられなかつたのみならず、他方、口分田は割替を行はなかつた爲めに交換、賣買などが行はれて、次第に世襲的性質を帯び來つたと同時に、新たに開墾せられた墾田の私有が許された爲めに、土地國有主義は自然崩壞の道を急いだ。^(六一) もはや『延喜式』には青苗帳に口分田賣買を記入する形式さへ規定されてゐるから、それらの日には既に土地私有が公認せられてゐたのである。いはゞ班田制は既に破壊せられて、莊園制が成立しつゝあつたといつてよい。

(a) 莊園の成立——莊園の意義は時代によつて變化してゐる。莊園とはいふものゝ、園は社領であつて別物であるから、莊の意義さへ質せばよいわけになる。莊の古義はナリトコロで、住宅以外に所有された貴族の田地をさしたものであつた。班田制施行後に於いても、賜田、功田、神田、寺田などといひ或は

政績、勳功、才藝あるものに賜はり、或は神社、佛閣に交附して、營繕其他の費用に充てしめられたものがあつた。これらは租だけ納めて庸調は賜主に留めたり、或は全く不輸租であつたりしたもので、賜田、功田は、期限が来れば政府に還す規定であり、神田、寺田はそれから除外せられた爲めに、賜田や功田を社寺に寄せて輸租の義務を免れ、其利を折半するといふやうなとも行はれ、また墾田や勅旨田を永久に占領して、遂に全然私有するに至るといふ弊風を生じた。^(六三)

これら諸種の動因から成立を見たのが莊園で、後來それは不輸入の二大特權ある大所有地といふ意味を有つに至つた。かるが故に莊園の所有者は、京都及び地方の豪族、并びに神社、佛閣で、一般民衆は全くそれに與からなかつたのみならず、いはゆる『農奴』の形式で莊園に隷屬するに至つた。

かうして莊園は年々増加し、反對に國有地は歳々減少し、平安時代晚期には全國が漸く莊園化しようとした。鎌倉時代早期にはもはや殆ど莊園化したところがあつた。たとへば『建久圖田帳』によれば、日向國は田數總べて八千六十四町(甲)あり、其中寺領は二百三十八町、社領は二千百六町、權門領は八條女

院御領が千五百二町、前濟院御領が二百七十八町、殿下御領三千八百三十七町、没官御領六十八町、公領二十五町あつて、其合計は八千五十四町(乙)となる。どこかに十町の間違があるに相違ない。而して此地積を五郡に割り當てる、白杵郡は六百七十三町、兒湯郡は九百七十七町、那珂郡は六百二十町、諸縣郡は三千二百九十町、宮崎郡は二千六百二町で、其合計は八千百六十二町で、前述の合計(乙)と百八町(六三)の差がある。此差は何によつて生じたか不明であるが、はやり誤寫したものであらう。^(六三) 何にしても大部分が寺社領、莊園であつて、公田といふものは殆ど全くないに等しい。大隅國は總田數三千七十七町五段の中、公田は三百八十八町三段餘に過ぎないから、残る二千六百二十九町二段は社領、寺領、莊園である。薩摩國は總田數四千十町七段の中、公田が千五十四町あつて、前二例に比すれば多い方であるが、莊園等の二千九百五十六町七段に比すれば、約三分の一である。^(六四)

かうした公田の減少は、國家の財政の基礎を危うくし、貴族及び地方豪族を跋扈せしめる動因を作つたので、後三條天皇は記録所を設けて莊園を整理し

ようと企てられたが、滔々たる時代の趨勢を如何ともすることが來出なかつた。^(六五)

(b) 社會階級——莊園制時代は平安、鎌倉兩時代に亘る經濟を中心とした時代區劃で、政治から見れば貴族專權の社會が崩壊して武士統制の社會が出現するまでの間をいふ。かうした時代の社會階級は、大要次ぎの如くに分けることが出来る。

第一は貴族階級である。これは京都に定住して政治の權力を握り、地方に多數の莊園を有して國家の富を私したものである。平安時代中期以後に於いては、藤原氏が全盛を極めて、貴族といへば藤原氏に限られる傾向があり、其一族が朝廷の重職を占めて、他は其鼻息を窺ふのみに過ぎなかつた。藤原鎌足が大化の改新に盡瘁して偉勳を立て、其子不比等が法制の編纂に大功を立て、其子四人が南北、式、京の四家に分れて以來、父子相嗣いで門戸を張り、殊に北家は最も榮えて富力と權力を握り、寧樂時代に於いて既に其地盤を固めたが、平安時代に入つては一層勢力を振ひ、一門から多數の女子を皇室に納れて宮

中、府中に勢力を振ひ、道長に至つて專横を極めた。彼れは榮華の限りを盡くして『此世をば我世とぞ思ふ望月の虧けたることもなしと思へば』と豪語し^(六六)た。彼れと彼れの一族との奢侈享樂の生活は、皆な莊園に屬する農奴の供給するところで、彼等が京都で歡樂に現を抜かしてゐる時は、地方の田園で重き軛に苦む民衆の呻きの聞かれる時であつた。

第二には佛教の弘布と共に擡頭した僧侶階級が、社會經濟上に偉大なる力を蓄へるに至つたことを注意したい。彼等の城郭であつた寺院は、最初には多數の奴隸を所有し、次には多數の土地を所有し、單に國家に租税を納めなかつたのみならず、自ら行政權を使用し、また軍隊を養うて武力を以て自らを護つた。彼等が僧兵團の武力を恃んで政府に反噬し、自分達の非違を成し遂げたことは記載に暇がないほどである。竹越與三郎氏が寺院を評して『國家の中に國家を立て』^(六七)たといつたのは眞に適切である。

第三に地方豪族は莊園に占據して、養ふところの家の子郎黨を耕作、開墾に従事せしめ、武術を練磨して軍隊を組織せしめ、初めは京都貴族に媚附して其

手先となつてゐたが、數次の戦亂を経て漸次實力を現はし、遂に貴族に代つて中央集權破壊後の社會を整理するに至つた。それが即ち武士階級で、次ぎの時代に大に活躍した。

第四に口分田の頒給を受けて耕作に従事してゐた自由民は、中央政府から任命せられて來任する國司の誅求に堪へかね、本貫を脱出して他郷に漂浪した。出舉の稻の元利を拂ひかねて逃亡したのもあつた。それらの日の國司の苛斂は、『受領は倒る處に土を擱め』^(六八)といふ諺が一般に流行つてゐたのを見ても知れる。中には努力して開拓した墾田を公收され、逃亡の己むなきに至つた者もあつた、かうした逃亡者は浮浪人、浪人、或は浮宕など、呼ばれた^(六九)。ところがこれらの浮浪人は、土地開墾に憂身をやつしてゐる莊園の領主から歓迎せられ、莊民となつて莊土を耕作し、或は新地を開墾して一定の所當を納めた。所當は年貢又は勞役で、それを領主に納める代りに、國家に對する納税の義務は免れた。かうして莊民と領主の間は經濟的に結合せられ、次第に主従の關係にまで進んで行つた。此事實が郡郷の人口を減少せしめて、反對に

莊園を盛大ならしめたのである。

第五に奴隸は平安時代の初期に於いて既に解放さるべき運命を見たが、莊園の増加と共に次第にそこに流入して莊民となり、或は地方豪族の家の子郎黨となり、然らざる者は賤業に従事して賤民の状態を續けた。

(c)中央集權制の崩壞——如上の現象は、政治的に觀れば、貴族が國有地を私有し、公民を莊園内に收容して支配することになつたのであるから、國家の經濟的基礎を破壊したのみならず、人民に對する行政、司法、警察の三權を奪取したものであつて、大化以來の中央集權制、即ち郡縣制を崩壞せしむる重大なる結果を惹起した。

また社會的に觀れば、貴族階級が没落して武士階級が興起する社會的轉換の重大なる現象といはなければならぬ。地方に莊園を有する貴族は、都會に居住して莊園の生産を奢侈生活に浪費し、一切の生産には直接の關係を有たなかつたのみならず、不自然な性的享樂や政治的鬭争の爲めに、富力と體力とを喪失して、地方に發達した武士階級の爲めに其位地を奪はれ、たゞ名のみ

を擁して實力を有たない統治階級たるに過ぎなくなつた。かうして、事實上、中央政府の威力が失はれた結果、都會は勿論地方には盜賊が横行し、騷擾が連続し、叛亂が勃發し、國を擧つて無政府の状態に陥らうとした。私は今それらを一々こゝに記載する違がないから、『延喜天曆の治』といつて、醍醐天皇の御代に比較せられる村上天皇の御代の出來事を代表的に披露して見よう。

(d) 盜賊の横行——天曆元年四月十日には盜人が兵庫寮に入つたので、閲檢すると、盜難品が多數であつた。^(七〇) 同二年三月二十七日の夜、強盜が右近府曹司に入つて、物品を掠取したので、二十九日には左大臣藤原實賴が、四府の馬寮に夜行を勤むべきとを命じ、四月三日には諸衛に對して、陣の直を勤むべき命令が發せられた。かうして官府の警戒が嚴重になつた爲めでもあらう、強盜は民家を覗つて、五月十三日には白晝に西河邊の民家に押入つて雜物を掠取したが、六月一日には強盜が勸學院に押し入つた。容易に犯人が拿捕されなかつたので、十六日に諸衛の官人を京中に分遣して、奸犯の者を搜索せしめた。

十二月四日の夜には、盜人が直忠朝臣の衣を取つて殿上から走り出たが、これで殿上の盜難は五度目であつた。十日には群盜が左少辨橘好古の曹司に入つて雜物を掠取したので、其夜から諸衛の夜行が始められた。官署や宮中に強盜が入り、白晝に民家が襲はれるといふ遣り口は、盜人が檢非違使や諸衛を飽くまでも食つてゐたのであつて、警察權の威力が衰へてゐたことの證據になる。

(e) 騷擾の連續——次ぎに天曆三年正月十六日の夜、式部少錄賀陽眞正の家で恐るべき殺害事件が起つた。それは東大寺別當寛救の統率がうまくゆかないことを訴へる爲めに、同寺の法師六十人ばかりが上京し、其中十人が賀陽の家に泊つてゐたが、各自怨み合つて喧嘩を始め、遂に刃傷沙汰に及んだものであつた。^(七二) 六月四日の曉には院の下人が諸衛の舍人の家屋を破壊したが、翌々六日には諸衛の舍人數百人が群を成して、院の御厨預中務丞佐忠の宅を撃破した。僧侶や官人がかうした私闘をするまでに、時代の警備は弛んでゐたのであつた。同年六月二十三日には、東西未發覺の犯人二十人が、早魃の祈禱

といふ理由で赦免されてゐるのを見れば、時代の司法権がどんなに嚴正を缺いてゐたか分る。更に天徳二年四月十日の夜、強盜が右獄を撃ち破つて囚人を奪取し、九人の中一人は獄門の前で打ち殺されたが、他は悉く逃げたので、十一日に六衛府の官人を召して追捕せしめ、十四日に至つて獄囚八人を攝津で逮捕し、其中二人を射殺したといふのを見れば、殆ど政府の司法警察に威力のなかつたことが窺はれる。^(七二)しかもこれは六衛府が儼として備はる禁闕の下^(七三)のたもとである。地方に於いては、それが一層甚しかつたことが推想せられる。

(五)叛亂の勃發——前には前九年の役、後には後三年の役があり、北東地方に於いて政府の威令の行はれなかつたことは素より明らかであるが、それは殆ど國境外、蠻夷の住み家と思はれてゐた陸奥出羽のことであるから、姑らく措いて問はないにしても、これより前、天慶の亂や平忠常の亂が東國に於いて、藤原純友の變が四國に於いて、殆ど同時に、しかも藤原氏全盛時代に起つたことは見逃すわけにはゆかない。天慶の亂は普通には、平將門が檢非違使になつたといふと望んでも、其望が遂げられなかつたことから起つたと云ひ傳へられる

が、實は地方に於ける勢力争ひ、莊園の奪ひ合ひから起つた私闘に過ぎないのであつて、國衙に權威なく、國守は單に名儀だけのもので、地方の豪族を制する實力がなかつた爲めに、私闘が嵩じて叛逆の形を帯ぶるに至つたのである。將門が關白藤原忠平に寄せた書に、『將門雖非本意。討滅一國。罪科不輕。可及百縣。因之侯朝儀之間。且虜掠坂東諸國了。』^(七三)とあるのは、決して虚言ではなかつたと思はれる。

また藤原純友の亂は、彼れが伊豫大椽として任地に赴き、任が満ちても歸らずに、日振島に據つて沿海を劫掠したことを指すので、本來瀬戸内海に存在した海賊が稍々大規模に活動したものに過ぎなかつた。其活動は承平六年から、千艘からの船を操縦し、官物と私財とを抄劫したので、伊豫守紀淑人がこれを懐柔し、降參者に衣食、田畠を支給したりした。^(七四)しかし、純友は依然として活動を續け、天慶二年十二月、將門が東國で謀叛した頃、一層顯著な運動を試みたと見え、『十九日乙卯。諸卿於陣頭。定申藤原純友亂惡事。』と『日本紀略』は記してゐる。『純友追討記』によれば、彼れは將門の謀叛したことを聞いて

自分も亂逆を企て、士卒を京都に送つて連夜火を人家に放たしめた^(七五)とある。備前介藤原忠文が攝津の須岐驛で純友の徒黨に殺され、また播磨介島田惟幹が生擒されたのは、叛亂の状況を報告する爲めに上京の途中であつたといはれる。三年正月一日小野好古が山陽道追捕使に任ぜられて征討に赴き、四年五月十九日藤原忠文が更に征西大將軍に任ぜられ、七月七日純友の首級が京都に送られるまでには、足掛け八年かゝつた。其鈍重さは可笑しいほどであるが、さほどに中央政府の権力は弱つてゐたのである。

平忠常の亂は、彼れが前上總介を鼻にかけて、現に居住してゐる下總の國司の制令に従はず、兵を集めて國衙を侵したのに初まるといはれてゐるが、檢非違使平直方らが東海、東山二道の兵を以て追討に向つたのを聞いて、忠常が勘問を遂げずに兵を用ひることを憤つたところを見ると、國司にも失當の點があつたに相違ない。新たに追討を命ぜられた源頼信の攻撃軍が攻撃を開始すると、忠常は直ぐ降伏して亂が平らいだけれど、これらは要するに叛亂の起らねばならぬ状態に社會のあつたことを示す二三の例證に過ぎないのであ

つて、日本全土は將に貴族統治の軛から脱すべき機運を迎へてゐた。

(三) 知行制時代

前述の如き矛盾に満ちた貴族統治は、平安時代晩期に至つて破綻を示し、遂に鎌倉時代に於いて新興の武士階級の手に統治の権力が移つてしまつた。政權推移の過程は頗る複雑で、一言に説明し難いけれども、文治元年に源頼朝が大江山の獻策に基づいて、國衙と莊園とに守護地頭を置くとの決心をなし、それを京都朝廷に申請して勅許を得たのが初まりである^(七六)。平安時代晩期に於いては、國衙には國司が居り、莊園には莊司、雜掌などが居つたが、そこへ鎌倉幕府の御家人が割り込んでいつて、在來政治に干渉を始めたのである。守護の職掌は、最初警備を主とし、國中の雜務を沙汰することを従とし、在廳人と共に事務の處理に當つたが、後には大番の催促、謀叛人及び殺害人の追捕、盜賊の檢斷を行ひ、戦時には地頭、御家人を促して國民を夫役に充て、それを率ゐて事に従はしめた。また地頭は租税を徵收して本家、領主に收めしめ、盜賊があれば追捕して守護へ引渡すことを任務とした。守護や地頭には御家人が任

ぜられたから、それらと鎌倉幕府との間には密接な連絡があつて、次第に武士中心の政治制度を確立するに至つた。即ち守護地頭は國司領家の土地を次第に蠶食して自己の知行地となし、それを世襲して後に大名、小名となるの素地を作つた一方、莊園制を破壊して知行制を馴致せしめ、後日の領地制出現に對する準備をなした。

知行制の種子は平氏が一時軍國政治を行つた時に播かれたもので、賴朝はそれを大成したに過ぎない。平安末期の院政も實は莊園制の弊害を匡正し、公田制を復活せしめる爲めに起つた運動で、其目的は達せられなかつたが、莊園制は所詮破壊せられねばならなかつた。

鎌倉時代に於ける社會經濟現象の中重要なものを擧げて見ると、武家の知行地が支配的な土地制度となつたこと、職業が分化して社會階級が確立したこと、座が出現して商工業の發達したこと、問屋の發達したこと、武家法制が發生したこと、武士道が發達したことなどを算へることが出来る。今これらについてざつと説明して見よう。

(a) 武家の知行地 —— 知行の語は古代からあり、従つて其意義は色々に變遷したが、鎌倉時代に於いては略々一定し、莊園に本家、領家のある場合には、本家は所當年貢を知行し、領家は下地を知行し、一人で兩方を知行するのを一圓知行といつた。『沙汰未練書』には本家を釋して『本領主御事也』といひ、領家を『朝恩所領也』といつてゐるが、詳しく云へば領家とは領主のこと、本來は三位以上の領主に限つて特に領家といつたのであるが、後には双方に共通して混用せられるやうになつた。本家とは領主が所領を保護する爲めに、優勢者に土地の所當の一部を寄進して、其土地の名義上の支配者となつてもらつたもので、天皇、上皇、院宮、寺社等が多く本家となつてゐる。

班田制に在つては、全國の土地は皆國有で、私有地といふものがない筈であるが、功田、位田、職田、墾田、社寺田の占有が基礎になつて、公田がいつしか私田となり、莊園制度が馴致されたことは既に述べたが、それらの占有者が後には領家、領主となり、領家、領主の上に名義上の支配者たる本家が出現するに至つたのであつて、本家は名義を貸して其得分を納めたものである。いはゞ『上前』

をはねたものであつたが、鎌倉政府の任命した地頭や守護は、其手で領主、領家の土地に入り込んで、上前をはねたものである。地頭の得分は段別五升であつて、従来免税地であつた場所からもどしどし、それを取り立てたから、武家の収入が増加した代りに、公卿らの収入は遞減して、遂に公卿階級を經濟的に壓迫することが出来たのである。

『貞永式目』其他の古文書に従ふと、鎌倉時代の土地は(1)領地又は知行地、(2)寺領及び社領、(3)公領、(4)間田の四種あつた。間田は村落の共有に屬する林野池溝の類と開墾者の名を冠せる名田とを含んで居る。公領は初め國有地であり、國司がそれを支配してゐたが、國司の遙任或は土着によつて、次第に私有地に變じ、名儀だけは公領であつても、實は國司の私領となつてゐた。寺領及び社領は昔の寺田、神田の名残りである。領地又は知行地は領主によつて占有せられた莊園地である。鎌倉政府から『安堵』の下知、即ち所領を知行すべき旨の下知を得た武士の領地は、これを本領又は私領といひ、其領有者を開發領主と稱して、鎌倉政府に對して『御家人』の地位に在つた。頼朝が平氏を滅

した時、其領地は悉くこれを我手に收めたが、承久の亂に宮方に與したものの、領地も之を沒收して新たに補佐した地頭に分與したから、鎌倉政府に屬する知行地は甚だしく増加した。

しかしながら、地頭の知行するところの封地は狭小であつて、大なるも二箇郡に過ぎず、小なるは三分の一箇村に止まり、室町時代に見るやうな大規模の封地は鎌倉時代に於いてはこれを見る事が出来なかつた。

(b)職業の分化——平安時代に於いては農業が唯一の國民的産業であつたが、鎌倉時代に入つて商業と工業とが相並んで發達を遂げた。工業は従来、貴族及び寺社の保護下にあつたが、それらの工匠は座に屬して民衆一般の生活に必要な物資の生産に従事することになり、こゝに工人階級の發生を見た。武器、陶器、漆器等は此時代に特に發達した。

(c)座の出現——鎌倉時代の商業現象として注目さるべきは座の出現である。座は守護、大名、寺社の如き勢力者に對して或種の課役を負擔する代りに、一定の商品の販賣權を獨占したものである。絹座、炭座、米座、檜物座、千朶積座、

相物座、馬座が謂ふところの『七座之店』で、商品は大方見世棚に陳べて賣買せられた。これらの座には鍛冶、鑄物師、巧匠、番匠、木道、金銀銅鐵細工、紺搔、染物、綾織、蠶養、伯樂、牧士、炭焼、樵夫、檜物師、轆轤師、漆工、蒔繪師、紙漉、唐紙師、笠張、蓑賣、廻船人、朱砂、白粉、焼、櫛引、烏帽子折、弓矢細工、深草土器作、沽酒、酢造、壁塗、葺師などの職人が合同してゐたといはれる。

(d)問丸の發達——前代の津屋が鎌倉時代末期には問丸に發達した。問丸は諸國の津々浦々に在り、諸國から送り出す産物を集めて販賣し、其手数料を取つた。此時代にはもはや旅宿が鎌倉などには開けてゐたと思はれるが、地方では尙ほ其施設がなく、商人は多く問丸に泊つたやうである。問丸と同時に、『替錢』といつて、後世の爲替に相當する商行爲が始められた。

(e)武家法制——頼朝以來、慣習に従うて行はれた鎌倉政府の裁判規準を成文化した法律が、貞永元年に北條泰時らによつて制定せられた。『御成敗式條』或は『貞永式目』といはれるものがそれで、評定衆が裁判の目安にするのを眼目とし、旁ら幕府の家人、守護、地頭にも示して憑據とせしめようとしたもので

ある。泰時が京都六波羅の北條重時に與へた書に、『かやうに沙汰候を、京邊には定めて物も知らぬ夷どもの書集めたる文とて笑はるゝ方も候はんずらん。憚り覺え候へ共、兼て定められ候はでは、人に従ふ事の出来ぬべく候故にかく沙汰候なり。關東の御家人、守護所、地頭には遍く披露して此心を得させられ候べく候なり』とあるのを見れば、其邊の消息が明らかにわかる。律令は支那法の模倣で、我國民の生活に適しなかつた爲め、いつとはなしに空文に歸したが、貞永式目は古來の慣習に重きを置いて制定せられたが故に、後々までも武士階級を支配する有力な法律として残り、明治維新に至るまで其效力を失はなかつた。

(f)武士道の發達——郡縣制時代に於いては、國司は中央政府から任命せられて來去したが故に、農民との關係が甚だ淺かつたが、莊園制時代に於いては農民は領主に對して乃貢を納める被搾取者の位地に立ち、何ら恩愛の感情を有たなかつた。然るに其晚期に於いて武士が莊園内に發生して家の子郎黨を養ふに及び、兩者の關係は親密となつたが、鎌倉時代の知行制が行はれるに

至つて、其關係が一層濃厚となつて、主従の關係が成立した。大名と將軍との關係もまた同様で、『すは鎌倉』といふ場合には、羸馬繩轡で一散に駈けつけて、君の馬前に討死するのを光榮とする忠義の心を武士道の根本とするに至つた。いはゆる『御家人』は鎌倉政府から本領安堵の下し文を給はつて、其生活を保障せられてゐるから、それが武士道發生の經濟的動因となつたことは勿論であるが、幕府の保護や將軍執權の慈悲やが、永い歲月の間に武士の精神を吸引したことも重い動因であらうと思はれる。

然るに晩期に元寇があり、鎌倉政府は軍費の爲めに財政困難に陥つたのみならず、戦功ある將士の行賞に供すべき土地がなかつた爲めに不平が起り、集權制が次第に崩壊して分權制に移しようとした。いはゞ政府に統一の實力がなくなつた。此時に後醍醐天皇の朝政回復運動が起り、北條氏の鎌倉政府は倒れたけれど、實力を有たぬ公卿階級の統治は再現せられる筈がなく、結局、武士階級の聯盟ともいふべき室町政府が設立せられた。

(四) 領地制時代

室町時代は經濟社會史的に觀れば、鎌倉時代の延長の如きもので、殆ど全く差別がないやうであるけれども、前代が小規模の知行制度であつたに對し、此時代には大規模の知行地が発生し、一人にして數箇國を知行するが如き大名の現はれた點が異つてゐる。いはゞ室町時代は、江戸時代の封建國家への過渡のやうなものであつた。晩期に現はれた群雄割據、土一揆、宗教一揆等は普通の歴史家が當代を『暗黒時代』と呼ぶ理由であらうが、他面から觀れば從來貴族に蹂躪されてゐた民衆が自覺して活躍を始めた時代で、社會史上極めて興味深い時代である。また商業が發達して海外貿易が盛んに行はれ、海外に植民地を有つに至つたこと、それが倭寇に誘導せられたことなども、此時代を特質づける重要な事件であつた。今それらについて簡単に述べよう。

(a) 大名領地の擴大——後醍醐天皇の建武中興運動が成功して鎌倉政府を倒すことの出來たのは、武士がそれに參加した爲めであつた。けれども其結果は、武士階級に都合が悪かつたので、彼等は其代表者たる足利尊氏を擁して武士の共和政府を設立せしめた。尊氏は偉大なる人格の所有者で、ともかく

も一時群雄を制馭する事が出来たけれども、吉野朝と京都朝とが對立して、多年に亘つて抗爭した爲め、二代、三代の間は戦争の絶え間がなく、従つて人心を收攬する爲めに過大の領地を大名に與へたりした結果、次第に大名領地の擴大を來し、政府は集權の力を失つて群雄の割據を見るに至つた。

宮方の將士には楠木氏や菊池氏のやうに、累世的、共同的に活動した忠誠のものが少くなかつたが、武家方に屬する諸大名には利己的なものが多く、單に室町政府に對して忠誠でなかつたのみならず、同族すら相排擠する醜態を演じた。それ故に武家方の諸大名は只だ領地を増加するのが目的で、其行動にはどんな道徳的根據もなかつた。一例すれば尊氏歿後、京畿地方には足利氏の一族、畠山、細川、斯波、石堂、仁木、一色らの諸氏が數箇國を奄有し、中國には山名、赤松、武田、大内、京極らの諸氏が大きな領地を有つてゐたが、彼等と足利氏との關係は頗る薄弱なもので、朝の黨與も手を翻せば夕べには仇敵となつた。山名時氏の如きは尊氏の幕下に屬して軍功を立て、侍所職を授けられ、因幡、伯耆の守護となつたが、義詮の時代に背いて宮方に付き、丹波、因幡、美作を席捲した

ので、義詮は意を屈してこれを招降し、求める儘に因幡、伯耆、丹波、丹後、美作、五箇國の守護に補した。かうした風に大名の領地が段々と擴大して、鎌倉時代に於ける小規模な知行地が次第に影を失ふに至つた。

(b) 社會階級 — 室町時代の社會階級は前代に比して殆ど異つてゐない。けれども前代には尙ほ社會上に高級の地位を占めてゐた公卿階級は其生活の資源たる莊園を武士に横奪せられた爲め、衣食にすら窮して都落ちをするものが少くなかつた。周防の大内氏にはさうした食客が充滿してゐたといはれる。少將水無瀬親具が宮中へ伺候する時、指貫を貸してやつた有職家の山科言繼は、自身も持明院規基から狩衣を借りて宮中へ伺候した。常盤井殿が秋になつても着る物がなく、蚊帳をぐる／＼巻きにして客に會つたのは有名な話である。公卿の領地が武士に奪はれていつた徑路は、一卷の『桃花蕊葉』を見ればよくわかる。

武士階級は鎌倉時代に於いては、御家人と非御家人とに分れ、前者は幕府から一定の封地を受ける代りに、軍事其他について幕府に義務を負ひ、後者は幕

府に屬せざるもの、或は朝廷に屬するもので、幕府に對して何らの義務を負はなかつた。室町時代に於いては、此關係が大分亂れ、主従の紐帶は必ずしも堅固ではなかつた。大名には國持、準國持、外様などの名稱があつたが、それらは多く戰亂に乗じて擡頭した成り上り者で、傳統の力よりは腕づくの實力で地位を得たのであるから、教養なく、趣味なく、情愛なく、たゞ自己を擴張して享樂的生活を營むとを目的とした。これらの大名に従屬するのが侍の階級で、農民から出た者や浮浪人から出世した者も少くなかつた。大名も武士も打ち續く戰亂の爲め、經濟苦のどん底に陥り、已むなく農民から重税を搾取した。

農民は此時代には凡下、地下など、いはれ、住地の移轉、其他の自由を奪はれ、いはゆる『農奴』の位地にあつた。農民に課せられた兵糧米は、鎌倉時代には段別五升(五十分の一)であつたが、室町時代には一斗二升五合(二十十分の一)となり、其上に年貢が徵發せられたのである。年貢は後北條氏の五公五民が無比の低率で、民衆が其領内に蝟集したといはれるが、高率のところでは七公三民といふのがあつた。あまりの重税に堪へかねて住地を脱走する者があつた

が、それらは盜賊と同罪であり、逃走者の妻子は領主に抑留されて農婢となり、或場合には賣買されたりしい。年貢の未納者には妻子を賣らせてそれを上納させた。また妻子を籠に入れ、水に浸して呵責することもあつた。或大名では年貢を村落團體の連帶責任として、不納の場合には莊屋や名主を重科に行ふことを規定したもののさへあつた。かうして農民は一家離散の憂目を見て、或者は流民となつて都へ志ざし、或者は乞食となり、或者はヌキとなり、竊盜となり、強盜となつた。時代晩期には人買ひ商賣すら出來、婦人を誘拐して湊へ賣り飛ばすことを職業のやうにするものすら現はれた。寛正年間の饑饉に、京都の市街は餓孚で充たされ、鴨河の濱には死體がころ／＼と轉がり、積み累つて河水を堰き止めた。二箇月間の死者が八萬二千に上つたといふのを見ても、どんなに民衆の生活がみじめなものであつたか分る。

此時代にはもはや奴隸制度は消滅してゐたが、其代りに穢多の階級が現はれ、座に似た組織を以て特定の仕事に従事した。

(c) 土一揆と宗教一揆——室町時代の社會現象として注目すべき一つは一

揆の頻繁に起つたことである。土一揆は土民が徳政令の發布を幕府に要求する爲めに起した暴動であつた。土一揆は正長年間から文明年間の頃まで殆ど連年勃發し、中には數千人の集團から成るものもあつた。土一揆發生の動因は色々あらうけれども、(1)重税の負擔に堪へかねたこと、(2)土倉、酒屋、寺院などに對する反感、(3)福利平均の觀念などで、其手段は僧兵や武士の戰爭を摹倣した。最初の土一揆は正長元年に奈良と京都とで勃發し、暴力で貸借契約を破棄し、抵當物件を奪還したりしたが、それは忽ち近江、山城、大和、河内に傳染した。永享五年には炭山の堺についての争から土一揆が起り、嘉吉元年のそれは洛中洛外の堂舍佛閣に楯籠つて、夜もすがら鬨の聲をあげ、若し徳政を行はないならば堂舍佛閣を焼き拂ふと威嚇した。かうした例はいくつもあるが、枚擧する邊がないほどである。要するに綱紀が弛んで、政府に威信がなく、民衆は自己の力を以て直接に經濟苦から免れようとしたもので、所謂『下剋上』思想の一つの體現であるとも見てもよい。

土一揆とは異り、しかも精神に於いて似てゐるのが一向一揆、法華一揆である。北國に於ける一向一揆は、本願寺宗徒が領主富樫氏の不公平に對する反抗から起つたもので、長享二年六月に富樫軍を破つて政親を自殺せしめた。それに力を得た一揆軍は、越中から能登に入り、更に轉じて越前を侵し、永正三年七月には三十萬の大集團を作つて朝倉貞景と戦つて敗れた。また京都の法華宗徒は本願寺宗徒と反目し、三萬の一揆軍を編成して、天文元年八月に山科の本願寺を包圍攻撃した。此他、織田信長も徳川家康も一向一揆にはひどく苦しめられたが、これらは宗教上の目的もあるにはあつたが、裏面にはやはり見えない經濟上の要求も潜んで居り、被治者の治者階級に對する反抗であつたとも見られる。

(d)倭寇の海外侵掠——文永、弘安の元寇は、我國民をして一致して國難に當らしめた結果、一方に於ては國家觀念を強め、他方に於ては排外觀念を懷かしめたが、引續き起つた内亂の爲めに、それらは一時國民の腦裏に潜在して表面に現はれなかつたが、官方と武家方との抗争が逐年烈しくなり、官方の勢力が追々削減されてゆくと同時に、經濟上の苦痛もまた段々深刻になつて來たの

で、九州の宮方はそれを緩和する爲めに海外に活動を試みることにした。朝鮮の史書に依ると、倭寇が初めて半島の南部を侵掠したのは、高麗忠定王二年（正平五年）だとあるが、これより先き、元の世祖至元二十九年（正應五年）六月に日本船が慶元路に達したとあり、同年十月には四明に至つて互市を請うたとあり、其後者について『元史』は「日本舟至四明。求互市。舟中甲仗皆具。恐有異圖。詔立都元帥府。令哈刺帶將之。以防海道。」と記してゐるから、刀劍其他武器を貿易品として満載しゆき、若しそれらが高價に賣れなければ侵掠をしたと思はれる。現に成宗の大德十一年（德治二年）に慶元路に入つた日本人について、『慶元路官。與倭商有関。一城悉災。』といふ記述が残つてゐるから、後に明代に沿岸を侵した倭寇と同一性質のものであつたと知られる。

かうした風に鎌倉時代晩期から發生した倭寇は、吉野時代に一層猛烈になり、高麗及び明の沿岸を連年侵掠し、室町時代後期に至つては明人王直を指揮者として、數百隻の船隊を以て浙の東西、江の南北を襲撃し、明政府をして其防禦に國力を殫し、遂に財政困難に陥らしめた。足利義滿は重商主義の立場か

ら明と通交して、倭寇の鎮壓に努力したけれども、其效果なく、豊臣秀吉の時代に漸くこれを閉息せしめた代り、一層組織的な大規模の倭寇、即ち征明軍を起すに至つた。中世の海外貿易はどここの國でも皆な倭寇と等しく、いはゆる『半賊半商』(Half pirates, half merchants)であつたが、次第に國際道德の觀念が發達した結果、軍國主義(Militarism)が影を没して、重商主義(Mercantilism)が勝を占め、近世の世界貿易が展開するに至つたのである。

(e) 海外貿易の展開——海外貿易は平安時代から既に存在し、太宰府に於いて唐宋の商船の齎らした物資を交易したが、鎌倉時代にはそれが一層盛んになつたらしく、室町時代初期には足利尊氏が天龍寺船を元に送つて、商況の如何に拘らず現錢五千貫を天龍寺に納めしむる勅許を得た。同船は興國二年十二月、多數の什器を齎して歸航した。正平二十三年（洪武元年）元が滅んで、明が興り、其太祖は翌年書を我邦に送つて修好を求めたが、征西將軍懷良親王は其書辭が無禮であつたので之を卻けた。尋いで建徳元年（洪武三年）に明政府は趙秩を使節として我邦に來つて倭寇を禁止すべきことを要求せしめたが、

懷良親王は僧祖來をして趙秩を送つて明に至らしめた。然るに同二年、明政府は僧祖闡、克勤ら八人を遣はして土産及び大統曆を贈らしめたので、懷良親王は怒つて使者を拘留すること二年に及んだ。其間に祖闡らは親王が眞に日本の統治者でないことを知つて、天台座主によつて京都に詣らんことを請うたので、足利義満は彼等を京都に招いて優遇し、倭寇は貪商の仕事で政府の干與せざるところである旨を復奏せしめた。それから數回使節の往復があつたが、倭寇は却つて烈しくなるばかり、國書は益々倨傲を極めたので、明政府は遂にしびれを切らして、弘和元年(洪武十四年)に使節を出して、日本が若し忠誠の意を表はさなければ軍を起してこれを征するであらうと威嚇した。其前年即ち天授六年に懷良親王が僧如瑤を遣はされたのに酬ひたものであらう。懷良親王の上書が『明史』に載つてゐるが、實に強硬、否、剛毅なもので、中に『又聞。陛下選股肱之將。起精銳之師。來侵臣境。水澤之地。山海之洲。自有其備。豈肯跪途而奉之乎。』などいふ文句がある。其意氣の烈しさ、自信の強さが、明政府をして日本を不征國の中に加へしめたので、若し此時我邦が軟

弱な態度を示したら、新興國の勢を以て明はどんな言ひ懸りをして來たかも知れない。^(九九)

僧如瑤を明に遣はされた懷良親王の意中は明瞭でないが、『明史』に依れば宰相胡惟庸と謀を通じ、僧如瑤をして兵卒四百人を率ゐて、巨燭の中に火藥、刀劍を藏めて入貢せしめ、機を見て起つ計畫であつたやうである。あまりに芝居じみてゐるが、それぐらゐのことはしかねまいものでもなかつた。

しかし、元中九年に、吉野、京都の兩朝が合一し、足利義満が全國に號令するやうになつてからは、明國に對する態度を一變し、倭寇を禁遏し、貿易を獎勵して、政府の財政の窮乏を救ふことにした。義満の明主に贈つた國書は實に卑屈なもので、全く自主的精神を失つてゐるが、それによつて外資を巧みに輸入して、財政難を切りぬけたことは争はれない事實である。足利義政の如きは國帑の窮乏を訴へて、明政府に銅や書物を贈つてもらひたいと申し込んでゐる。まるで乞食のやうな態度で、私達は今日さうした國書を読むと、慙汗の背をうるほすのを感じる。⁽¹⁰⁰⁾

豊臣秀吉が天下を統一してからは、従来支那や朝鮮に活動した不逞の邊民は、手も足も出なくなり、純粹の貿易商人が現はれて、東アジャ及び太平洋の諸島と貿易した。貿易船は海賊船から區別せられる爲めに、御朱印を得たので『御朱印船』と稱した。御朱印船には色々の型式があり、日本型、歐洲型、支那型、折衷型などあつたが、いづれも媽港、呂宋、瓜哇、安南、占城、柬埔寨、暹羅、太泥バタヴィアなどに向つて航路を開き、南方の珍奇を齎らして巨利を博した。それらの諸地には大方『日本人町』がつくられてあつた。日本人町はいはゞ海外植民地で、中には繁榮したものもあり、日本人の勢力は世界の半分を蔽うてゐたが、江戸政府の鎖國政策によつて其跡を絶つたのは遺憾である。

(f) 都市の發達——京都は兵亂の爲めに衰頹し、殊に應仁の亂以後は甚だしく、市中から雲雀が舞ひ上るほどの有様となつたが、室町時代晚期に地方の大名の城下は肆店櫛比する繁華の町となり、周防の山口、尾張の清洲、相模の小田原などは中でも賑やかであつた。織田信長が安土に城アスカ構へてからは、安土山下町(八幡)に商人を招き、陣取を禁じ、普請、傳馬、徳政を許すなど、心を盡して保

護を加へたから商業が發達した。諸大名の領地にはそれぞれ商業の座があり、そこで日用必需品の專賣をなさしめ、座以外のものは脇賣、振賣といつて嚴禁した。海港としては博多、兵庫、堺が著名であつたが、堺の如きは外國船が入港して貿易が営まれたので、富者が多くそこに居住し、室町政府の財政を左右する力を有つてゐたといはれる。堺はそれらの日に獨立した一箇の自由都市であつて、會合衆、魚屋貸衆の制度を設けて、一切の公事訴訟を自分達で決めたのみならず、周圍に濠を穿ち、雇兵を以て自ら衛つた(二〇三)。藥屋から出立した自造自就の大名小西行長、茶道を中興して秀吉の權勢にすら屈しなかつた千利休、南洋に貿易を試みて巨利を博した魚屋助右衛門の如きは、實に堺市民を代表する偉人であつた。

第四節 工業經濟時代

工業經濟時代の特性は、大資本を工業に放下する現象で、資本の發達に伴つて自ら發現するところの經濟様態である。かうした時代には資本の所有者

たる資本家、労働者を雇役する傭主、工場を支配する支配人が發生する。此時代には注文を待つて少量の生産に従事することなく、企業的に巨額の商品を製造してそれを貯藏し、市價の騰貴に乗じてそれを市場に賣り出したり、大工場を設けて大注文に應じたりする。此時代の經濟單位は、地方的から全國的に進み、國民總體を一個と見做すが故に、これを國民經濟ともいふのである。地方經濟にあつては、生産及び消費が一地方に局限せられるけれども、國民經濟形態に於いては、生産と消費とが同一村落に局限せられることなく、甲地方の生産が乙地方に消費せられ、乙地方の生産が丙地方に消費せられるといふ状態を呈する。かうした時代には經濟上の利害が廣大な範圍内に於いて一致するから、自然、強力な政治組織を以てこれを保護する必要がある。

(一) 江戸時代

鎌倉時代に於ける小規模の知行制は、室町時代に大規模の領地制に變り、安土桃山時代を経て、分權的封建制度が次第に集權的封建制度に發達し、江戸時代に入つて完全なる封建國家が出現した。いはゞ江戸時代は鎌倉時代以後

の封建政治の總結集であつたのである。

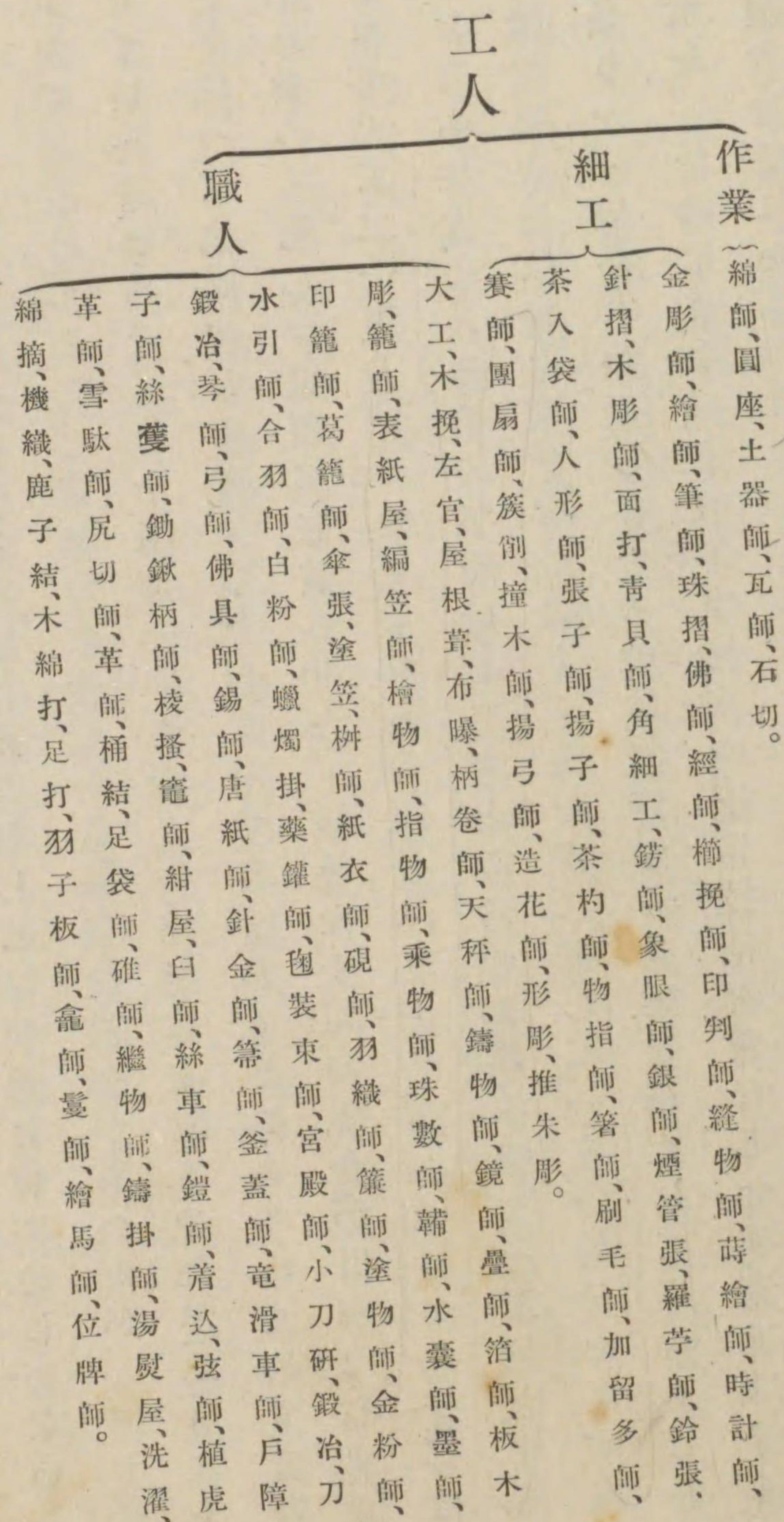
江戸時代中期以後に於いては、生産と消費とが一地方を超えて他地方に及んだから、學者の中にはこれを工業經濟の時代だと觀るものもあるが、國家の性質が封建的であつて、經濟の單位は無數の封建國家即ち各藩にあつたから、嚴密な意味に於いてはこれを國民經濟といふことは出來ない。けれども此時代には既に若干の工業資本が放下せられ、全國を目當の商品が製造、貯藏、放賣せられたから、これを早期工業經濟様態と見ることは否まれなと思はれる。今、江戸時代の社會經濟的現象を簡單に述べて見よう。

(a) 鎖國政策——下剋上の利己的、軍國的社會を收拾して、統一ある文化主義の封建國家を建設した徳川家康は、經濟的觀點から海外貿易を奨勵して、桃山時代の朱印船制度を踏襲し、大名及び貿易商をして海外に渡航して交易に従事させ、自己もまた巨額の舶載品を貯藏して、市價の騰貴に乗じて市場に賣り出させたりしたが、三代家光の時代に基督教を禁止する必要から鎖國政策を實行して、邦人の海外に渡航することを禁ずると共に、和蘭人、支那人の外、一切の

外國人の我邦に渡來することを許さなかつたので、安土時代以來鬱然として勃興した世界的思想は頓に消散して、日本をけち臭い農業的封鎖國にしてしまつた。これが爲めに富を世界に求めて、萬里の波濤を凌いだ世界貿易主義の日本人は、再び島國內に跼蹐して自給自足に甘んじなければならぬ破目に陥つた。

(b)工業の進歩——しかし、自給自足の必要は國産の奨勵を結果し、國産の奨勵は固有工業の進歩を促し、織物、漆器、陶器、金屬器、製紙、印刷の諸方面に於いて著しい發達を見た。そののみならず、時代の晩期にはヨーロッパ式機械工業を創始して、武器及び艦船の建造にすら従事したが、多くは道具を用ひる手工業であつて、其範圍に於いては生産の限界を極めたといつても差支へないほどの發展ぶりであつた。

工匠の専門化はこれが爲めに江戸時代に於いて最も著しく、其早期に於いてさへ、優に百五十種の上に出てゐた。今それらの中から目ぼしいものを選んで表示すると、



の如くなる。これらの工業は大抵家庭に於いて營まれたが、中には婦人も多く交つてゐる。それらの日には製産品を蒐集して倉庫に貯藏し、隨時放賣する商人があり、多くは農民が農業の餘暇に生産した品物、或は資本を貸付けて

造らせた生産物を集貨して賣出した。これらは一種の資本的經營である。専門の技術家の間には、享保の頃既に同業組合があつて、(1)月行事を選舉して新規の品物を造り出さないやうに組合員を監督せしめ、(2)新たに業務を開いた者は組合に加入せしめ、(3)新組合員に對しては營業を妨害せしめないといふ規約を設けてゐた。^(一〇四)京都では古くから各種の組合があつたが、一例すれば大工組合は、初め大工を十組に分けて十人の棟梁に支配させたが、其中三人だけが残つて他は皆な家資分散をしたので、名ばかりを組合名に止めて、實際は組合員の入札した組頭に肝煎させた。後また十組の組合が出来たので、併せて京都大工二十組といつた。^(一〇五)これらの組合はヨーロッパのギルド (Guild) に同似を有ち、親方、職人、徒弟の三階層をなすところの工業家庭を一單位とする結合體で、組合員は獨占權を有つ代りに支配者に對して一定の給付をなす義務を負うた。組合に加盟しないものは、官憲から營業を禁止してもらふことも出来た。徒弟は皆な一定の年季約束の下に技術を習得し、年季満了以前に任意親方を離れたものは、仲間外れとして組合員から雇傭されなかつた。

(c)町人階級の擡頭——商人は時代の初めから政府の保護を受けて専賣に従事したものが多く、それらはいづれも巨萬の富を致した。糸座の十人を初め、金銀座の後藤庄三郎、呉服師の後藤縫殿、茶屋四郎次郎、伊勢の角屋七郎次郎、魚問屋の森孫右衛門らは其顯著なものであつた。^(一〇六)

かうして此時代に商人の数が殖ゑ、活動の範圍が擴まり、問屋、仲買、小賣などの層位が出来た。問屋は一定の商品の大量取引をなすもので、同業者間には聯絡があり、大分投機的性質を帯んでゐた。江戸の十組問屋、大坂の二十四組問屋^(一〇七)などは有力な商業團體であつた。仲買は問屋から商品を買取つて小賣商に賣渡したり、生産者から買ひ取つて問屋に賣渡したりした。小賣商は消費者に商品を賣るもので、中には大規模の營業をしたのもあつた。これらの外、江戸の札差、大坂の掛屋は、諸大名の米穀を一手に引請けて販賣し、武士階級の間に非常な勢力を有つてゐた。

江戸時代は一の島原一揆を除く外、三百年を通じて平和であつたから、各地方の交通が自由になり、従つて商品の流通が全國的になつた。中でも米穀は

國民的商品であつたから其流通範圍は極めて廣く、廻米の形式で全國から大坂と江戸に集り、大坂の堂島には正米取引所が出来て、日本國中の米價を支配するとなつたが、後には限月取引が行はれて、大坂の外、江戸、京都、名古屋、大津、伏見などの大都市ではさうした種類の市場が現はれた。

此時代はもはや純粹の貨幣經濟時代で、分限者といへば貨幣の蓄積者を意味することになり、政府は金銀錢座の規定を設けて貨幣を統一し、紙幣のみは各藩の發行に任せ、それが即ち藩札である。かうした貨幣の普及は、自から信用制度を發達せしめ、兩替屋、名目金、頼母子講などが大坂を初め各地に現はれた。兩替屋は今日の銀行と同じく、預金、貸出、手形の振出、爲替などを取扱つた。

江戸には紀國屋文左衛門、奈良屋茂左衛門の如き成金があらはれ、大坂には淀屋辰五郎、加賀には錢屋五兵衛の如き大富豪が現はれ、奢侈と放膽とで後世に名を残したが、實着に働いて産を累ねたものには三井、鴻池の如きがあり、今日も尙ほ實業界に雄飛してゐるのを見る。

(d) 農民の生活——江戸時代に於いては、民衆を四つの社會階級に分けて土農工商の順序を立てた。農民は士に次ぎ工匠や商人よりは上位にあつたけれど、『土百姓』と呼び捨てにせられて、『素町人』と大差のない待遇を受けてゐた。只だ江戸時代の財政經濟は全く農民の生産に依存したが故に、表面では政府から重視されてゐたやうであるけれど裏面では殆ど奴隷視され、大名からは搾取の乳牛のやうに、士からは斬捨御免の對象のやうに視られてゐた。徳川家康が毎年秋季に代官に云ひ聞かしたとは、『兼々も被仰聞る、通り、郷村百姓共をば死なぬ様に、生きぬ様にと合點いたして、收納申付る様にと有之上意』^(一〇九)であつた。これは本多正信が百姓を治める法は、先づ各人所有の田地の境目を正し、然る後に一年間に要する米の高を見積らせ、收穫高から所要高を差引き、其殘高を年貢として納めさせるとである。農民には餘材あらしめてもよくなく、また不足せしめるのもよくないといつたのと同轍である。

農民は一列に百姓と呼ばれたが、其中にも區別があつて、四段の階層を呈してゐた。農村代表機關を總稱して村役人といつた。(1) 村役人は大庄屋、名主

(關西では庄屋、組頭、關西では年寄、百姓代から成り立ち、名主以下を村方三役人といつた。名主は世襲のものもあり、また選舉のものもあつた。名主の中には眞に農民の利益を代表したのもあつたが、時としては支配者に加擔して、農民を搾取しようとしたものも現はれた。前者の例には屢々木内宗吾が擧げられ、後者は往々百姓一揆を惹起した。(2)惣百姓は地主及び自作農で、此中には郷土、草分、石持、根生などが含まれる。郷土は武士が土着したものであり、草分は土地の開墾者で、いはゞ舊家である。石持は大地主、根生は小地主である。平百姓といはれたのは根生のことである。(3)普通に水呑百姓といはれたものは自分の土地を有たぬ貧農である。(4)庭子といふのは、大地主に隷屬したもので、いはゞ農奴に近い性質を有ち、賣買されたこともある。

農民に課せられた租税は重に地租で、其税率は大抵五公五民であつた。土地の品位は上中下の三種あり。一步の立毛(穫稻)は一升二合、一升、或は八合といふ風に差異があるが、それらを平均して一步一升、五合摺と見積ると、一反三百歩で一石三石が穫られるから、それから五合摺を差引くと、米一石五斗が殘

る。其中七斗五升を公納とし、七斗五升を百姓の作得とするのが普通であつた。しかし、これは正税であつて、此外に小成毛といつて多くの附加税を徵發せられ、道路の修築、橋梁の架設、宿驛の遞送等を課せられ、負擔の重さに堪へ切れずして一揆を起したこともあつた。

(e)労働者——一定の技術も有たず、また一定の土地も耕さず、雑役に服する一階級が農工商以外に發生した。日傭、人足、雇人などがそれである。(1)日傭は建築、土木工事、運搬、掃除、其他の雑役に使用する爲めに臨時に雇傭せられたもので、四人の町人に管理せられる日傭座から鑑札を受け、月次に二十四文を座に納付した。此座の發生は寛文の頃からである。(2)人足は駕籠、車、其他によつて荷物又は旅客の運搬に従事したもので、各街道筋に多數に認められ、一般から雲助と呼ばれてゐた。(3)雇人は常傭の下男、下女で、武家又は町家、農家に雇傭せられた。武家では無制限であつたが、民家では十年以上の年季奉公が禁ぜられてあつた。(4)此外に上州、西陣などの機場では、織子といつて、十年以下の年季約束で雇傭せられ、主として機織に従事し、従として雑役に服する

ものがあつた。これらの四種は、近世の工業労働者、下級労働者の先驅をなすもので、原始的なプロレタリアートと見做すことが出来る。

(f)以上四民の外に、穢多及び非人の階級があつた。これらの階級は四民との婚姻を禁ぜられ、其職業もまた制限せられて、草履造りや皮細工や墓堀りや夜番や刑の執行やに従事した。

(g)百姓一揆——江戸時代早期に於いては、幕府の財政が豊かであり、従つて民衆の經濟生活も平安であつたが、中期以後重税が課せられるに及んで、其苦から免れる爲めにいはゆる「百姓一揆」を起した。百姓一揆は大抵一村落の農民が數箇村の農民を勧誘して、城下に押寄せて免税或は減税を請うたもので、飢饉の後などに多く勃發した。農民は法律上武器を携帯するものが許されてゐなかつたから、竹槍や鋤鍬の類を提げ、蓆の旗を立て、暴動に加はつた。江戸時代を通じて百姓一揆は數十回も起つたから、一々それらを記述することは煩はしいが、其中二三の例を擧げて見よう。

古いところでは正徳四年に武藏是政に一揆が起つて、手々に弓鎗などを携

へて下小金井に押し寄せ、竹樹林を伐り、田畑を踏み荒らし、農家を壊したが、これは草刈場の争ひから起つた騒動で、重税から起つたものでなかつた。

明和元年乃至二年に亘つて、上野、武藏の農民十萬人が一揆を起して、長柄の鎌を持ち、竹鎗を杖につき、簑笠を着け、米一俵づゝを背負ひ、貝を吹き、鯨波を揚げて騒擾し、富家を破壊したりした。此一揆の動因は複雑で、(1)近年天領、私領とも年貢の取立てが増し、いくら窮状を訴へても取上げてもらへないこと、(2)所々の秣場が田畑に開墾されて、農民が肥料や秣にする草刈場がなくなつたこと、(3)従つて肥料が缺乏して穀物の登りが悪いこと、(4)朝鮮の使節が來朝して國役金が課せられ、従つて農民の掛り物が増したこと、(5)日光山百五十年忌の爲めの傳馬や中仙道の傳馬やに新加助郷役を命ぜられて其負擔に堪へないことなどが主なるものであつた。此一揆は範圍が可也に廣く、人數もまた少い方ではなかつた。彼等の聚合した場所と人數とを擧げて見ると、赤城山に一八、五〇〇、太田山に五、七一一、岩松原に七、四一一、瀧山に一六、三〇〇(以上上野)、三ヶ尻山に九、四一六、人見山に五、八〇〇、吉見山に八、四〇〇、熊谷原に二、四〇〇

○(以上武藏)であつたといふ。幕府は鎮壓に苦心した。俗にこれを天狗騒動といつた。^(一三三)

天明三年に淺間山が噴火して、上野と信濃とは大損害を被り、農民らは衣食の道に窮して一揆を起し、三百、四百、或は千人、二千人の團體を作つて城下に押し寄せたが、上州安中と信州上田とでは可也猛烈な騒動があつた。^(一三四)

かうした一揆は殆ど毎年各地に起つた。農民は「死なぬやうに生きぬやうに」武家階級から支配されてゐたから、凶年でも來れば忽ち衣食に窮せざるを得なかつた。いくら温順な農民でも一家が離散しなければならぬやうな目に逢へば、ちつとして死を俟つてゐるわけには行かなかつた。かうして一揆は度々起つたのであるが、度々起れば習ひが性となり、次第に官憲を恐れぬ心を馴致して、初めは單に饑餓から免れよう爲めの哀訴であつたものが、後には政治的意味を有つた嗷訴になり、封建統治は既に江戸時代の晩期になつて崩壊の豫兆を示してゐた。天保の大鹽平八郎の亂の如きは其一つである。

(h)米騒動——百姓一揆が農村に於ける社會的矛盾の象徴である如く、都市

に於いてはそれの現はれとして米騒動が勃發した。米騒動は一に「打ちこわし」とも呼ばれ、米價が騰貴して細民がそれを購ふとの出來ない場合に、隊伍を組んで米屋や酒屋や質屋や富豪の邸宅、土藏を破壊し、穀類、酒類、其他を掠奪する直接行動であつた。天明七年に於ける江戸の米騒動は代表的のものである。同年五月上旬から米の小賣値段は百文につき三合五勺乃至三合になり、市民は活計が立たないので救恤を願ひ出たけれど取り上げられなかつた。剩へ米屋仲間では米がないといつて賣り出さないもので、市民は餓死するより外に道がなかつた。と、二十日頃から誰れいふとなく寄り集つて、晝夜の別ちなく江戸市中の米屋を破壊し、其數は凡そ八千軒に上つた。質屋も酒屋も傍杖を食つて打ち壊された。幕府は數日の後やつと伊奈半左衛門に命じて市民に賑給せしめ、騒動は漸く収まつた。^(一三五)此騒動は五月十八日に本所の扇橋の玄米屋を破壊したのが初めであるが、二十日の夜から十七八歳の巨身の青年が現はれて、暴動團體の指導者となり、大八車で戸を衝き割つたり、片手で土藏の金網を引き破つたりしたが、騒動が鎮靜すると何處かへ行つてしまつて、誰

れ一人其名を知るものもなかつた。^(二七)

江戸の此騒動は大坂のその波及で、大坂では既に五月十日から打壊しが初まり、京、奈良、郡山、伏見、堺、山田、静岡、甲府、石巻などにも引續き起り、殆んど全国的のものとなつた。原因は火事、凶作、米價騰貴など色々あつたが、やはり紀綱が弛んで、統治に虧隙が生じてゐた結果と見なければならぬ。『日々御救相願候得共御取揚ゲ無之』とか、『大庄屋を以て願出づといへとも御聞濟なく』とかいふ文句は、民間に不平の鬱積してゐたことを示すものである。かうした百姓一揆、打壊しが、年々各地で起つた有様は、一部の『浮世の有様』を見ればわかる通り、経済的にも政治的にも幕府は瓦解すべき運命を迎へつゝあつたのである。其運命を最も顯著に示したのは大鹽騒動であつた。

(i)大鹽平八郎の叛亂——天保六年は凶作で、米價が大に騰貴し、八月末には甲州の村々で一揆が起り、鎮靜の爲めに諏訪や江戸から軍隊が繰出されたほどであつた。九月に入ると米價は更に暴騰して、江戸では百文につき三合、京都も同値で、大坂はいくらか安くて先づ四合といふ相場であつた。江戸では

救小屋が出来、市民は大根の葉を米に混ぜて食つたりしたが、大坂には何ら救護の施設がなく、元來乞食の巢窟であつた長町あたりには細民が充滿し、京都から流れ寄つた者だけでも相當の多數に上つた。玉造附近の住民も段々仕事を失つて衣食に窮し、乞食になつて市中を貰ひ歩いたが、市中でも施しをするものが少くなり、餓死者が毎日一兩人ないことがなかつた。裏店住ひの者の妻や娘は惣嫁に身を賣つて口過ぎをしたりした。背中に子供を負つた四十女が、辻賣りの焼甘薯屋に一切れの焼甘薯を合力して斷られたのを通りすがりの雪駄直しが憐れんで百文を與へたら、それで焼甘薯を買つて子供に食はせた。通行人がそれを見て、如何に飢ゑたとて、非人から錢を貰ふなどは腑甲斐ない女だと罵つたので、女は面目なく思つて、天満橋から大河に飛び込んで親子心中をした。^(二八)

かうした有様を見るに見かねて、天満與力大鹽平八郎は子の格之助に町奉行跡部山城守を説いて、市民を救濟せしめようとしたが、跡部は平八郎を召見して狂氣呼ばりをしたので、平八郎は意を決して奉行所を退き、藏書を賣拂つ

て金六百兩に換へ、天保八年二月十八日、窮民を招いて一人毎に一朱を與へ、明日から土木工事を起すから助けに来て貰ひたい、來た者には百疋づゝくれるといつて歸らしめた。其人員は約三百人あつた。平八郎は十九日に東照宮へ參詣する跡部らを殺し、奉行所を留守する子の格之助と弟子の小泉淵二郎とに、府庫を開いて窮民を賑恤させるつもりであつた。密告者があつて陰謀が奉行に知れた爲めに、計畫通りにはいかなかつたけれど、先づ天満を焼いて難波橋から船場に入り、所在に放火して富豪の宅を焼き拂つた。大勢に小勢で、大鹽の軍は敗れ、平八郎は八軒家から舟で油掛町に逃れて自殺した。しかし、これが爲めに奉行所は富豪に命じて窮民を賑恤せしめた。

大鹽の叛亂は深い印象を民衆の頭腦に刻み込み、爾後引續いて諸國の百姓一揆中には『大鹽門弟』と大署した旗を掲げたものさへあつた。大鹽の此行動は同時代の人々の同情を牽き、『義人』を以て目されたところから見ると、そこに大きな社會政策の缺陷があり、政治上の革命が起らなければならぬ因子が潜在してゐたと見ることが出来る。

(j) 武士階級の經濟生活——武士階級は社會の最上層を占めたが、細かに其構成を見ると四つの階層をなしてゐた。(1) 將軍は武士階級の總統轄者で、天皇の統治權を委任代行した。其収入は八百萬石を超えたが歳出は屢々歳入を超えたので、時々貨幣の改鑄を行つて其差金を利し、或は大名から獻上金を徴發し、或は富豪から冥加金を搾取することによつて幕府の財政を處理した。(2) 大名は地方領主で、將軍から朱印状を受けて封地を支配した。其經濟の苦しかつたことは幕府と差異がない。(3) 旗本家人は幕府に直屬する侍で、前者は約二千人あり、後者は約五千人あつた。兩者の差は目見以上か以下かに係つて居り、共に一萬石以下の封祿を幕府から受けた。大身の者は九千九百石も領し、小身者は百石又は百俵ぐらゐのものもあつた。(4) 侍の中、大名に直屬するものは陪侍、足輕の百人も養はねばならなかつた。(4) 侍の中、大名に直屬するものは陪臣といつて、旗本、家人から區別せられた。此人數は幕末に四十二萬人餘あつたといふから、武士階級の中心をなしてゐたことは明らかであるが、其収入は微々たるもので、殆ど食ふや食はずといふ有様であつた。

江戸時代晩期には幕府の財政が苦しく、諸大名に獻金其他の工事を命じたから、諸大名も財政難に陥つて、侍から知行の二分の一を借り上ぐる『半知』の慣習をさへ生じた。旗本家人は初め『直取』といつて、幕府から支給せられる三季の稟米を直接に受領したが、安逸、遊情の風が募るに従つてそれを煩はしく思ひ、出入の商人に其受領を代行させたりしたが、奢侈生活の向上と共に失費多く、夏までの祿米を春に費消してしまひ、己むなく夏のそれを抵當に商人から金を借りるといふやうなことが起り、祿米受領の權利を擧げて商人に委任するに至つて、武士は全く商人に死命を制せらるゝ現象を生じた。藏前の『札差』はかうして發生し、遂に享保八年に其組合が官許せられた。^(二二〇)此關係は大名も同じことで、大名は大坂に藏屋敷を置き、『藏物』を掛屋によつて市場に放賣せしめたが、いつも賣らぬ前に借金して、全く掛屋に死命を制せられるに至つた。しかし借金を踏み倒して、御用達を破産せしめたことも多かつた。^(二二一)

(k)幕府の財政難——先づ幕府の財政を窺つて見ると、享保七年以降三十五年間は收支相償つたが、寶曆十二年から年々の年貢米は収入よりも支出が多

く、十箇年後には米の不足二一、七六四石に達し、年貢金は僅かに四三、〇〇〇兩の残高を見るのみであつた。そこで幕府は爾後屢々財政を釐革して儉約を行つたが、間もなく再び浪費に陥つて財政の困難を感じたから、明和二年以後銀貨を新鑄、或は改鑄して國用を助けた。然るに寛政五年(一七九三年)にロシヤ人が蝦夷に來るとの警報があつてから、國防に多額の支出を要することゝなり、冥加金及び獻金を徴發したが、それでも貸借平均を見ることが出來なかつた。かう竹越與三郎氏は述べてゐる。^(二二三)

貨幣改鑄の出目はどれほどあつたかといふに、天保三年のそれだけでも三九四、二〇〇兩の利益があつた。前後を合せれば總體で三〇、〇〇〇、〇〇〇兩の出目があつたらうといふ。

また冥加金は度々賦課され、其總額を一々こゝに擧示することは出來ないが、試みに寶曆十年十月、大阪の町人に課したものは、五萬兩づゝを鴻池善右衛門ら十一人へ、二萬五千兩づゝを鴻池善八ら十人へ、一萬五千兩づゝを梶屋九郎右衛門ら十四人へ、二萬兩を鍵屋半右衛門へ、一萬兩づゝを小西吉左衛門ら

四人へ五千兩づゝを六十九人へ、三千兩づゝを九十六人へ上納すべきとを命じた。此人数はすべて二百〇五人、金額は百七十一萬八千兩であつた。^(二三)

かうした出目や冥加金を取り立てゝも、幕府の財政は不足勝ちであつたから、經常費を半減してこれを匡救しようとしたが、臨時費の膨脹が病根であるから、さうした生温い改革では到底財政難を切りぬけるとが出来なかつた。愚圖々々してゐる間に、開國倒幕の新運動に遭遇して崩壊したが、竹越與三郎氏もいつた如く、幕府は明治元年に倒れたのではなくて、實は文化、天保の際に倒れたのであつた。

(二) 東京時代

ロシアのアダム・ラックスマン(Adam Laxman)やレサノフ(Resanoff)や、北米合衆國のペリー(Perry)の來訪によつて、世界貿易主義(International Commercialism)の宣傳の鐘の聲を聞かされた日本は、尊皇攘夷の運動から開國倒幕の運動に急旋轉して、經濟的に既に倒れてゐた江戸政府を政治的にも倒れしめ、島國日本——それは支那の屬國のやうに世界の人々に思はれてゐた日本を東洋の

一獨立國と彼等に認めしめ、鎖國主義の島國經濟を國際主義の世界貿易に暴露せしめ、江戸時代以來擡頭しつゝあつた町人階級に資本主義的發展の途を進ましめた。舊い商工業の獨占的組織は忽然として破壊され、舊い爲替制度や貨幣制度は没落して、七百年間繼續した封建的軍國政策が斷末魔を見た。

それが明治維新の齎らした經濟的現象であつた。封鎖經濟に於いては、自給自足の小規模な家庭工業の生産の供給を以て消費の需要を充足し得たけれども、世界貿易に暴露した國際經濟に於いては、大規模の生産を要求した結果、明治政府は保護政策を採つて經濟組織の改造に従事し、金融、交通、製造、其他あらゆる事業を助成した。特に新しい歐米式文化生活に要する物資を獲得する爲めに、機械を購入し、外國人を招聘し、學校を建て、留學生を送り、歐米式工業を振興せしめる方針を執つた。製糸場、紡績工場、機械工場、セメント製造所、造船所、製鐵所、活字製造場、印刷工場、等々を設置して、新組織、新體系を具ふる生産を奨勵した爲めに、漸次農業及び交易が衰頽して、工業が經濟の中心となるに至つた。

明治時代早期に於いては、資本はまだ全く商業資本の域を脱しなかつたが、其中期以後に於いては工業資本が優越となり日清、日露の兩戰役を経て、國民經濟は駭絶的發展をなし、其晩期に於いては農業國日本は工業國日本への轉回運動を續けた。一切の生産と消費とは國民的となり、其製品は大洋を超えて外國に輸出せられ、海外貿易額は年々に増加した。

大正時代に入つて世界大戰に遭逢した日本は、一時全く工業國となり切り、製品及び貿易の狂的增加を見たが、其終熄と共に若干の衰頹を示し、好景氣の反動としての大恐慌に見舞はれたけれど、其經濟的スケールに至つては明治時代と全く桁を異にしてゐた。しかしながら其生産制度がブルジョアジイ的であつた爲めに、社會的には資本家階級と無産階級との對蹠を促し、兩者の間に深刻な生活闘争を惹起しようとしてゐる。新興階級としてのプロレタリアーは、其尖鋭な戰術を以て經濟的にも政治的にもブルジョアジイに闘争を挑まうとしてゐる。かうした一大回轉點に立つてゐる農民は、新舊兩制度の衝突から起る土地問題の矛盾の爲めに生活難に陥り、地主もまた同じく

窮狀に陥つて、在來の經濟的地位を維持するとの困難に直面してゐる。新興科學の峻示するところに従つて、從來の誤つた闘争觀を快く廢棄し、科學的確實さを有つた協同觀を採ることにはしない以上は、ブルジョアジイもプロレタリアーとも共に災禍を蒙るであらう。プロレタリアーと農民との結合は、ブルジョアジイと地主との結合に匹敵し、結局兩階級は利己的闘争の態度に出でようとしてゐる。それが現代の社會的、經濟的現象である。

しかしながら、人類の繁榮も民族の福祉も、所詮は『共存共榮』の原理を措いて他には求められない。相互の讓歩と相互の協同とが、獨りそれを齎らす。そこに私達日本民衆の歩むべき當來經濟組織への道が見出される筈だ。

第五節 摘要

以上私は先史時代から現代に至る日本民衆の經濟生活史を瞥見した。私の最も多く言を費したのは古代及び中世であつて、近世特に現代については極めて簡単に述べたに過ぎない。古代經濟はいはゞ現代經濟の出立點であ

り、基礎であり、酵母であるといふ理由でさうしたのであつて、近代を輕視したわけでないことは勿論である。如上の叙述から私達が抽き出し得るところの結論は、次ぎの五項に過ぎない。

(1) 日本民衆の經濟生活は狩獵や漁撈を主とするところの食物採集時代に其端緒を開いた。

(2) 食物生産時代の曙に於いて、日本民衆は自給自足の孤立經濟を送り、家族及び氏族を經濟單位としてゐた。

(3) 中世に於いて商業經濟の形態を具へ、生産と消費とは家族的局限を超えて地方的となり、交易の現象を呈するに至つた。それらの時代の經濟單位は村落乃至封建小國家であつた。

(4) 近世の初めに工業經濟的姿態が現はれ、明治維新後大資本が工業に放下せられるに及んで多量生産を見、地方經濟が國民經濟に發展したが、三大戰を経て、國民經濟から國際經濟に伸展しようとしてゐるのが現在の我邦の經濟様態である。

(5) 思ふに日本の地的制約は、土地生産を主體とするところの農業立國に適しない。日本人の遺傳的素質及び其文化的環境は、技術生産を主體とするところの工業立國に適してゐる。日本の將來の經濟的國是は、かかるか故に、一に、『工業的』であらねばならない。國初以來、日本民衆の營爲して來た生活の趨勢、經歷して來た歴史の傾向は、工業立國の可能を峻示してゐるものと見てよゝ。而して農業立國から工業立國への此回轉點に立つて、私達日本民衆の進むべき道筋は、私達の祖先以來經過した文化史的過程が指示するところの平和と協同との混凝土道路の外にはない。故らに階級闘争の峻路を選ぶのが賢明でないことはいふまでもない。

引用參考書

- (一) Edwin R. A. Seligman. *Principles of Economics*, p. 74 ff.
- (二) 鳥居龍藏武藏野及其有史以前、一四九頁以下。
- (三) 丘淺次郎、日本貝塚の貝類人類學會雜誌、一〇八號。
- (四) Kamakichi Kishinouye. *Prehistoric Fishing in Japan* (J. C. A. I. U. vol. ii, no. 7), p. 374 ff.

- (五) Ibid. pl. xxviii, fig. 126. 八木獎三郎、日本考古學上篇、一四三頁。
- (六) 西村眞次、日本古代社會、六三頁。
- (七) 同人、日本稻作の人類學的研究、文學思想研究第八卷。
- (八) 陳壽、三國志(魏志倭傳)。
- (九) 宮坂光次、八幡一郎下總姥山貝塚發掘調査豫報(人雜四二卷、一號)。
- (一〇) 西村眞次、大和時代、一九四頁以下。
- (一一) 延喜式(大殿祭祝詞)。
- (一二) 西村眞次、日本古代社會、一〇六頁以下。
- (一三) J. Deniker, *The Races of Man*, pp. 486, 487.
- (一四) 東大人類學教室、人類學寫真集(日本石器時代土偶の部)。
- (一五) 高橋健自、考古學、一七二、一七三頁。
- (一六) 坪井正五郎、はにわ考。
- (一七) 朝鮮古蹟圖譜、三。
- (一八) 高橋健自、河内國高井田なる藤田家墓地構内の横穴(考古學雜誌第九卷第九號)。
- (一九) 濱田耕作、出雲上代玉作遺物の研究(京大考古學研究報告第十冊參照。此書は古代に於ける玉の研究として最も傑出したもので、是非とも一讀を要する)。
- (二〇) 鳥居龍藏、苗族調査報告、一八六頁以下參照。

- (二一) 西村眞次、萬葉集の文化史的研究、四七頁。
- (二二) 同人、人類協同史、五八——六二頁。
- (二三) 前掲書、一一四頁以下。
- (二四) 日本書紀、古語拾遺參照。
- (二五) 日本書紀、卷一。
- (二六) 本庄榮治郎、日本社會史、二五、二六頁。
- (二七) 細井貞雄、姓序考。
- (二八) 本庄榮治郎、前掲書、二七頁。
- (二九) 前同書、三〇、三一頁參照。
- (三〇) 前同書、四一頁以下參照。
- (三一) 佐野學、日本經濟史概論、五七、五八頁參照。
- (三二) 延喜式、卷八(廣瀨大忌祭祝詞)。
- (三三) 日本書紀、卷二五(大化元年九月)。
- (三四) 前同書。
- (三五) 聖德太子傳曆、卷上。
- (三六) 内田銀藏、日本經濟史の研究、上卷。
- (三七) 拾芥抄、卷四(田籍部)。